

名子遺跡 1

— 第3次・第4次調査報告 —

2011

福岡市教育委員会

名子遺跡 1

— 第3次・第4次調査報告 —



遺跡略号 NAO-3 NAO-4
調査番号 0758 0802

2011

福岡市教育委員会



1. 第3次調査1区全景(東より)



2. SK03土層断面(北より)

巻頭図版 2



1. 第3次調査2区全景(西より)



2. SC126遺物出土状況(南より)



1. SX127遺物出土状況（南より）



2. 第3次調査3区全景（西より）

巻頭図版 4



1. SK303遺物出土状況（南より）



2. 調査地点遠景（南東より）

序

玄界灘に面する福岡市は、古くから大陸との文化交流の玄関口として発展してきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、本市におきましてはこれらの保護と活用に取り組んでいます。

しかし、近年の都市開発によって貴重な先人の足跡が失われていることも事実です。本市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、その記録保存に努めています。

本書は、東区名子1丁目において実施した名子遺跡第3次、第4次調査の成果を報告するものです。今回の調査では縄文時代から弥生時代の集落跡が確認され、大きな成果を得ることができました。これらは、当時の名子地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りました。心から謝意を表します。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は東区名子1丁目地内において発掘調査を実施した名子遺跡第3次、第4次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 18'$ 西偏する。
3. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系によるものである。
4. 本書で使用した遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居址をSC、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、不明遺構をSXと略号化している。
5. 本書に掲載した遺構実測図の作成は菅波正人、阿部泰之、今井隆博が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測図の作成は土器を今井、米倉法子が、石器を山口譲治、山口朱美が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は今井、山口朱美、米倉が行った。
8. 本書に掲載した遺構の写真撮影は菅波、阿部、今井が、遺物の写真撮影は今井が行った。
9. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
10. 本書の執筆は、第5章を除き、今井が行った。なお、第5章1は田上勇一郎（福岡市埋蔵文化財センター）が、第5章2は株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループが執筆した。
11. 本書の編集は今井が行った。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	2
第3章 第3次調査の記録.....	5
1. 調査の概要	5
2. 1区の調査	6
3. 2区の調査	11
4. 3区の調査	35
第4章 第4次調査の記録.....	47
1. 調査の概要	47
2. 遺構と遺物	47
第5章 自然科学分析.....	48
1. 第3次調査1区 SK03出土の赤色塊状物質について.....	48
2. 第3次調査に伴う放射性炭素年代測定.....	49
第6章 まとめ.....	53

挿図目次

第1図 名子遺跡と周辺の主な遺跡 (1/50000)	3
第2図 調査地点位置図 (1/4000)	4
第3図 調査区位置図 (1/1000)	折込
第4図 1区東壁土層図 (1/30).....	6
第5図 第3次調査1区全体図 (1/150)	折込
第6図 SK01・02・03・04実測図 (1/40)	7
第7図 1区出土土器実測図 (1/3)	8
第8図 1区出土石器実測図 (1/1、1/2)	10
第9図 第3次調査2区全体図 (1/150)	折込
第10図 2区土層図 (1/60)	12
第11図 SB211実測図 (1/60、1/20)	13
第12図 SB211出土遺物実測図 (1/3)	14
第13図 SB212・213・214実測図 (1/60)	15
第14図 SB213・214出土遺物実測図 (1/3)	16
第15図 SC126・169実測図 (1/50)	17
第16図 SC126・169出土遺物実測図 (1/3)	18
第17図 SK149実測図 (1/40)	19
第18図 SK149出土遺物実測図 (1/3)	19
第19図 SX103・104・105・107・109・110・111・113・115実測図 (1/20)	21
第20図 SX110・111・113・117出土遺物実測図 (1/3)	22
第21図 SX114・117・121・132・148・153・206実測図 (1/20)	24

第 22 図	SX121・123・129・145・148・153・157・183 出土遺物実測図 (1/3)	25
第 23 図	SX206 出土遺物実測図 (1/3)	27
第 24 図	SX177 出土遺物実測図 (1/3)	27
第 25 図	ピット出土遺物実測図 (1/3)	28
第 26 図	その他の出土遺物実測図① (1/3)	29
第 27 図	その他の出土遺物実測図② (1/3、1/2)	30
第 28 図	2 区出土石器実測図① (1/1)	31
第 29 図	2 区出土石器実測図② (1/1)	32
第 30 図	2 区出土石器実測図③ (1/2)	33
第 31 図	2 区出土石器実測図④ (1/2)	34
第 32 図	第 3 次調査 3 区全体図 (1/200)	折込
第 33 図	3 区南壁土層図 (1/40)	35
第 34 図	3 区西平面図 (1/60)	36
第 35 図	SD 断面図 (1/40)	37
第 36 図	SD302 出土遺物実測図 (1/3)	38
第 37 図	SD304・305・306・307・308 出土遺物実測図 (1/3)	39
第 38 図	SK301・303 実測図 (1/40)	40
第 39 図	SK301 出土遺物実測図 (1/3)	41
第 40 図	SK303 出土遺物実測図① (1/3)	42
第 41 図	SK303 出土遺物実測図② (1/3)	43
第 42 図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	44
第 43 図	SK303 出土石器実測図 (1/1、1/2)	45
第 44 図	その他の出土石器実測図 (1/1)	46
第 45 図	第 4 次調査区全体図 (1/150)	折込
第 46 図	調査区北壁土層図 (1/40)	47
第 47 図	SK01・04 実測図 (1/40)	48
第 48 図	SK01 出土遺物実測図 (1/3)	48
第 49 図	蛍光 X 線スペクトル	49
第 50 図	暦年較正結果	52
第 51 図	暦年代の分布	52
第 52 図	名子遺跡周辺の縄文時代遺跡分布図 (1/100000)	54

表目次

第 1 表	1 区出土石器属性表	10
第 2 表	2 区出土石器属性表①	33
第 3 表	2 区出土石器属性表②	34
第 4 表	3 区出土石器属性表	44
第 5 表	年代測定資料及び処理	49
第 6 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	50

表目次

卷頭図版 1

1. 第3次調査1区全景（東より）
2. SK03 土層断面（北より）

卷頭図版 2

1. 第3次調査2区全景（西より）
2. SC126 遺物出土状況（南より）

卷頭図版 3

1. SX127 遺物出土状況（南より）
2. 第3次調査3区全景（西より）

卷頭図版 4

1. SK303 遺物出土状況（南より）
2. 調査地点遠景（南東より）

図版 1

名子遺跡周辺航空写真（昭和30年頃撮影）

図版 2

1. 第3次調査1区全景（西より）
2. SK01 検出状況（南東より）
3. SK01 土層断面（北より）
4. SK01 完掘状況（北より）
5. SK02 検出状況（南より）
6. SK02 土層断面（東より）
7. SK03 完掘状況（北より）

図版 3

1. 2区1～5グリッド検出状況（東より）
2. 2区1～5グリッド2段目検出状況（東より）
3. 2区6～9グリッド検出状況（東より）
4. 2区1～9グリッド全景（西より）
5. 2区西半全景（東より）
6. SB211（南西より）
7. SX116 検出状況（南より）
8. SX116 土層断面（北より）

図版 4

1. SX116 下層礫検出状況（南より）
2. SX127 検出状況（南より）
3. SX127 土層断面（南より）
4. SX127 下層礫検出状況（北より）
5. SB212・213・214周辺（南東より）
6. SC126（南より）
7. SK149 土層断面（南より）
8. SK149 完掘状況（北より）

図版 5

1. SX104 断ち割り状況（東より）
2. SX109 検出状況（南より）
3. SX109 土層断面（南より）
4. SX110 検出状況（南より）

5. SX110 土層断面（南より）

6. SX111 検出状況（南より）

7. SX111 土層断面（南より）

8. SX111 遺物出土状況（西より）

図版 6

1. SX113 断ち割り状況（東より）
2. SX114 検出状況（南より）
3. SX117 検出状況（西より）
4. SX117 下層礫検出状況（東より）
5. SX121 土層断面（南より）
6. SX148 土層断面（北より）
7. SX206 遺物出土状況（北より）
8. 1～2グリッド南壁土層

図版 7

1. 第3次調査3区全景（東より）
2. 2トレンチ土層（北より）
3. 3区南東端トレンチ土層（北東より）
4. 3区西半（北東より）
5. SD302・307 土層断面（北より）
6. SD307 完掘状況（北より）

図版 8

1. SK301 完掘状況（南東より）
2. SK303 遺物出土状況（北より）
3. SK303 土層ベルト（東より）
4. SK303 完掘状況（東より）
5. 第4次調査区全景（東より）
6. SK01 完掘状況（南より）
7. 名子に残る索道の支柱

図版 9

1. 第3次調査1区出土土器
2. 第3次調査1区出土石器

図版 10

1. 第3次調査2区出土土器①
2. 第3次調査2区出土土器②

図版 11

1. 第3次調査2区出土土器③
2. 第3次調査2区出土土器④

図版 12

1. 第3次調査2区出土土器⑤
2. 第3次調査2区出土石器①

図版 13

1. 第3次調査2区出土石器②
2. 第3次調査3区出土土器①

図版 14

1. 第3次調査3区出土土器②
2. 第3次調査3区出土石器

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

平成19年9月30日、福岡市環境局施設部管理課より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課に対して、東区名子1丁目地内における道路改良工事に伴う埋蔵文化財事前審査依頼が提出された。これを受けて埋蔵文化財第1課では、申請地は包蔵地外であるものの工事面積が広大であり、かつ周辺での試掘データが不足している状況であることから、平成19年10月26日及び11月29日に試掘調査を実施した。その結果、対象地のうち3地点から遺構と縄文土器・弥生土器が確認された。この成果をもとに申請者と埋蔵文化財第1課で協議を重ねた結果、記録保存のため発掘調査を実施することで合意し、平成19年12月5日から平成20年2月1日まで発掘調査を実施した(第3次調査)。また、第3次調査期間中の12月19日に未確認地点の確認調査を行い、遺構が検出された。この地点については平成20年4月7日から4月21日まで発掘調査を実施した(第4次調査)。整理作業は平成21年度に行い、報告書の刊行は平成22年度に行った。

2. 調査の組織

調査委託：環境局施設部管理課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治(第3次) 田中壽夫(第4次、現任)

調査第1係長 杉山富雄(第3次、第4次) 米倉秀紀(現任)

調査庶務：文化財管理課 管理係 鈴木由喜(第3次、第4次) 古賀とも子(現任)

事前審査：埋蔵文化財第1課 事前審査係 星野恵美(第3次、第4次) 阿部泰之(現任)

調査担当：埋蔵文化財第2課 調査第1係 今井隆博(第3次、第4次)

なお、発掘作業から報告書作成に至るまで、環境局をはじめ地域住民の方々等関係各位には多大な御協力と御理解を頂きました。記して感謝する次第です。

第3次調査

調査番号	0758	遺跡略号	NAO-3
調査地地籍	東区名子1丁目地内	分布地図番号	土井8
開発面積	5600m ²	調査実施面積	730m ²
調査期間	2007.12.5～2008.2.1	事前審査番号	19-1-47

第4次調査

調査番号	0802	遺跡略号	NAO-4
調査地地籍	東区名子1丁目地内	分布地図番号	土井8
開発面積	5600m ²	調査実施面積	120m ²
調査期間	2008.4.7～2008.4.21	事前審査番号	19-1-47

第2章 遺跡の立地と環境

博多湾沿岸部には西から糸島・早良・福岡・粕屋平野と呼ばれる小平野が河川の沖積作用によって形成されており、それらはいくつかの山塊丘陵により画されながら地理的なまとまりを有している。粕屋平野はこの中にあって博多湾の最も北東部に位置しており、北から多々良川・須恵川・宇美川の三河川を主流としている。名子遺跡は粕屋平野の北側に位置し、三郡變成岩である城ノ越山から派生する丘陵と古第三紀層の丘陵とに囲まれた狭い沖積地に立地する。北は森江山、南は江辻山に挟まれ、東は多々良川の支流である猪野川により画される。この沖積地は猪野川の營力によって形成されたもので、南北 1.2km、東西 0.6km の小規模なものである。

現在の猪野川は森江山の山裾を流れているが、試掘調査では江辻山の北麓にも旧河道が確認されており、氾濫を繰り返していたことが想定される。名子周辺の現地形からも猪野川の氾濫の痕跡が認められ、調査地点北東及び東側の三日月形を呈する水田地帯は、複数の旧河道を反映しているものと思われる。この猪野川は江辻山南東麓の山ノ鼻で久原川と合流し、さらに下流 500 m で篠栗町から流れる多々良川と合流する。付近には縄文時代晚期～弥生時代早期の集落として著名な粕屋町江辻遺跡があるが、『筑前國続風土記』によると、江辻という地名は川の合流地点であることに由来している。

縄文時代前期の海進期には江辻山南麓付近まで海岸線が入り込んでいたと想定され、名子周辺は海岸付近であったと思われる。その後海岸線が後退し、上述のように北あるいは南の山麓に川が流れる微高地を集落として利用し始めたものと考えられる。この微高地は調査区北側の奈古会館・覚応寺付近を最高所とし、標高 14 m 程度である。調査地点の遺構面の標高を見てみると、第3次調査 2 区が 12.6 m で最も高く、東西に向かって緩やかに低くなり、第3次調査 1 区及び 3 区では 12.2 m となる。第3次調査 3 区の東側は上述のように旧河道となっており、1 m 以上の比高差が見られる。

名子地区の大半はこれまで埋蔵文化財の包蔵地外で発掘調査も少なく、遺跡の状況が不明な地域であった。1970 年代に山陽新幹線建設に先立つトレンチ調査が行われたが、明瞭な遺構は確認されていない。また、第3次調査 1 区から北へ 250 m 地点で第1次調査が行われているが、古墳時代後期以降の水路と土坑がわずかに検出されたのみである。一方、周辺には遺跡が多く、発掘調査もある程度実施されているので、ここで時代毎に概観したい。

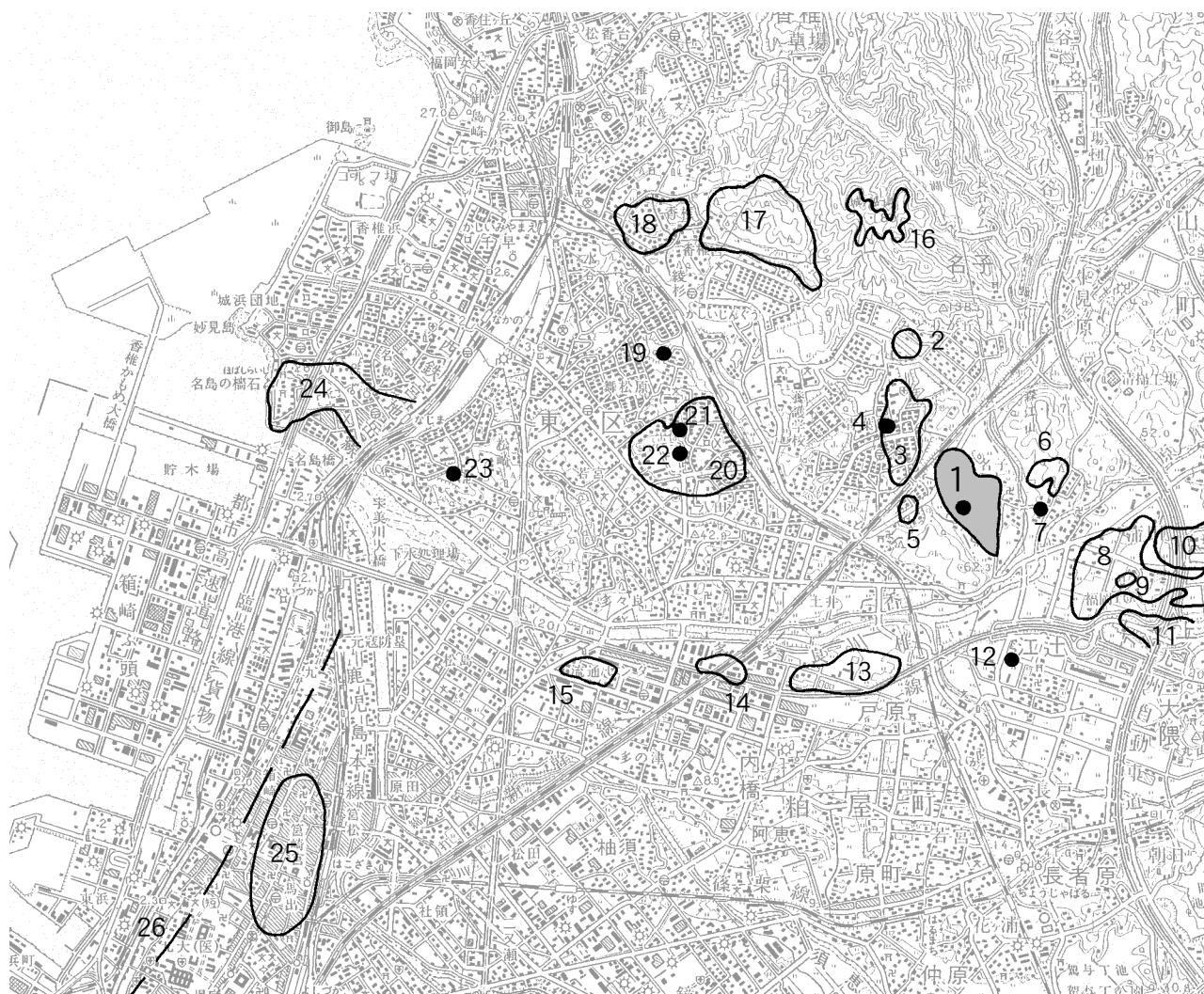
縄文時代遺跡は比較的多く見られ、かけ塚遺跡からは早期土器が、江辻遺跡からは前・中期土器が、蒲田部木原遺跡・蒲田水ヶ元遺跡からは中期土器が出土している。また、隣接する久山町では縄文時代後期～晩期の遺跡が複数確認されている。縄文時代晚期～弥生時代早期にかけては、江辻遺跡で松菊里型住居や大型掘立柱建物、墓域が確認されており、渡来系集落として注目を集めている。蒲田部木原遺跡・蒲田水ヶ元遺跡では弥生時代～古墳時代にかけての集落と墓地が非常に濃密に分布している。江辻遺跡や蒲田部木原遺跡などが立地するのは粕屋平野の中で最も沖積地が広がる場所で、名子遺跡からはわずか 1 km の至近距離にあたる。また、名子遺跡西側の土井遺跡や多々良大牟田遺跡では青銅器の鋳型が出土しており、周辺では弥生時代に青銅器生産が行われていたことが窺われる。

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては小地域を単位とした首長の墓が営まれ始める。名子遺跡南西の名子道 2 号墳は大型箱式石棺の周囲に列石を巡らせて墓域を画し、石棺本体を粘土と礫片によって被覆している。この他に粕屋町の大隈石棺（平塚古墳）や宮崎遺跡 I の箱式石棺墓、志免町の亀山古墳などが挙げられる。続く古墳時代前期には前方後円墳・前方後方墳が造営され、名子遺跡の東 500 m、森江山の丘陵先端には天神森古墳が築かれる。全長 50 m 前後の前方後円墳の可能性があるので、道路工事により切断され、三角縁神獣鏡と盤龍鏡が発見された。この他に名島古墳、舞松原古墳、粕屋町戸原王塚古墳といった前方後円墳や、前方後方墳である部木 1 号墳が築かれる。

このように粕屋平野は在地首長墓から前方後円墳形成に至る過程を追うことのできる地域である。

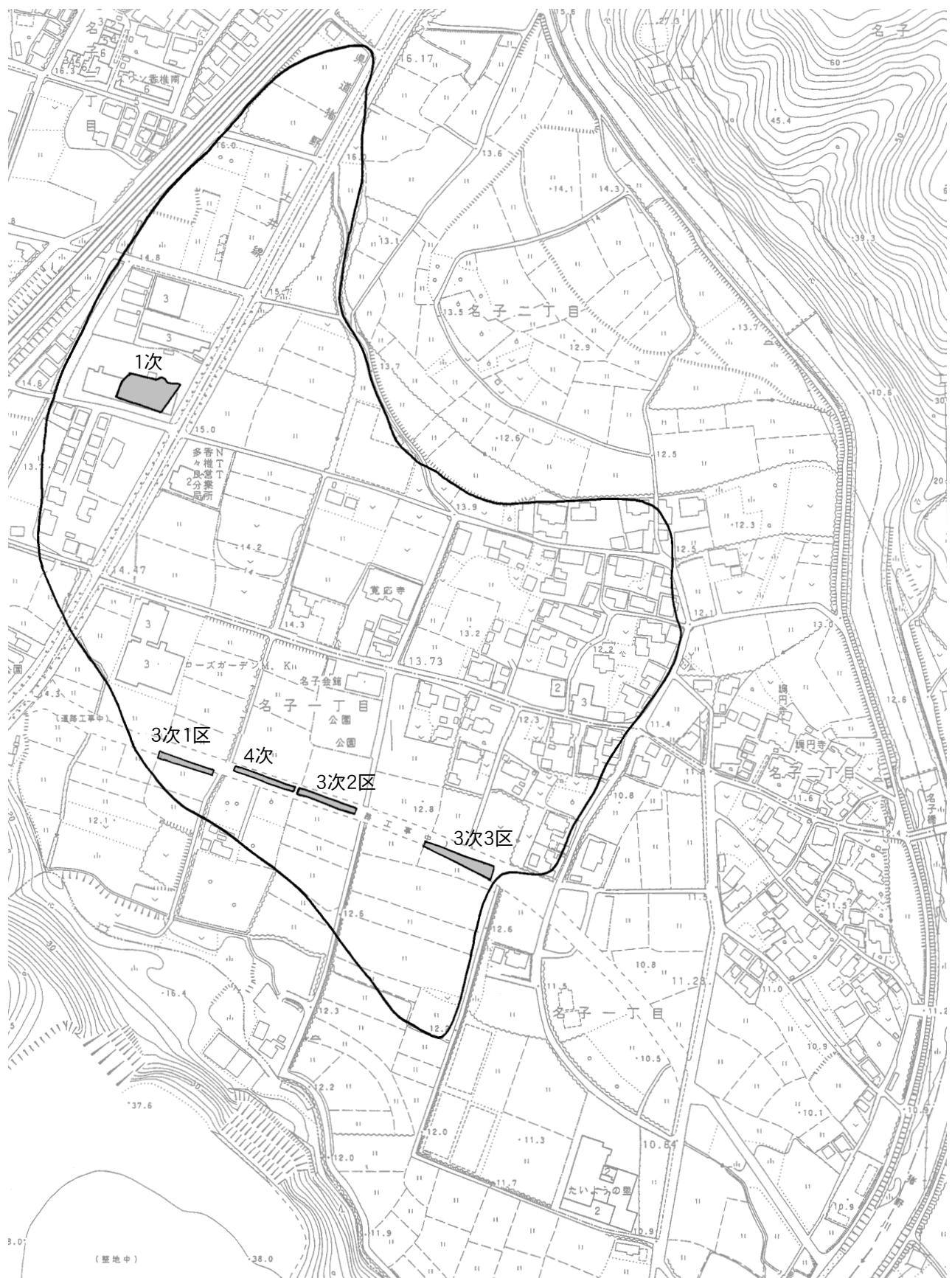
古代には多々良込田遺跡で官衙的性格をもつ掘立柱建物群や集落が検出されている。越州窯青磁、緑釉陶器、石帶等が出土しており、一般集落とは明らかに異なる。この地域は古代の条里が復元されており、また条里に沿う官道が想定されている。多々良遺跡・戸原麦尾遺跡では中世の集落と居館、墓地などが確認され、輸入陶磁器、国産陶器、青銅製柄鏡、板絵などが出土している。

近世は主に農村であったが、近現代には粕屋炭田で採炭が行われるようになり、石炭鉱業が盛んになる。昭和23年には名子の北東4km地点で麻生鉱業が山田炭坑を開坑している。山田炭坑は掘り出した石炭の輸送に索道方式を採用しており、その索道が名子付近を通っていた。地元の方の話によると、名子の南にある江辻山を越え、現在のJR土井駅付近で列車に積み込まれたそうである。山田炭鉱は昭和42年に閉山となったが、調査地点から北へ200mの地点には現在も索道の支柱が残っている。



- | | | | |
|--------------|--------------|-----------|--------------|
| 1. 名子遺跡 | 2. 湯ヶ浦古墳群A群 | 3. 土井遺跡 | 4. 銅剣鋤型出土地点 |
| 5. 名子道古墳群 | 6. 森江山古墳群 | 7. 天神森古墳 | 8. 蒲田部木原遺跡 |
| 9. 部木古墳群 | 10. 蒲田水ヶ元遺跡 | 11. かけ塚遺跡 | 12. 江辻遺跡 |
| 13. 戸原麦尾遺跡 | 14. 多々良込田遺跡 | 15. 多々良遺跡 | 16. 御飯の山城跡 |
| 17. 香椎B遺跡 | 18. 香椎A遺跡 | 19. 舞松原古墳 | 20. 多々良大牟田遺跡 |
| 21. 銅剣鋤型出土地点 | 22. 広形銅戈出土地点 | 23. 名島古墳 | 24. 名島城跡 |
| 25. 箱崎遺跡 | 26. 元寇防塁 | | |

第1図 名子遺跡と周辺の主な遺跡 (1/50000)



第2図 調査地点位置図 (1/4000)



第3図 調査区位置図 (1/1000)

第3章 第3次調査の記録

1. 調査の概要

(1) 調査の経過

事業対象地のうち、試掘調査で遺構・遺物が確認された3地点の調査を実施することとなり、西から1区・2区・3区とした。道路拡幅のための調査であることから、調査区は狭長な範囲となった。調査は2007年12月5日～2008年2月1日にかけて実施した。12月5日に器材の搬入を行い、6日から重機により1区と2区の表土剥ぎを開始した。1区の廃土は西側の調査対象地外に置くことができたため一度に全面を調査したが、2区では耕作土は場外に搬出したものの、人力掘削の廃土は調査区内で処理することになったため、まず東側2/3の部分から着手した。人力掘削は1区と2区を同時並行で進め、17日から3区の表土剥ぎを行った。3区の表土剥ぎの際の廃土は場外に搬出し、人力掘削の廃土は調査区内で処理した。まず3区西半の検出作業にとりかかったが、遺構がまったく把握できなかっただため、19日に再度重機によるトレンチ調査を実施し、土層確認を行った。その結果、3区西半は谷の堆積状況であったことから東半部分のみを調査対象とし、西半は廃土置場とした。また、同日に未確認地点（第4次調査地点）の確認調査を行い、遺構を確認した。調査は1区・2区の作業を優先し、1月15日に1区の作業が終了すると、続いて2区・3区の掘削作業を並行して進めた。25日には2区の廃土を反転させて残りの西側部分に着手し、1月31日には2区・3区ともに掘削作業を終了した。2月1日に器材の撤収を行い、調査を完全に終了した。

(2) 各調査区の概要と調査の方法

1区・2区からは縄文時代後期の遺構を検出した。1区の遺構密度は低いものの土坑4基を検出し、後期中頃と思われる土器が出土している。2区は耕作土直下でほぼ全面に包含層が広がり、多量の縄文土器と石器が出土した。縄文時代後期前半～中頃の土器が主体を占めると思われる。包含層を掘り下げるに遺構が確認でき、竪穴住居址、掘立柱建物、貯蔵穴、土坑などを確認した。なお、遺物包含層を掘り下げる際には、調査区内に任意で2mグリッドを設定し、遺構に伴うと判断できなかつた遺物はグリッド毎に取り上げた。調査区を北からA・B・C、東から1～22に分け、アルファベットと数字を組み合わせてグリッドを表示している。本来なら50cmあるいは1mのグリッドを設定すべきであったが、工程にそこまでの余裕がなく、大まかな遺物取り上げとなってしまった。3区では弥生時代前期～中期の遺構を検出した。主な遺構は土坑と溝で、土坑からはほぼ完形に復元できる前期土器が出土した。縄文時代後・晚期の遺物も少量ながら出土している。出土遺物は3地点の総量でコンテナケース30箱分であった。

遺構番号については、調査時点ではそれぞれの調査区で01番からの通し番号としていたが、本報告に際して番号に重複のないように整理し、第3次調査全体で通し番号を付け直した。1区の遺構は01～、2区は101～、3区は301～としている。なお、第4次調査については別個に01～としている。遺物番号も同様に、第3次調査については調査区に関係なく通し番号とし、第4次調査については新たに1番を付けている。土器は遺構毎に報告しているが、石器については調査区毎にまとめて掲載している。

2. 1区の調査

(1) 調査の概要

1区は事業対象地の西端付近にあたり、県道546号線から東へ100mの地点である。長さ41m、幅3~5mの狭長な調査区で、調査前の現況は水田であった。第4図はSK04付近の北壁土層図である。現代水田の標高はおよそ12.7mで、調査区西端に設定された試掘トレンチでは、GL-60cmの黄褐色粘質土で時期不明の土坑を検出していた。廃土置場は西側隣接地であったため、重機による表土剥ぎは東から始めざるをえず、遺構を確認した試掘トレンチから広げることができなかった。調査区東端から表土剥ぎに取り掛かると、水田耕作土以下は同じような土にしか見えず、遺構・遺物がなければ検出面の判断が全くできなかった。そのため、重機で北壁に沿って幅1mの深掘りトレンチを設定し、土層断面を観察しながら検出面を決定することにした。深掘りするとGL-60cm付近で黄褐色粘質土に変わり、明瞭に把握できる層はこれ以外ないように思われたため、この土を検出面として東端から剥ぎ始めた。しかし、SK01付近で黄褐色粘質土よりも15cm以上高い黄灰色シルト中で土器の広がりが確認され、遺構の掘り込みはさらに上面からであることが判明した。土器の広がり以外に面を識別することができなかったため、土器が出土した高さを目安に検出面を再設定した。検出面は黄褐色粘質土と黄灰色シルトで、黄褐色粘質土の上に部分的に黄灰色シルトが残っている状況であった。検出面の標高は調査区東端で12.4m、西端で12.2mとなり、若干西に向かって低くなっている。SK01・03・04は北壁沿いに設定した深掘りトレンチにかかっているが、トレンチ掘削時点ではほとんど識別することができなかった。3区の遺構検出とも共通するが、表土剥ぎ直後は地山と遺構埋土の区別が非常に困難で、数日経過すると変色し、おぼろげながら遺構が検出できる状況であった。

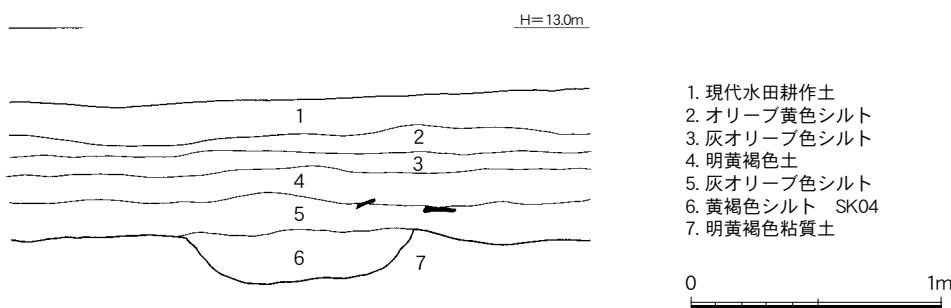
試行錯誤の結果、検出したのは土坑4基とピットである。土坑は調査区の東半に3基と西端に1基で、SK03とSK04の間24mには遺構は認められなかった。上述したように遺構埋土の識別が非常に困難であったことから、土坑の平面形・底面に不安が残るものが多い。出土遺物は全体的に少なく、縄文土器・石器がコンテナ1箱分であった。出土遺物は概ね縄文時代後期中頃のものと思われる。

(2) 遺構と遺物

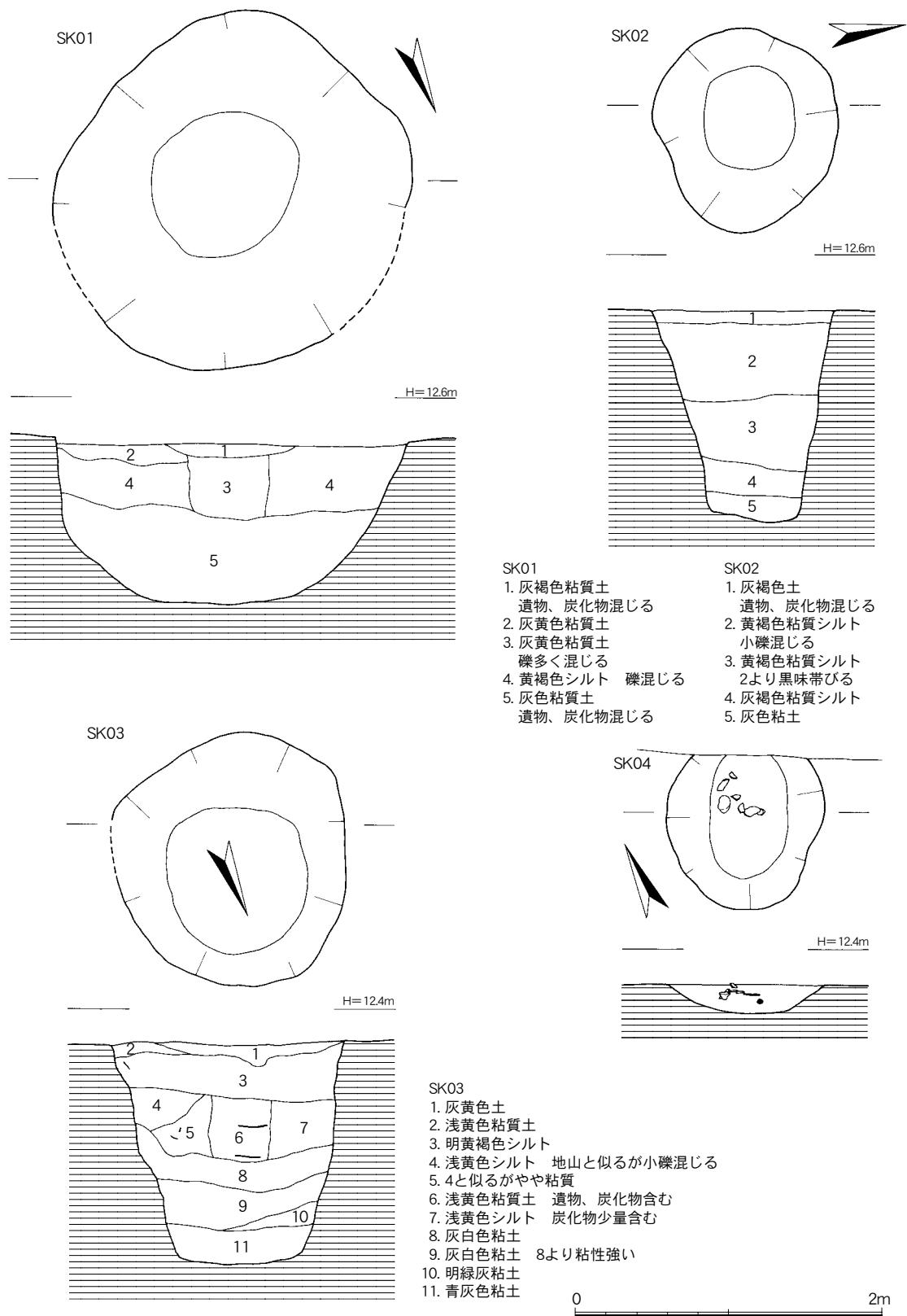
① 土坑 (SK)

SK01 (第6図、図版2-2, 2-3, 2-4)

調査区東端で検出した、直径2.3mの不整円形の土坑である。埋土上層は中央に筒状に灰黄色粘質土(3層)が見られ、その両側は黄褐色シルト(4層)、埋土下層は灰色粘質土(5層)となる。深さは1.0mを測る。検出当初は実際のプランに近い平面形を確認していたが、一段下げるごとに中央の3層が目立ち、その部分のみを掘ってしまった。3層部分を掘削した際に遺構の壁が把握できなかった

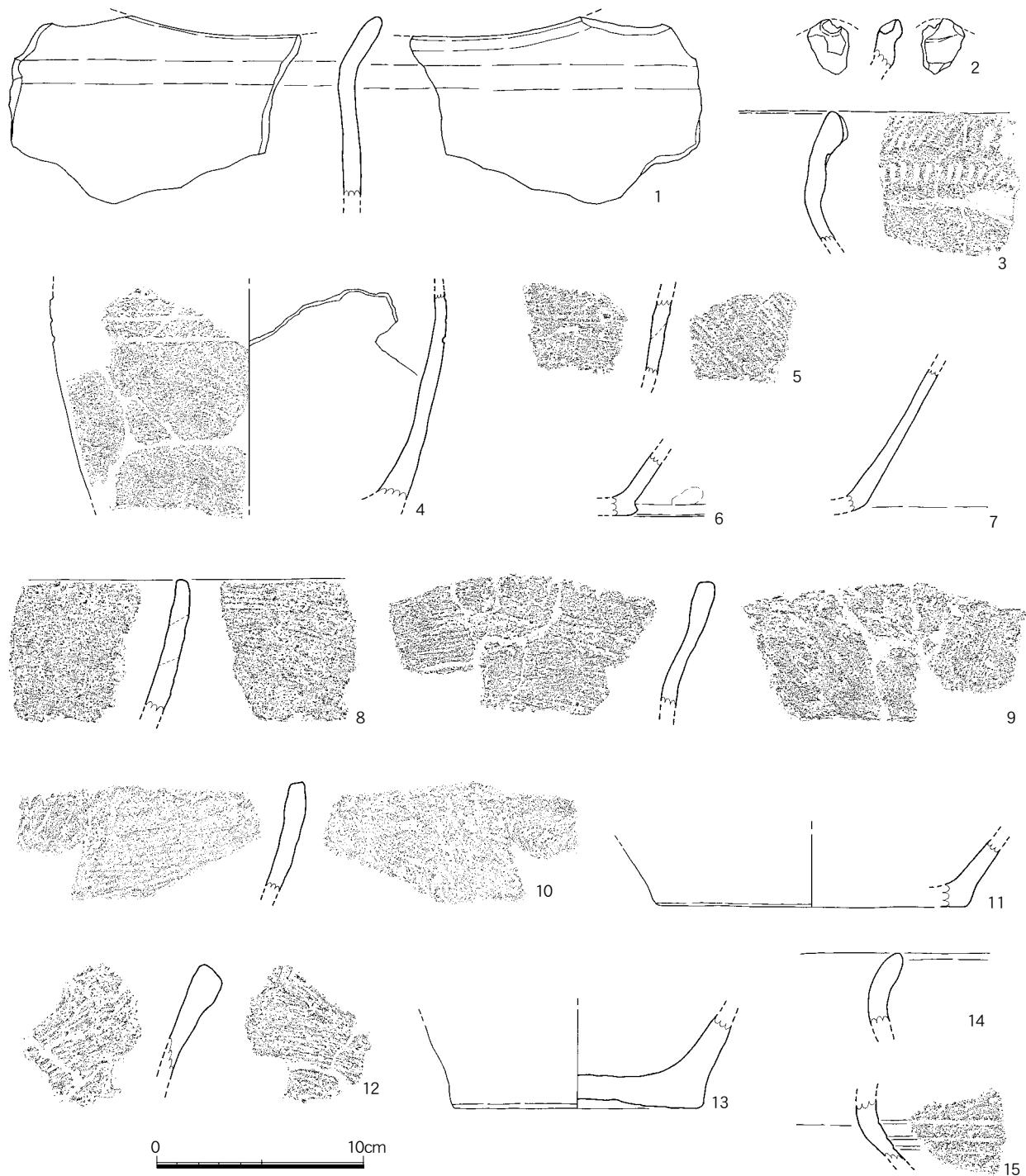


第4図 1区東壁土層図 (1/30)



第6図 SK01・02・03・04 実測図 (1/40)

ため、全景写真撮影後に重機で大きく断ち割りを行い、そこでようやく図に示したプラン・土層を確認した。1層とした灰褐色粘質土に遺物が多く、その他の層からは少量しか出土していない。



第7図 1区出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（第7図）

1は波状口縁の深鉢である。摩滅のため内外面の調整は不明瞭である。胎土に雲母、砂粒を多く含む。2は鉢口縁の波頂部と思われ、頂部上面には刺突による凹点が施されている。3は北久根山式の深鉢口縁部である。肥厚した口縁部外面にはW字状の粘土紐を貼り付け、短斜線文を施している。その下部には長さ1cm、幅2mm程度の直線文が並ぶ。4は深鉢の胴部下半である。胴部最大径付近に3条の平行沈線が見られる。内外面ともナデ調整である。5は深鉢胴部片である。外面は斜め方向の貝殻条痕調整、内面は横方向の条痕の後にナデを施している。

SK02（第6図、図版2-5、2-6）

SK01の西側2mの地点で検出した、長軸1.3m、短軸1.2mの円形土坑である。深さはおよそ1.3mを測る。埋土と地山の識別が難しく、炭化物・礫の有無などを手掛かりにしたため、遺構の底面・壁面の把握に不安が残る。遺物は1層に多いが、粗製土器の胴部片などのため時期を決定し難い。

出土遺物（第7図）

6・7は鉢あるいは深鉢の底部付近である。6の外面には指頭痕が残る。7は内外面とも摩滅が著しく調整不明である。

SK03（第6図、巻頭図版1-2、図版2-7）

調査区西端で検出した、長軸1.7m、短軸1.5mの不整円形の土坑である。深さは約1.4mで、礫層まで到達していた。最上層はSK01・02と似た灰黄色土で、その下に地山と似た明黄褐色～浅黄色シルト、下半には灰白色～青灰色粘土が堆積する。SK01の3層と同じ様に、中央には6層が筒状に存在する。SK03は他の遺構に比べて、壁面と底面を把握しながら掘り進めることができた。特記すべき事項として赤色顔料の出土が挙げられる。掘削中に気付くのが遅れたため正確な出土状況は分からぬが、5層東壁際付近と9層の二箇所から出土した。この赤色顔料は福岡市埋蔵文化財センターで分析を行い、ベンガラとの結果を得ている。量的に自然に生成したとは考えにくく、意図的にベンガラを入れたものか、あるいは土坑内に偶然入り込んだものであろうか。

出土遺物（第7図）

8は粗製深鉢の口縁部で、外面は横方向の貝殻条痕調整、内面はナデ調整である。器壁はやや厚めで、堅緻である。9・10は波状口縁の粗製深鉢である。9の内面は貝殻条痕調整の後にナデか。外面は斜め方向の粗い調整である。10は内面の口縁下部に横方向の条痕が残る。11は深鉢底部である。

SK04（第6図）

SK02の西側で北壁にかかって検出した土坑である。可能なところまで拡張した結果、長軸1.0m以上、短軸1.0mの楕円形のプランを検出した。深さは20cmで、検出面付近で遺物がまとまって出土した。埋土が地山と区別し難く、底面の把握に不安が残る。

出土遺物（第7図）

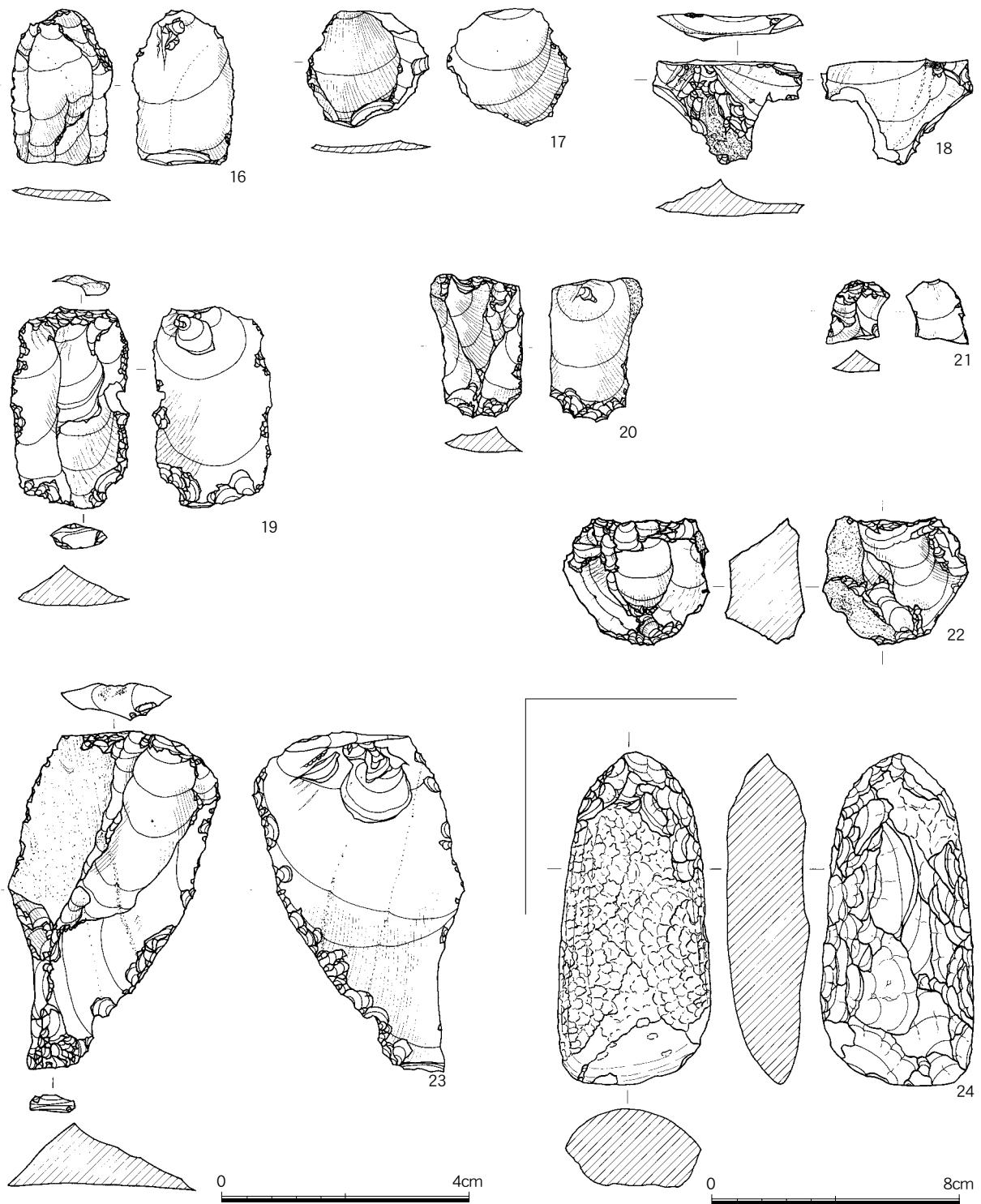
12は深鉢の波状口縁頂部である。内外面ともに条痕が明瞭に残る。外面は条痕調整の後にナデを施している。13は深鉢底部で、約2/3の残存である。内外面ともに摩滅が著しく調整不明である。

②その他の土器（第7図）

14、15はともにSK04の上層、第4図の4層と5層の境から出土した。14は深鉢の口縁で内外面ともにナデ調整である。15は鉢の頸部付近か。3条の沈線が施されている。

③石器（第8図）

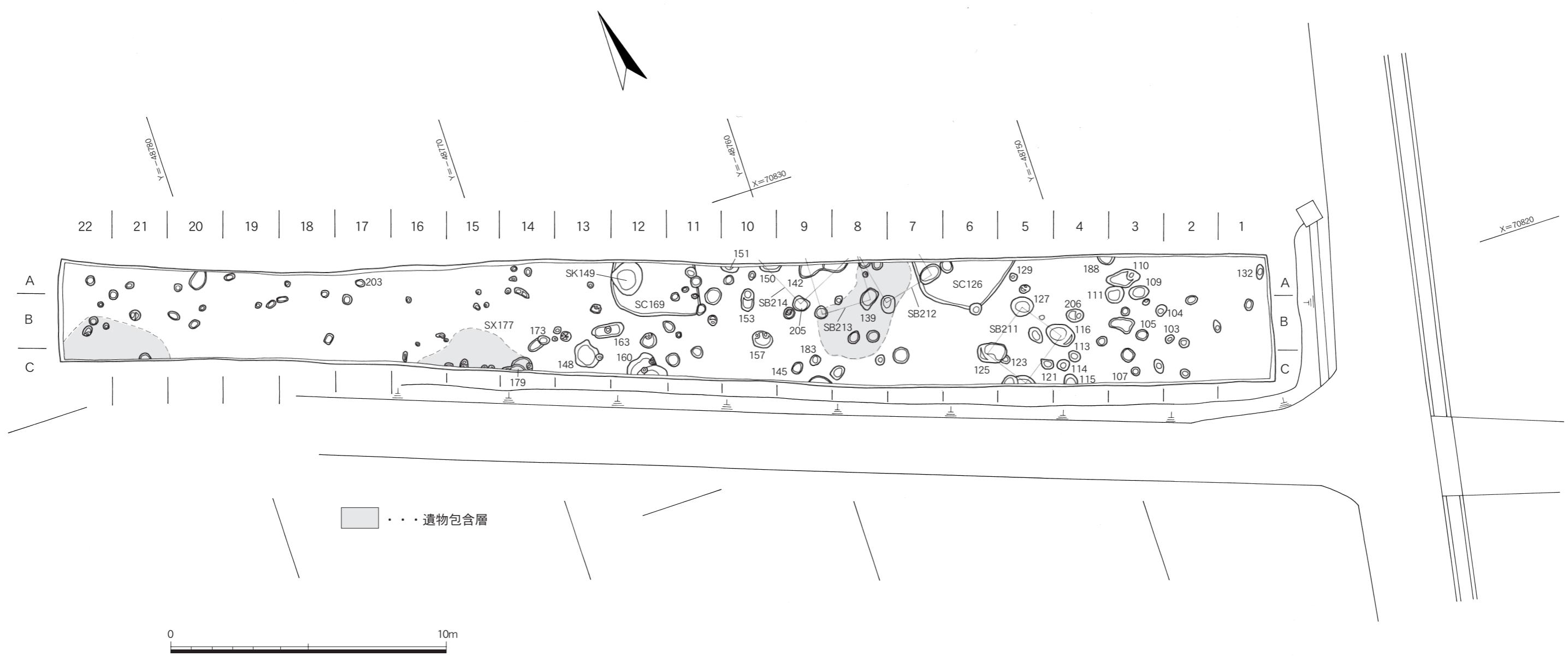
16・17・20は黒曜石製の使用痕剥片である。16は薄い剥片で、左側縁に微細剥離が見られる。17はパティナが古相を示すことから、旧石器時代の産物の可能性がある。左側縁に微細剥離が見られる。20は右側縁及び下面を使用している。18は黒曜石製削器である。右側縁はガジリによる新しい破断面で、左側縁に剥離調整が見られる。19は黒曜石製の刃器で、右側縁に二次加工を加えて刃部を作り出している。また、両側縁には使用によると思われる刃こぼれが見られる。21は黒曜石製の細石刃で、左側縁に微細な剥離が見られる。パティナが古相を示し、旧石器時代の産物と思われる。22は黒曜石石核である。一部に自然面が残る。23は黒曜石製スクレイパーで、右側縁に二次加工を加えて鋭い刃部を作り出している。24は玄武岩製の蛤刃石斧で、裏面を欠損している。表面には敲打の痕跡が残る。



第8図 1区出土石器実測図 (1/1、1/2)

第1表 1区出土石器属性表

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土遺構・地点	備考
16	使用痕剥片	黒曜石	2.53	1.65	0.30	1.00	SK04拡張時	
17	使用痕剥片	黒曜石	1.91	2.00	0.15	0.62	第4図 4・5層境	右側縁にガジリ有。パティナ古相を示す。
18	削器	黒曜石	1.70	2.48	0.66	2.07	東端トレンチ	
19	刃器	黒曜石	3.30	1.98	0.67	3.83	SK01 4層上層	右側縁にガジリ有。
20	使用痕剥片	黒曜石	2.34	1.52	0.44	1.40	1区	
21	細石刃	黒曜石	1.08	1.10	0.35	0.27	SK03 3層上層	パティナ古相を示す。
22	石核	黒曜石	2.13	2.40	1.30	6.85	1区	
23	スクレイパー	黒曜石	5.56	3.43	0.95	14.04	SK02 1層	
24	蛤刃石斧	玄武岩	10.88	5.00	2.70	204.51	SK02 2層	



第9図 第3次調査2区全体図 (1/150)

3. 2区の調査

(1) 調査の概要

2区は1区の東60mの地点に位置し、西側は第4次調査地点と隣接する。長さ44m、幅3~5mの狭長な調査区で、調査前の現況は水田であった。現代水田の標高は約12.9mで、試掘調査では表土直下で縄文土器包含層及び遺構を確認していた。まず東側2/3の調査から取り掛かったが、重機により水田耕作土・床土を除去すると、ほぼ全面に縄文土器包含層が広がり、多量の土器・石器・礫を確認した。この段階では遺構のプランが不明瞭であったためトレーナーを設定して土層を確認したところ、遺物包含層の厚さは20cm前後で、その下面で遺構が把握できそうであった。調査の時間的制約もあったことから、遺物包含層を掘り下げながら遺構を検出することとした。本章第1節で述べたように、包含層の掘り下げに際しては2mグリッドを設定した。

第10図は2区の北壁・南壁土層図である。土層図の上の数字はグリッドの位置を示している。遺物包含層(4層)は2区のほぼ全面に広がっており、両端付近では次第に薄くなっている。包含層を掘り下げていくと次第に礫がまとまり、その部分が遺構になるものが多かった。礫が入ったピット・土坑が多く見られたが、これらは不明遺構(SX)の石入り土坑として報告している。地山は淡黄灰色粘質土、標高は約12.6mで、ほぼ平坦な地形である。遺構は東側に多く見られ、西側はやや散漫な分布である。狭長な範囲のために多くの遺構が調査区外に広がり不明な点も多いが、掘立柱建物や竪穴住居址については、可能性を提示するという意味で積極的に認定した。検出した遺構は掘立柱建物4棟、竪穴住居址2基、土坑1基、石入り土坑多数、ピットなどである。出土遺物は縄文土器・石器などで、コンテナケース20箱分以上出土した。縄文時代後期前半~中頃の土器を主体とし、一部晩期の土器も含む。

(2) 遺構と遺物

①掘立柱建物(SB)

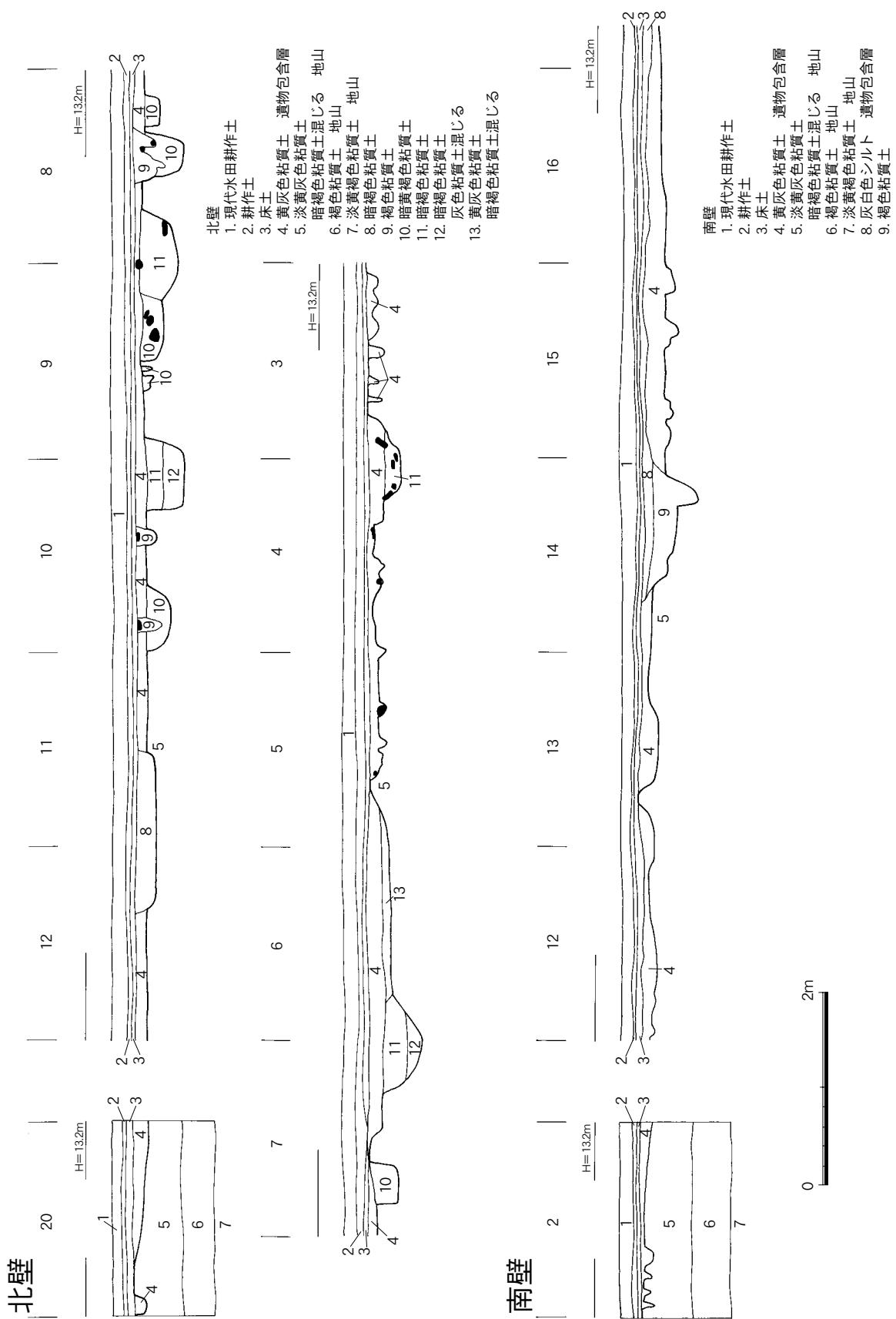
上述したように不確実な建物ばかりであるが、可能性として提示した。調査中は建物の軸に合わせた断面図を作成する時間的余裕がなかったため、平面図から復元したものもある。そのため、断面図に礫を描き加えられていないものが多い。

SB211(第11図、図版3-6)

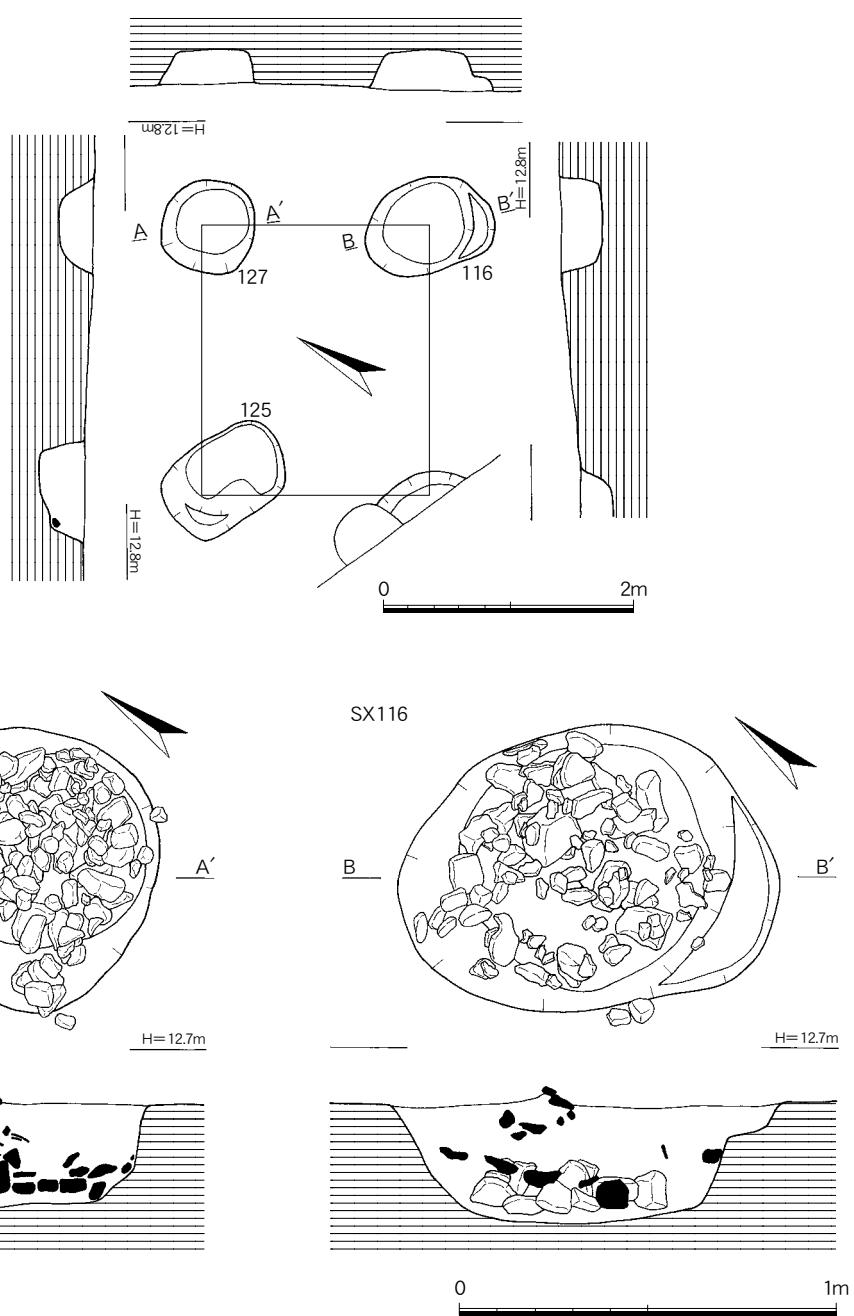
B5グリッド付近で検出した1間×1間の掘立柱建物である。柱穴の大きさは70cm~1mで、深さ30cm前後のものが多い。他の建物に比べると柱穴がやや大きめである。SX116・127には土器と小礫~拳大の礫が多量に入っていたため個別図を掲載した。断面図ではうまく表現できていないが、上面から土器・礫の広がりが見られる。底面には壁に沿うように礫が入っている。これらの礫は柱固めの根石か、あるいは柱を抜いた後に流れ込んだものであろうか。残りの柱穴には少量の礫しか含まれていなかった。

出土遺物(第12図)

25~31はSX116からの出土である。25は波状口縁の鉢の頂部である。実際の遺物は小片で波頂部一箇所の遺存であるため、図の復元・大きさについては不安が残る。復元口径26.2cm、残存器高7.4cmである。波頂部は4単位と考えた。頂部は丸味をもち、内面には張り出しが見られる。中央付近には径5mm程の穿孔を施す。26は阿高系の深鉢口縁である。口縁部上面には二箇所の隆起があり、外面には横・斜め方向に凹線を施す。胎土に滑石は含んでいない。27・28は粗製深鉢の口縁部である。ともに外面には横方向の条痕が残る。29は磨消縄文土器の鉢口縁部である。外面に

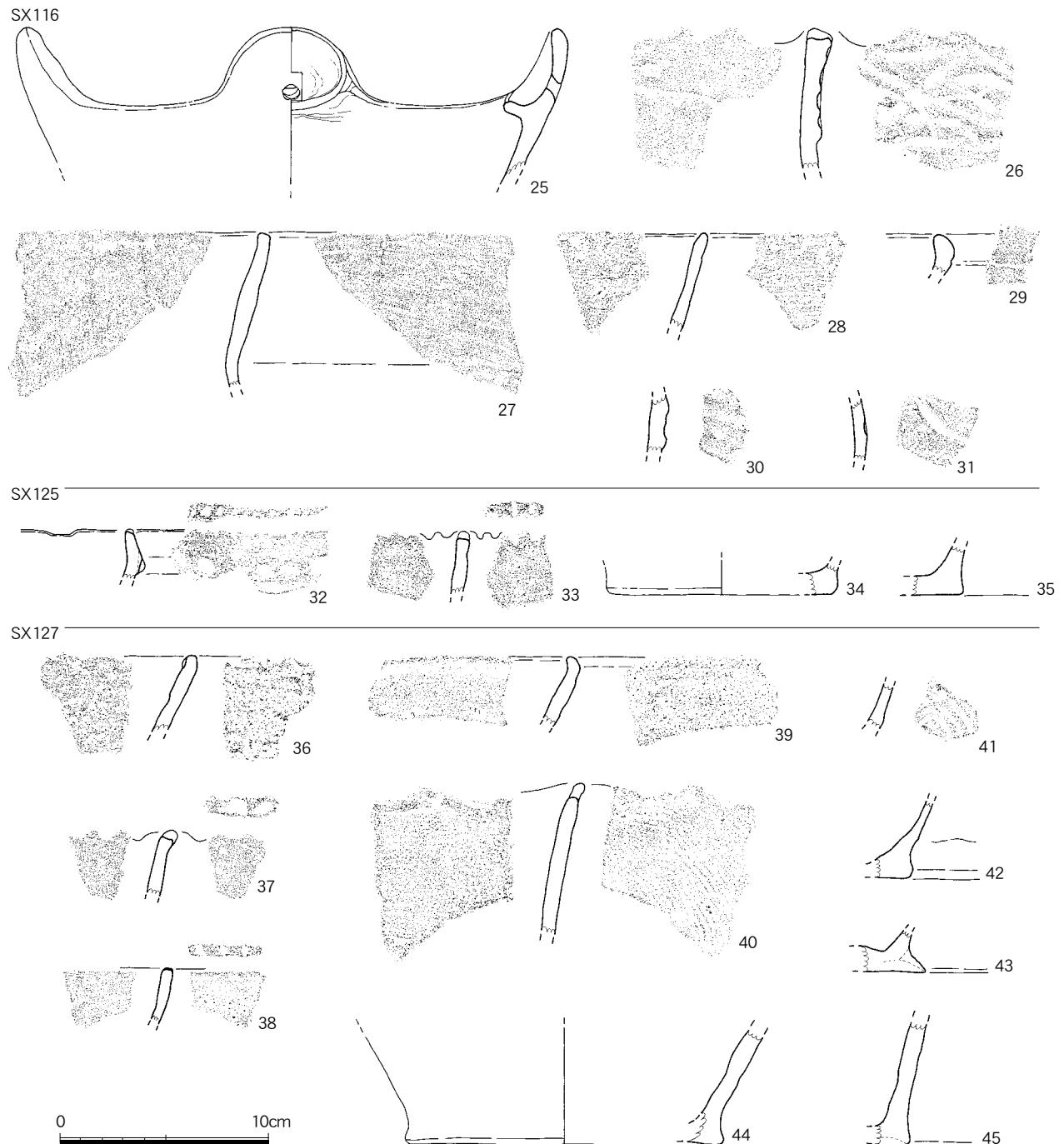


第10図 2区土層図 (1/60)



第11図 SB211 実測図 (1/60、1/20)

横方向の沈線で区画をし、沈線より下位には縄文を施している。30・31は胴部片である。30には凹線、31には磨消縄文が施されている。32～35はSX125からの出土である。32は鉢口縁部で、外面には凹点、口唇部には小さな刻目を施している。33も鉢口縁部で、細かい山形状を呈す。34・35は平底の鉢底部である。34は復元底径 11.0cm を測る。36～45はSX127からの出土である。36は粗製深鉢の口縁部で、口縁端部内面には指頭による凹みがある。37は深鉢口縁で、口唇部に凹点が見られる。38は鉢口縁で、口唇部には浅い刻目を施す。39は粗製深鉢の口縁、40は波状口縁の深鉢である。40の外面には縦方向の貝殻条痕が明瞭に残る。内面はナデ調整である。41は鉢の胴部で、ハの字形に細い凹線が施されている。42～45は深鉢底部で、いずれも平底である。43は外側への張り出しが大きい。44は約1/8の残存で、復元底径 15.2cm、残存器高 5.5cm を測る。



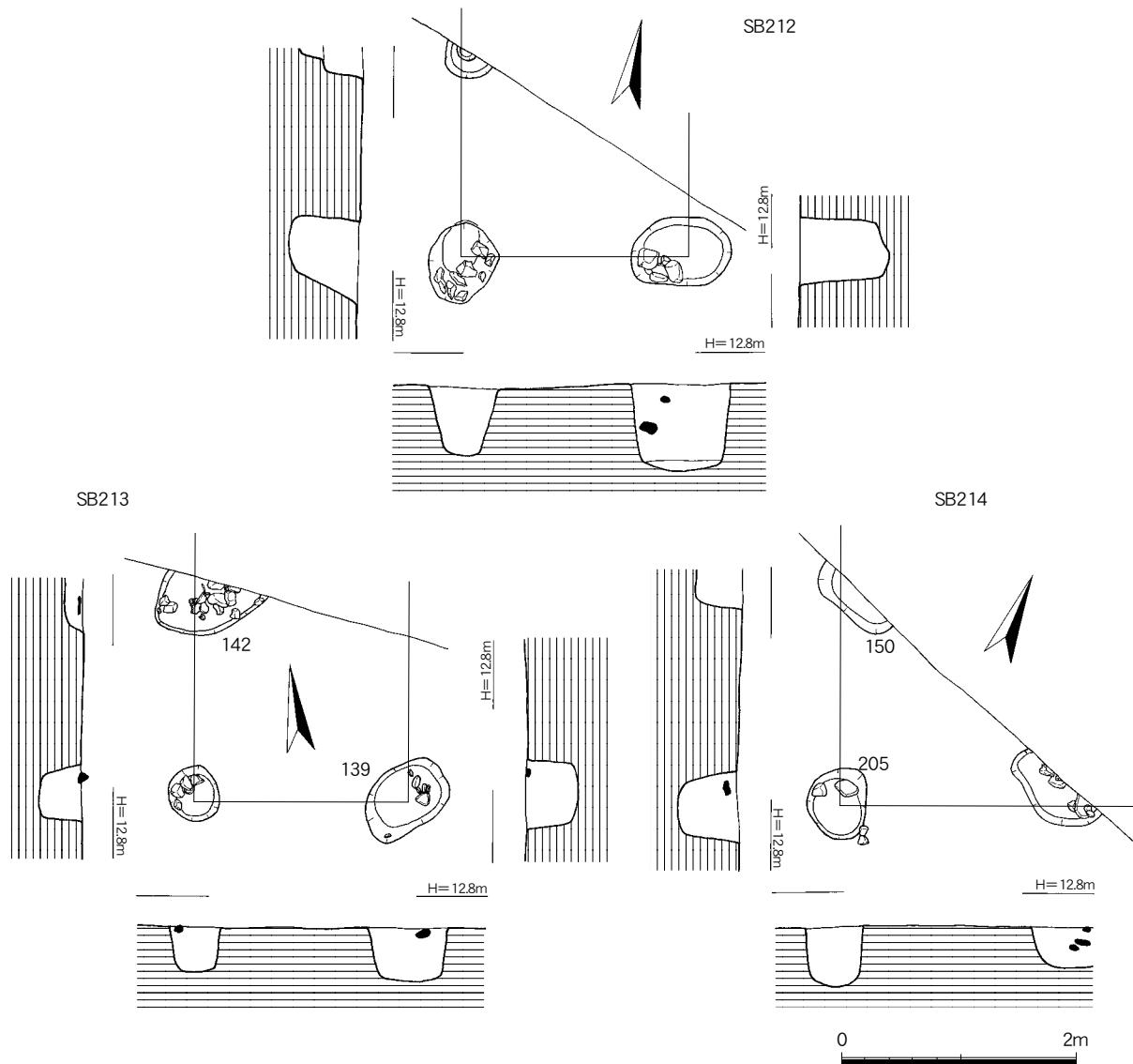
第12図 SB211出土遺物実測図 (1/3)

SB212 (第13図、図版4-5)

A7グリッド付近で検出した1間×1間以上の掘立柱建物で、調査区外に広がるため規模は不明である。柱穴の大きさは70cm程度で、深さは60～70cmで残りがよい。SB211に比べると礫は少なく、壁に沿ったような礫も見られない。柱穴からの出土遺物は小片ばかりであった。

SB213 (第13図、図版4-5)

A8グリッド付近で検出した1間×1間以上の掘立柱建物であるが、柱穴の規模が異なるため、建物としたものの不安が残る。柱穴の大きさは50～80cm前後で、深さは20～50cmである。いずれの柱穴にも礫が少量入っている。SX142からは比較的まとまった土器が出土した。



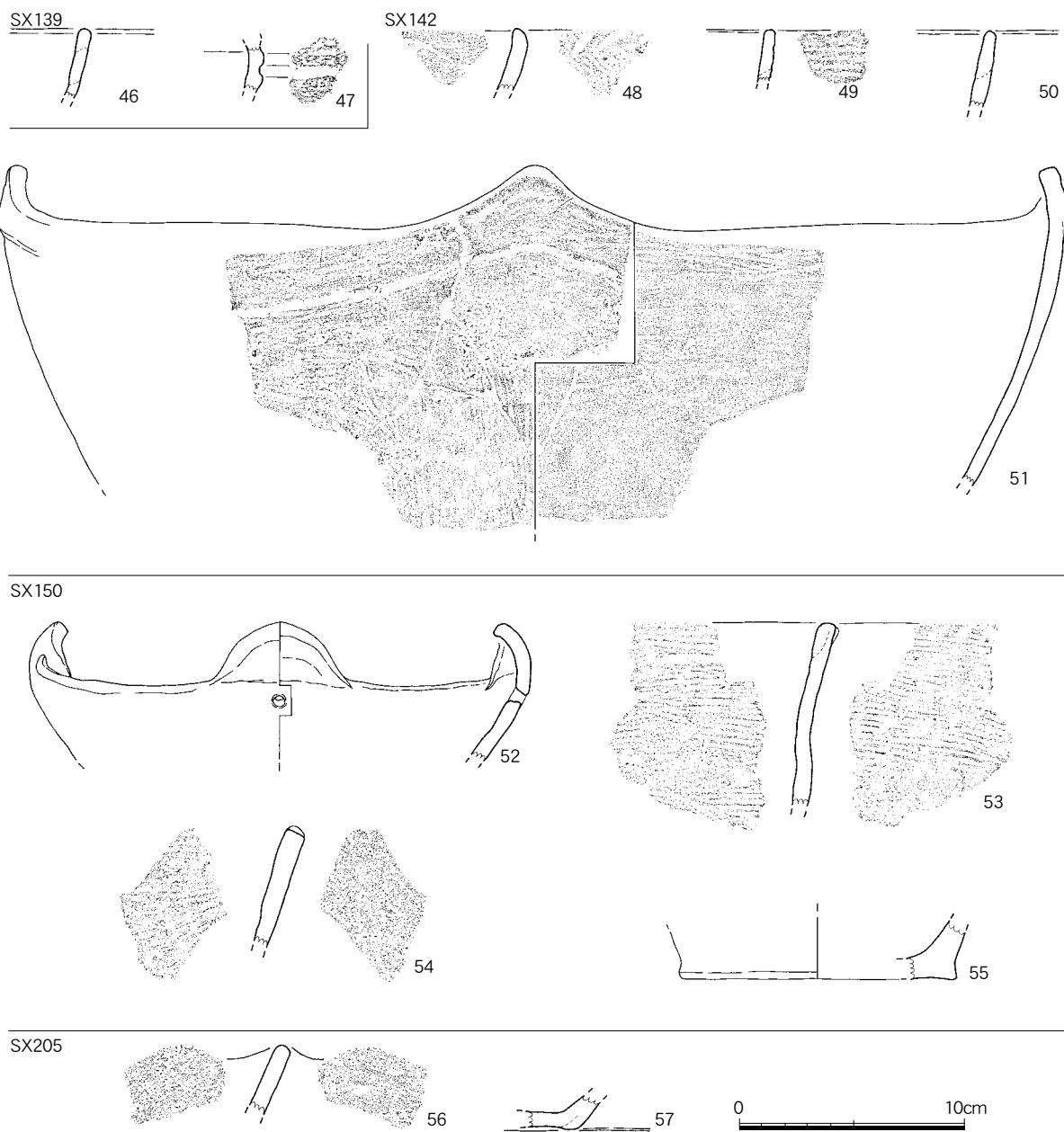
第13図 SB212・213・214 実測図 (1/60)

出土遺物（第14図）

46・47はSX139からの出土である。46は深鉢口縁で、内外面はナデ調整である。断面及び内面に粘土接合痕が認められる。47は鉢胴部片で、横方向の深い凹線が見られる。48～51はSX142からの出土である。48は深鉢口縁で、口縁外面には斜めの刻み、下位には縄文を施している。49は鉢口縁の小片である。外面には横方向に4条の沈線が見られるが、条痕か施文かはつきりしない。50は粗製深鉢の口縁で、内外面はナデ調整である。51は大型の波状口縁の波頂部である。約1/8からの復元であるため不安が残るが、復元口径46.6cm、残存器高14.0cmに復元した。波頂部は4単位と想定し、深鉢ではなく鉢形土器と考えている。内面調整は横方向の条痕の後にナデで、外面の胴部下位には縦方向の条痕、それより上位には横方向の条痕が残る。口縁部外面は肥厚させ、肥厚部にも条痕が残る。胴部外面の条痕は二枚貝であるのに対し、肥厚部は巻貝によるものと思われる。

SB214（第13図、図版4-5）

A8グリッド付近で検出した1間×1間以上の掘立柱建物で、調査区外に広がるため規模は不明である。柱穴の大きさは60～80cmで、深さは30～50cmである。柱穴150内には礫は見られず、

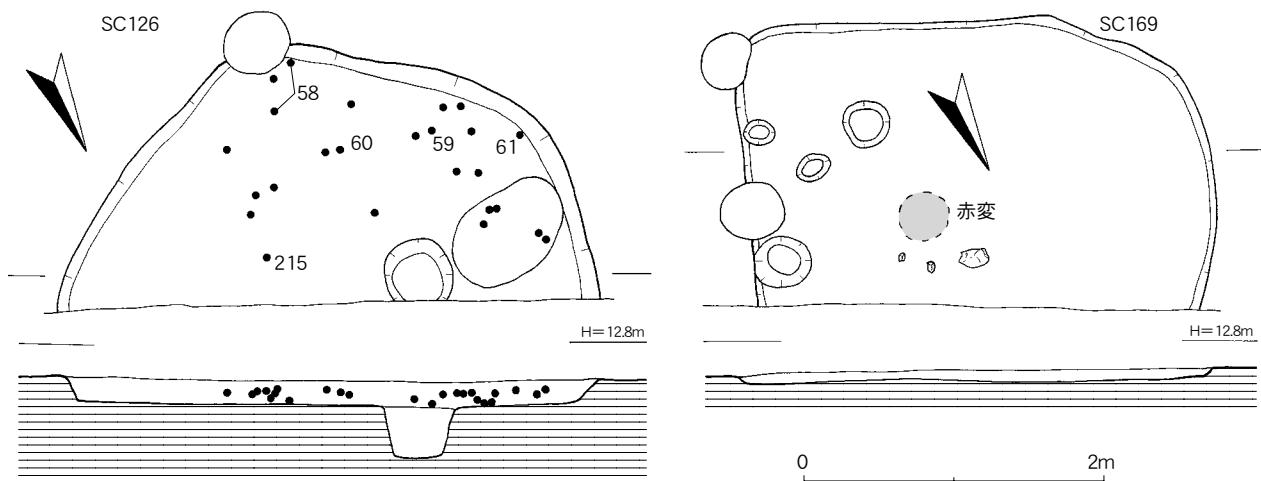


第14図 SB213・214出土遺物実測図 (1/3)

その他の柱穴は礫を含むものの、いずれも量は少ない。

出土遺物 (第14図)

52～55はSP150からの出土である。52は波状口縁鉢の丸みを持つ波頂部で、内側に大きくすぼまる。波頂部一箇所からの復元であるが、復元口径20.0cm、波頂部は4単位と考えた。波頂部の下には径5mm程の穿孔を有する。SX116から出土した25とよく似るが、52には内面の張り出しが見られない。胎土には大きな砂粒を含まず、外面はにぶい黄橙色、内面はうすい灰黄色を呈する。53は粗製深鉢の口縁で、直立気味だがやや外側にひらく。内外面ともに横方向の貝殻条痕が明瞭に残り、口縁部外面には浅い凹点が見られる。54は波状口縁鉢の波頂部片で、頂部には刻みが見られる。55は深鉢の底部である。約1/6の残存で、復元底径12.2cm、残存器高2.6cmを測る。56・57はSX205からの出土である。56は波状口縁の鉢、57は鉢の底部小片である。



第15図 SC126・169 実測図 (1/50)

②豊穴住居址 (SC)

SC126 (第15図、巻頭図版2-2、図版4-6)

A6グリッド付近で検出した、不整円形の豊穴住居址である。約1/2を確認し、残り半分は調査区外に広がる。現存長3.6m、深さ15cmである。埋土は一様な黄灰色粘土であった。床面にピットがあるが、住居址に伴うものかは不明である。炉は確認できていない。遺物の出土位置をドットで示したが、図示した以外にも多くの遺物が出土している。遺物はパンケース1箱分であった。

出土遺物 (第16図)

58は粗製深鉢で、外側にひらく口縁を有する。口縁部は内外面ともにナデているが、下位には横方向の条痕が明瞭に残る。胎土には3～5mmの砂粒を多く含む。59は波状口縁鉢の波頂部である。胎土は橙褐色、波頂部は短い円柱状を呈する。60は内外面に条痕が残る粗製深鉢口縁、61・62は細かい波状を呈する鉢口縁である。63は鉢の波頂部片で、口縁上面には頂部両側からの凹点が見られる。64～68は深鉢の口縁である。67は口縁部外面に刻目を施す。69は深鉢口縁部付近～胴部の破片と思われ、キャリパー形を呈する。天地、傾きに不安が残る。70・71は鉢の胴部で、磨消繩文土器である。72は口縁部・底部を欠く鉢である。復元底径11.4cm、残存器高12.2cmを測る。内面には粘土紐積み上げの痕跡が認められる。73・74は深鉢底部、75是有孔土製品である。

SC169 (第15図)

A12グリッドで検出した、隅丸方形の住居址である。深さが10cmに満たないため判断に迷ったが、底面に赤片した部分が見られたことから住居址と認定した。長軸3.1mである。出土遺物は少ない。

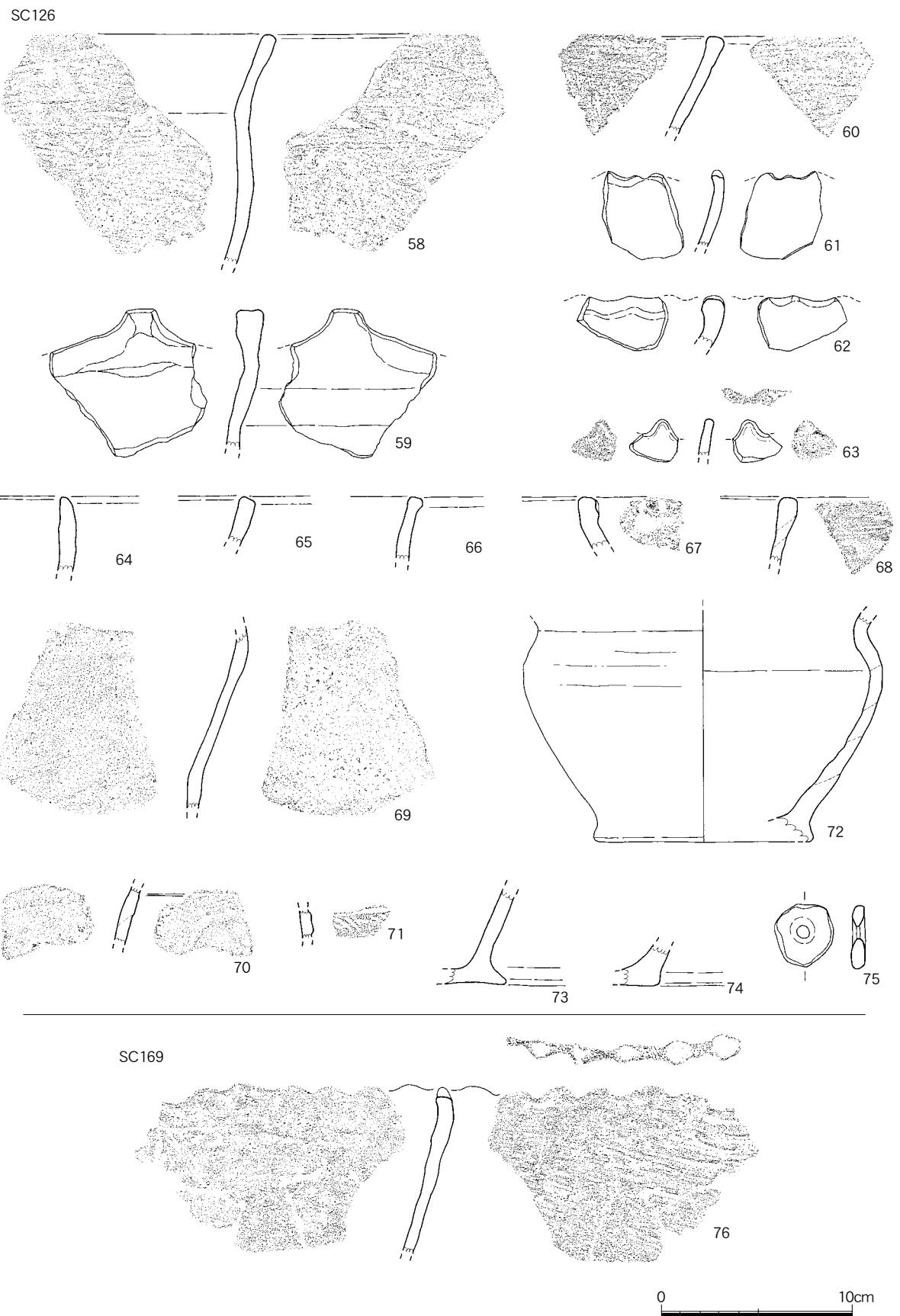
出土遺物 (第16図)

76は粗製深鉢の口縁である。口唇部には大きめの凹点を施し、小さな波形の口縁を呈する。外面には横方向の条痕が残り、内面にはナデを施す。

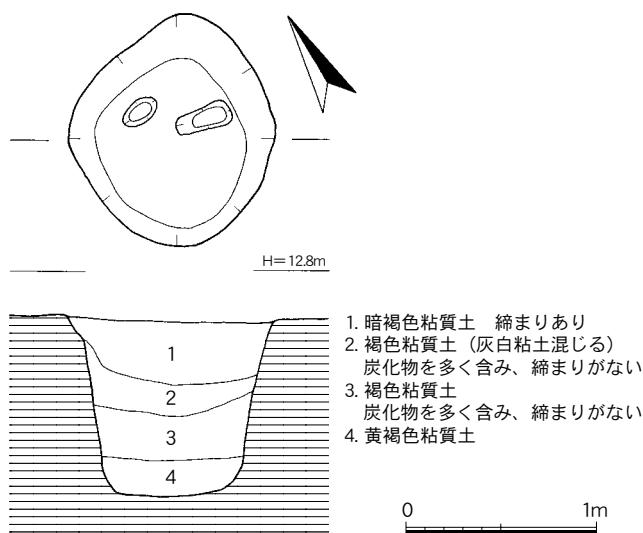
③土坑 (SK)

SK149 (第17図、図版4-7、4-8)

A12グリッド、SC169内で検出した土坑である。SC169に伴うものではなく、埋没後に掘り込まれたものと思われるが、前後関係は確認できていない。長軸1.2m、短軸1.1mの不整円形で、深さは約1mである。貯蔵穴であろうか。埋土を4層に分層し、2・3層からは炭化物が多量に出土したことから、放射性炭素年代測定を実施した。詳細は第5章に掲載しているが、分析の結果、紀元

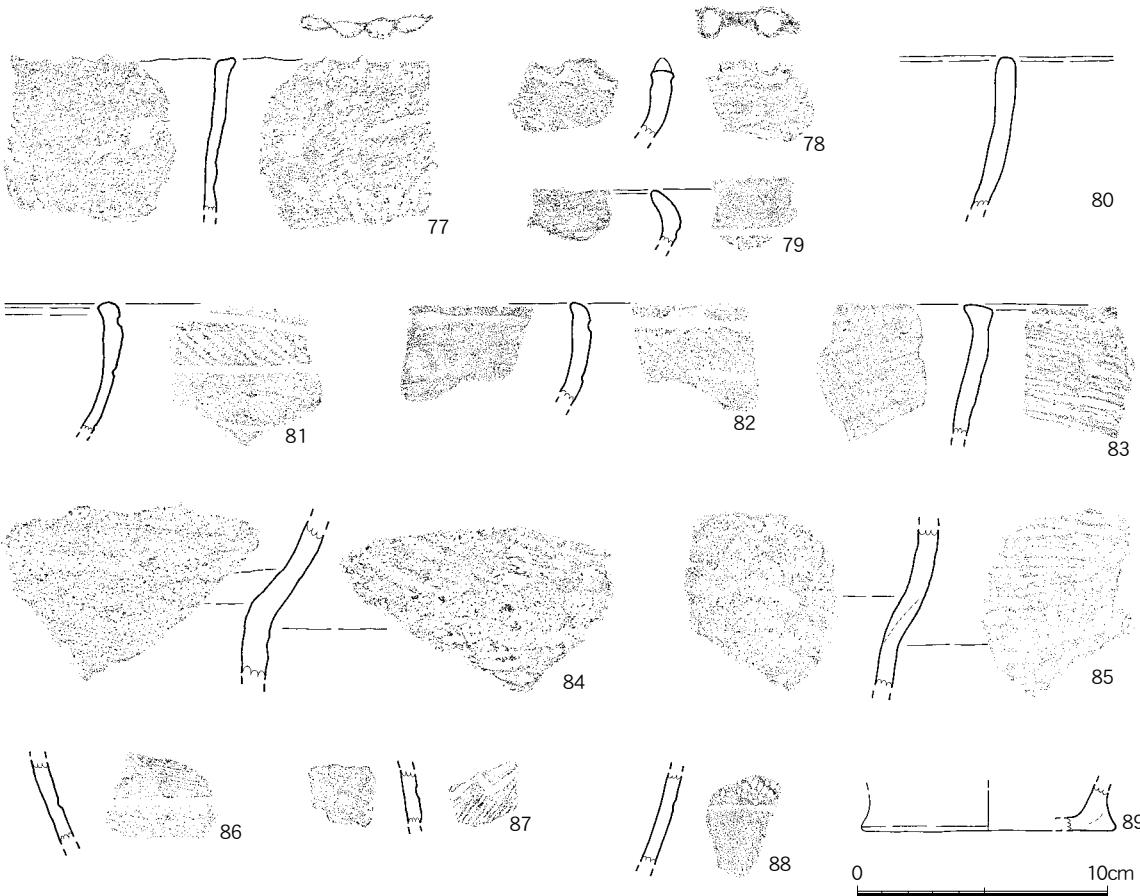


第16図 SC126・169出土遺物実測図 (1/3)



第17図 SK149 実測図 (1/40)

内面は条痕の後にナデを施している。84・85はキャリパー形の深鉢である。ともに傾きに不安が残る。85の外面には条痕が明瞭に残る。86は沈線の上位に擬似縄文が施されている。87・88は小片のため天地・傾きは不明であるが、いずれも磨消縄文土器である。89は鉢の底部である。底部外面はやや外に張り出す。



第18図 SK149 出土遺物実測図 (1/3)

前25世紀中頃～同23世紀末の値を得た。遺物も比較的まとまった量が出土している。出土遺物（第18図）

77は深鉢の口縁部で、口唇部には浅めの凹点を施す。外面は凹凸がひどく、粗い調整なのか凹線なのかはつきりしない。補修孔が一つ見られる。78は鉢口縁部で、口唇部には棒状工具によると思われる深い刻みを施す。79は磨消縄文の鉢口縁部である。沈線より下位には縄文を施す。80は粗製深鉢口縁部である。摩滅のため内外面の調整は不明。81・82は鉢口縁部で、同一個体の磨消縄文土器である。沈線間に縄文を施している。83は鉢口縁で、外面は条痕調整、

77は深鉢の口縁部で、口唇部には浅めの凹点を施す。外面は凹凸がひどく、粗い調整なのか凹線なのかはつきりしない。補修孔が一つ見られる。78は鉢口縁部で、口唇部には棒状工具によると思われる深い刻みを施す。79は磨消縄文の鉢口縁部である。沈線より下位には縄文を施す。80は粗製深鉢口縁部である。摩滅のため内外面の調整は不明。81・82は鉢口縁部で、同一個体の磨消縊文土器である。沈線間に縊文を施している。83は鉢口縁で、外面は条痕調整、

84・85はキャリパー形の深鉢である。ともに傾きに不安が残る。85の外面には条痕が明瞭に残る。86は沈線の上位に擬似縊文が施されている。87・88は小片のため天地・傾きは不明であるが、いずれも磨消縊文土器である。89は鉢の底部である。底部外面はやや外に張り出す。

④不明遺構 (SX)

包含層掘り下げ中や掘り下げ後に検出した、埋土に礫を含む土坑・ピットである。調査区西半にはほとんど見られない。人為的なものなのか、縄文土器と同時期の所産なのかどうかも判断がつかなかつたが、工程が迫っていたため、平面及び断面を実測して掘り下げた。急ぎの作業であったため、上面で検出した礫しか図に書き加えられていないものが多く、また、平面図と断面図に整合性がないものもある。当初は炉の可能性も考えたが、被熱・赤変しているものは見られなかった。この石入り土坑の一部は柱穴ではないかと考えているが、全てが柱穴かは分からず、後世に周囲の礫を集めて廃棄した穴の可能性もあるが、土坑内に新しい遺物は含まれておらず、判断の決め手に欠ける。

SX103 (第 19 図)

B2 グリッドで検出した円形の石入り土坑である。長軸 35cm、短軸 30cm、深さ 20cm を測る。中心部には礫がなく周囲を巡っており、据えた柱を固めたように見える。遺物は出土していない。

SX104 (第 19 図、図版 5-1)

B3 グリッドで検出した楕円形の石入り土坑である。長軸 40cm、短軸 35cm、深さ 40cm を測る。この遺構は特に礫が密に入っていた。遺物は出土していない。

SX105 (第 19 図)

B3 グリッドで検出した円形の石入り土坑である。径 40cm、深さ 10cm で、拳大の礫が少量出土したのみで、中心部分には礫が見られない。出土遺物は小片のみである。

SX107 (第 19 図)

C3 グリッドで検出した円形の石入り土坑である。径 30cm、深さ 10cm で、小礫～拳大の礫が密集して出土した。遺物は出土していない。

SX109 (第 19 図、図版 5-2、5-3)

A3 グリッドで検出した楕円形の石入り土坑である。長軸 70cm、短軸 50cm、深さ 35cm を測る。拳大の礫が東半分に寄っており、北西部には見られなかった。出土遺物は小片のみである。

SX110 (第 19 図、図版 5-4、5-5)

A3 グリッドで検出した、長軸 1.2 m、短軸 0.7 m の不整形な石入り土坑である。深さは 25cm で、東端はさらに 25cm 深くなる。小礫～拳大以上の礫が多数出土したが、礫を含む部分と含まない部分とが見られる。出土遺物は少量であった。

出土遺物 (第 20 図)

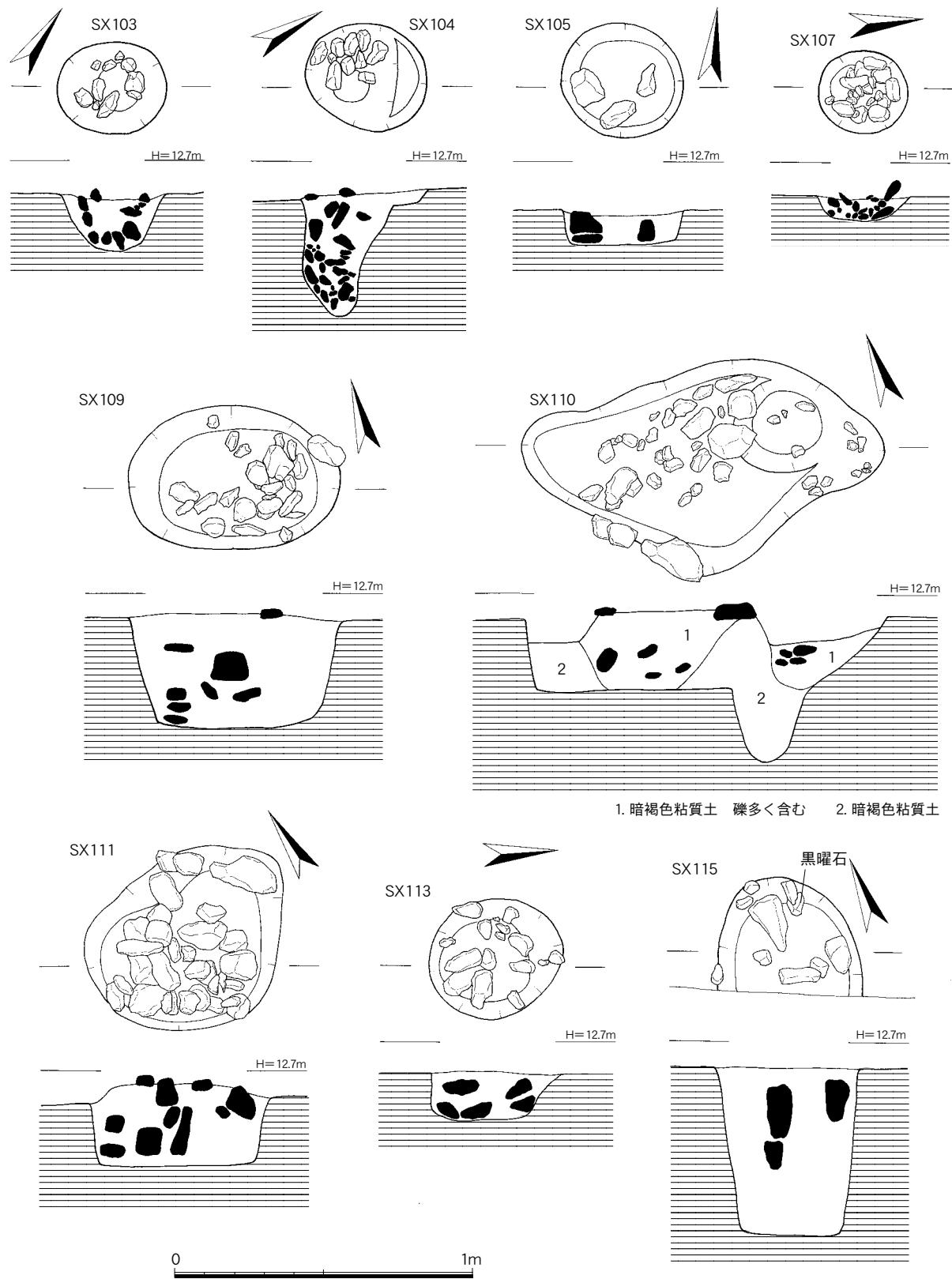
90 は深鉢口縁である。口縁部外面には凹点、口唇部には浅い沈線状の凹みが見られる。

SX111 (第 19 図、図版 5-6、5-7、5-8)

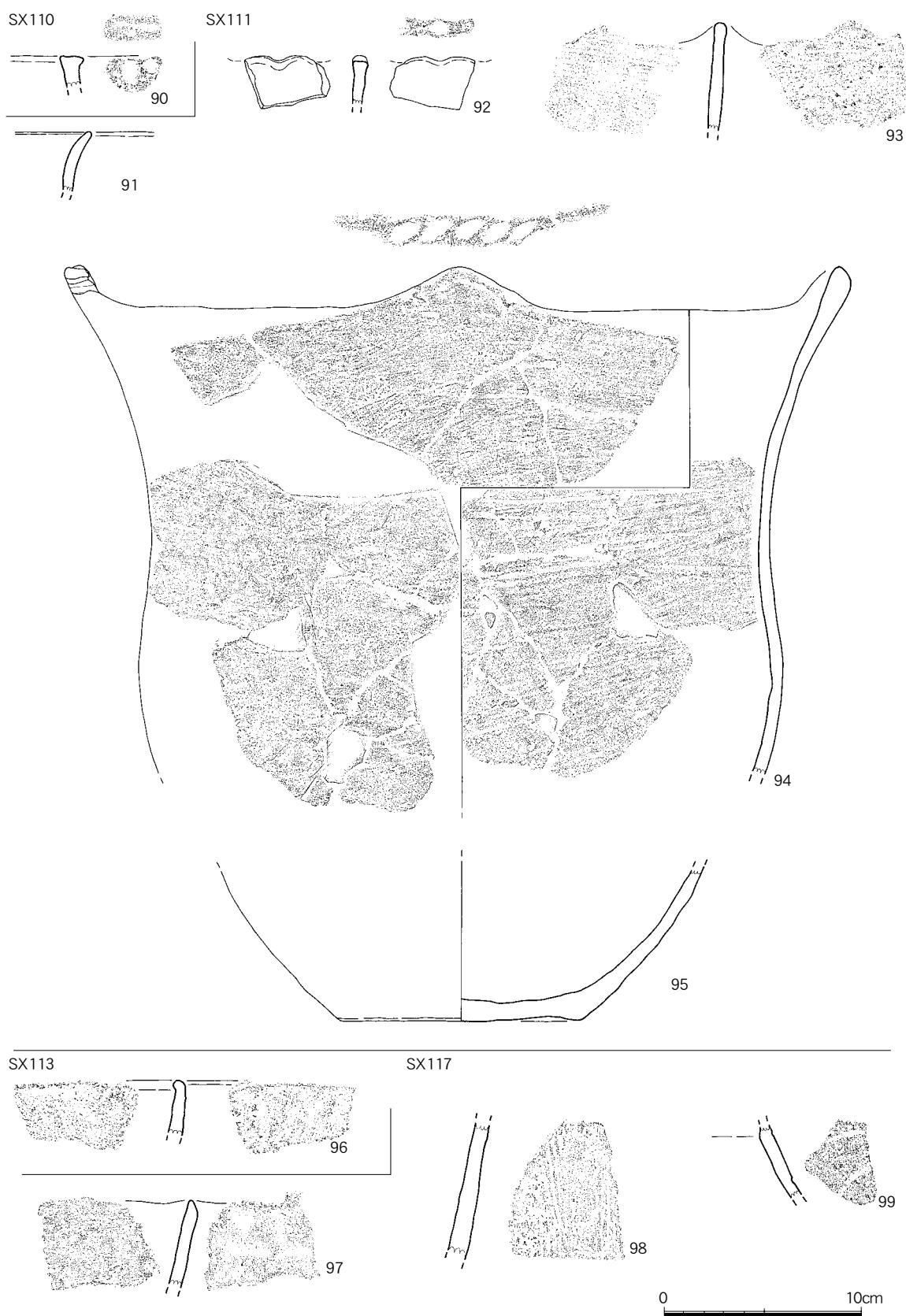
B3 グリッドで検出した不整形な石入り土坑である。長軸 70cm、短軸 60cm、深さ 25cm を測る。上層には拳大以上の礫が密集しており、下層からは土器片もまとまって出土した。

出土遺物 (第 20 図)

91 は鉢で、湾曲しながら外に開く口縁である。92 は深鉢の口縁で、口唇部に凹点を施す。93 はほぼ直立する深鉢口縁で、口縁に山形の隆起部がある。内外面には横方向の条痕が明瞭に残る。94 は波状口縁の深鉢である。全体の遺存状況が良くなく破片を図上で合成したため、径・傾きなどに不安が残る。波頂部は 4 単位と考え復元した。復元口径 39.4cm、残存器高 25.6cm である。胴部から頸部にかけてわずかにすぼまり、ゆるいカーブを描きながら口縁が外に開く。波頂部の口唇部には刻目が 5 つ施されている。口縁部内外面はナデを施し、内面下位には横方向の条痕が残る。胴部外面はナデ、頸部から口縁下位付近には横方向の粗い調整を施している。95 は深鉢底部で、復元底径 12.2cm、残存器高 7.6cm である。94 と同一個体と思われるが、接点は見つけられなかった。



第19図 SX103・104・105・107・109・110・111・113・115 実測図 (1/20)



第20図 SX110・111・113・117出土遺物実測図 (1/3)

SX113 (第 19 図、図版 6-1)

C4 グリッドで検出した円形の石入り土坑である。長軸 45cm、短軸 40cm、深さ 15cm を測る。拳大の礫が多く、中心付近に若干隙間が空いているように見える。出土遺物は少量である。

出土遺物 (第 20 図)

96 は粗製深鉢の口縁で、口縁部内面がわずかに張り出す。外面には指頭の痕跡が残る。

SX114 (第 21 図、図版 6-2)

C4 グリッドで検出した円形の石入り土坑である。径 45cm 前後、深さ 20cm を測る。断面図では分かりにくいが、上面検出時には拳大以上の礫が隙間無く詰まっていた。SX121 とわずかに重複しており、SX114 が切るように思われる。出土遺物は土器小片のみである。

SX115 (第 19 図)

C4 グリッドで検出した、長軸 40cm 以上、短軸 50cm の石入り土坑である。深さ 55cm で、小礫～拳大の礫が散漫に含まれる。出土土器は小片のみであったが、拳大の黒曜石が 1 点出土した。長さ 9cm、幅 6cm 程で、白色の不純物を多く含んでいる。1 面は割れているが、その他は自然面が残る。

SX117 (第 21 図、図版 6-3、6-4)

B5 グリッドで検出した平面卵形の石入り土坑である。長軸 65cm、短軸 45cm、深さ 35cm を測る。小礫～拳大以上の礫が多量に入っていた。断面図には示されていないが、下層にも多量の礫があり、底面に沿った状態で出土している。出土遺物は土器口縁部、胴部、底部片などである。

出土遺物 (第 20 図)

97 は粗製深鉢の口縁と考えたが、胴部破片の可能性もある。外面には指頭による凹凸が多い。98 は深鉢胴部で、外面は縦方向の条痕調整、内面はナデを施す。99 は磨消縄文土器の鉢胴部片である。沈線が 2 条見られるが、摩滅のため縄文は不明瞭である。

SX121 (第 21 図、図版 6-5)

C5 グリッドで検出した楕円形の石入り土坑で、SX114 に切られると思われる。長軸 65cm、短軸 40cm、深さ 40cm を測る。上面には比較的大きめの礫があるが、下層にはほとんど礫が入っていない。

出土遺物 (第 22 図)

100 は鉢口縁で、口唇部には密に刻目が施され、ギザギザの山形状を呈している。101～103 は粗製深鉢の口縁である。101 は波状気味の口縁で、復元口径 23.3cm。外面はナデ調整、内面には横方向の条痕が残る。102 は直立気味の口縁で、口唇部に小さく浅い凹点を施し、外面には貝殻条痕が残る。104・105 は波状口縁の鉢の波頂部、106・107 は磨消縄文土器の鉢胴部片である。108・109 は深鉢底部の小片である。108 の外面には指頭の痕跡が見られる。

SX123

C5 グリッドで検出した、長軸 30cm 以上、短軸 30cm、深さ 15cm の小さな石入り土坑である。SX125 に切られる。小礫がわずかに入っていた。出土遺物は少量である。

出土遺物 (第 22 図)

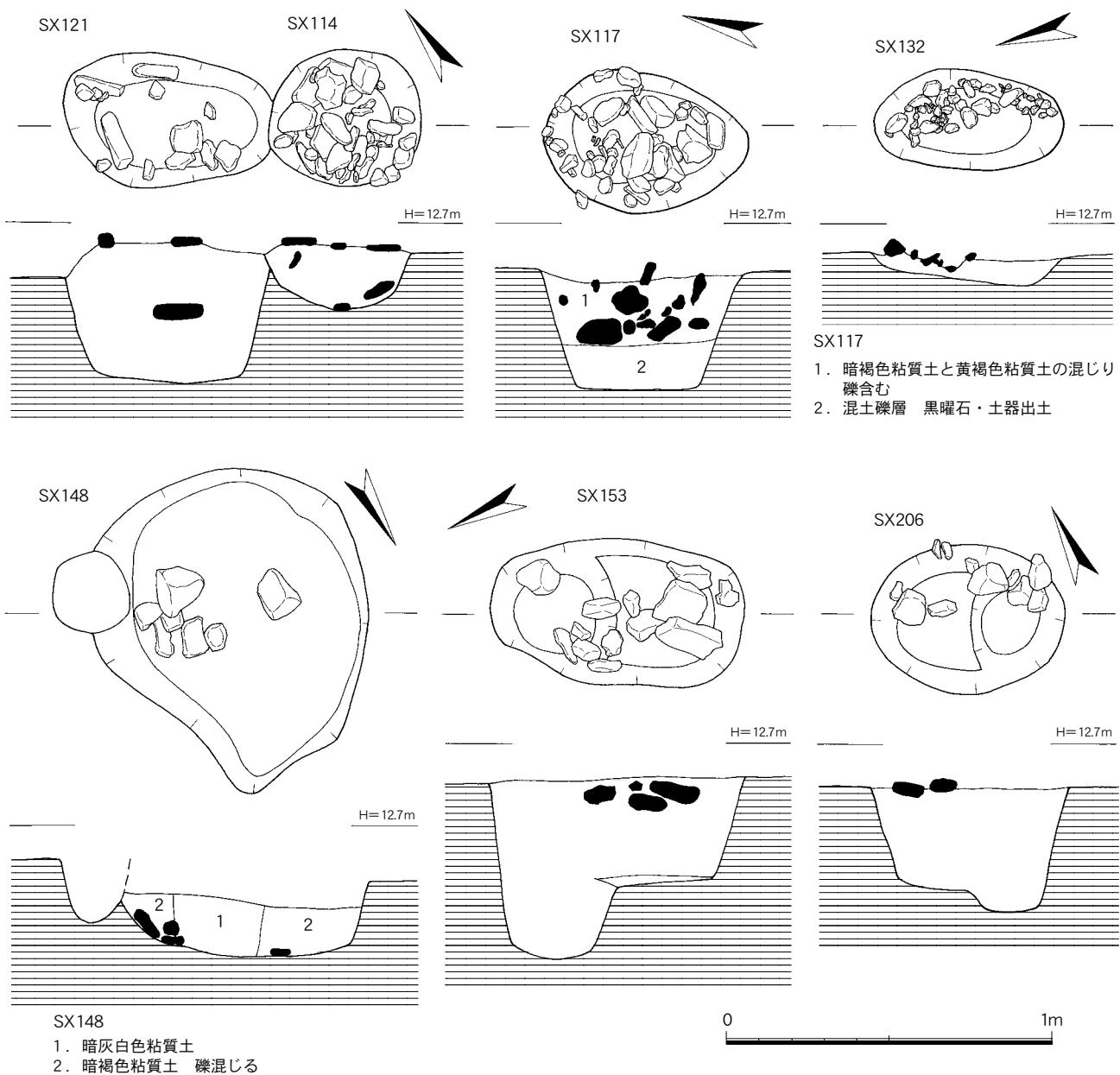
110 は鉢胴部で、凹線を有する。111 は深鉢底部である。約 1/4 の残存で、復元底径 14.0cm を測る。

SX129

A5 グリッドで検出した、径 25cm 程度の円形の石入り土坑である。深さは 20cm。小礫がわずかに入っていた。出土遺物は少量である。

出土遺物 (第 22 図)

112 は粗製深鉢の口縁である。内面はヨコナデ、外面の調整は不明である。



第 21 図 SX114・117・121・132・148・153・206 実測図 (1/20)

SX132 (第 21 図)

A1 グリッドで検出した長楕円形の石入り土坑である。長軸 60cm、短軸 30cm、深さ 10cm を測る。上面には小礫が密集していた。出土遺物は小片のみである。

SX145

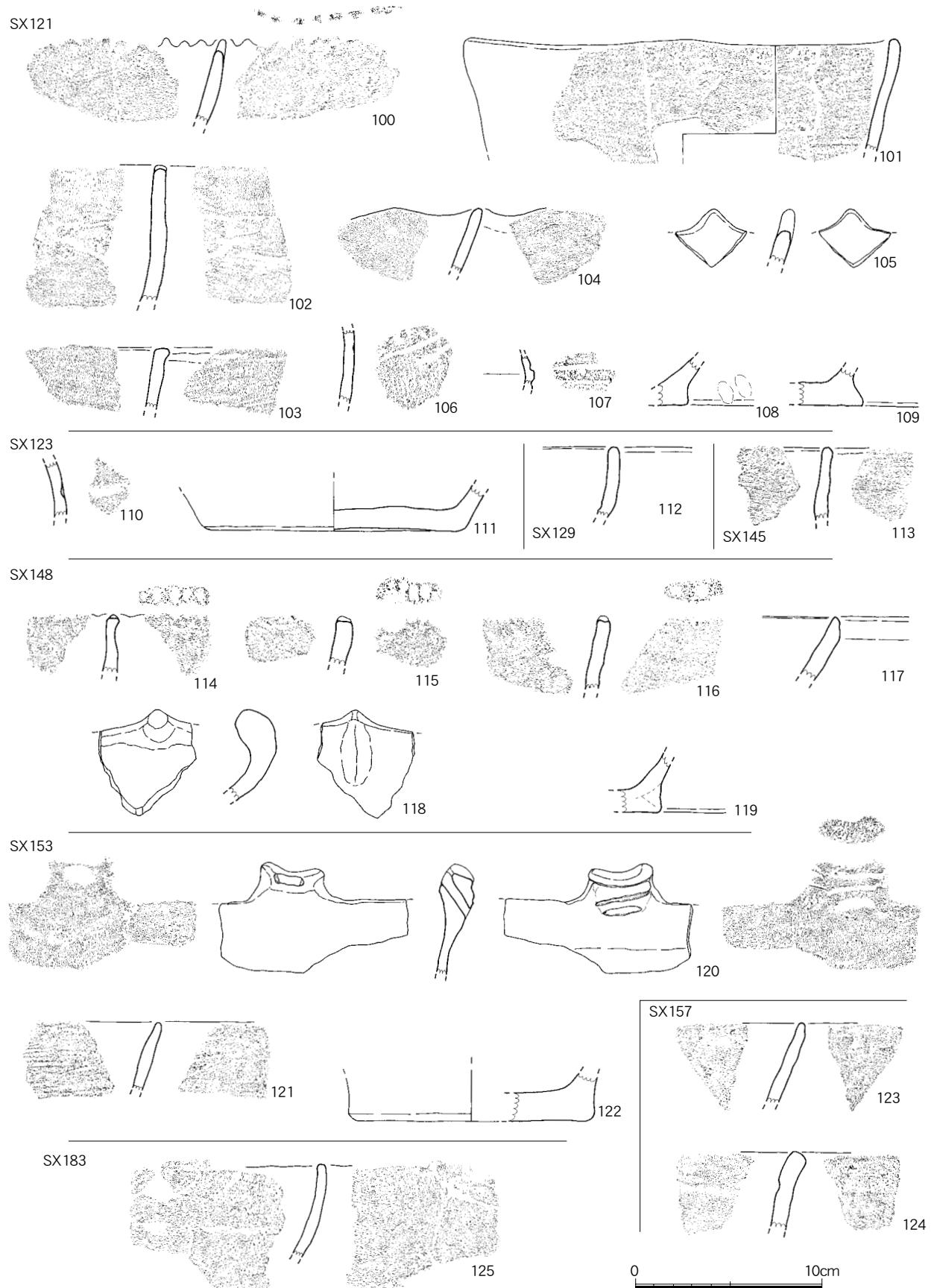
C9 グリッドで検出した、長軸 50cm、短軸 35cm の石入り土坑である。小礫がわずかに入っている。出土遺物は少量である。

出土遺物 (第 22 図)

113 は粗製深鉢の口縁で、外面は横方向の調整、内面はナデ調整である。

SX148 (第 21 図、図版 6-6)

C13 グリッドで検出した不整形な石入り土坑である。長軸 100cm、短軸 85cm、深さ 30cm を測る。他の土坑に比べて規模が一回り大きい。底面付近には拳大の礫が入っていた。礫は 2 層に含まれ、



第22図 SX121・123・129・145・148・153・157・183出土遺物実測図 (1/3)

1層には見られない。出土遺物は少量だが、口縁部、底部等が出土している。

出土遺物（第22図）

114～116は鉢あるいは深鉢の口縁部で、いずれも口唇部に刺突による施文が見られる。114・115は刻目、116は凹点である。117は鉢の口縁で、内外面の調整はナデである。118は波状口縁の波頂部で、内側に大きく湾曲する。胎土は精緻で、にぶい橙色を呈す。119は深鉢底部片である。

SX153（第21図）

B10グリッドで検出した、長軸75cm、短軸45cmの石入り土坑である。テラスを有し、最深部で深さ55cmを測る。上面には長さ20cm程の扁平な礫が見られる。

出土遺物（第22図）

120は鉢口縁と思われ、高さ2cm、幅3cmの頂部を有する。頂部には縦0.3cm、横1.8cmの細長い孔が貫通しており、頂部外面には2条の沈線が見られる。内外面ともにナデ調整で、にぶい橙色を呈す。121は粗製深鉢の口縁で、外面はナデ調整、内面は条痕調整である。122は深鉢底部である。

SX157

B10グリッドで検出した、長軸70cm、短軸60cmの石入り土坑である。上面にわずかに礫が含まれていた。出土遺物は少量である。

出土遺物（第22図）

123は鉢口縁で両面ナデ調整、124は深鉢口縁で、内面に凹線状の浅い凹みが見られる。

SX183

C9グリッドで検出した、長軸40cm、短軸30cmの石入り土坑である。20cm程度の大きさの礫が複数入っており、そのうち一つは立った状態であった。出土遺物は少量である。

出土遺物（第22図）

125は粗製深鉢で、湾曲気味の口縁である。外面調整はナデと縦方向の擦過、内面はヨコナデ調整である。内面には幅2cm程度の粘土接合痕が明瞭に残る。

SX206（第21図、図版6-7）

B4グリッドで検出した楕円形の石入り土坑である。長軸60cm、短軸50cm。テラスを有し、最深部では深さ40cmを測る。上面には小礫から20cm程の礫が広がっていたが、下層には見られない。粗製深鉢が潰れた状態で出土している。

出土遺物（第23図）

126は粗製深鉢口縁で、約1/4の残存である。頸部から外反する口縁で、口縁内面はわずかに肥厚している。歪みが激しく、口縁が外反せずに直立している部分があったり、口縁部が楕円形を呈するなど、いびつな個体である。口径28.0cmに復元したが、本来の大きさになっているか心許ない。127は粗製深鉢の胴部から底部であるが、こちらも歪みが著しい。126と同一個体と思われるが、接点が無いうえに復元した径も異なり、うまく合成できなかった。底径12.8cm、残存器高21.5cm。

SX177

C15グリッド付近で検出した遺物包含層である。当初は竪穴住居址の可能性も考えたが、壁の立ち上がりが不明瞭であったため、窪みに溜まった包含層と判断した。

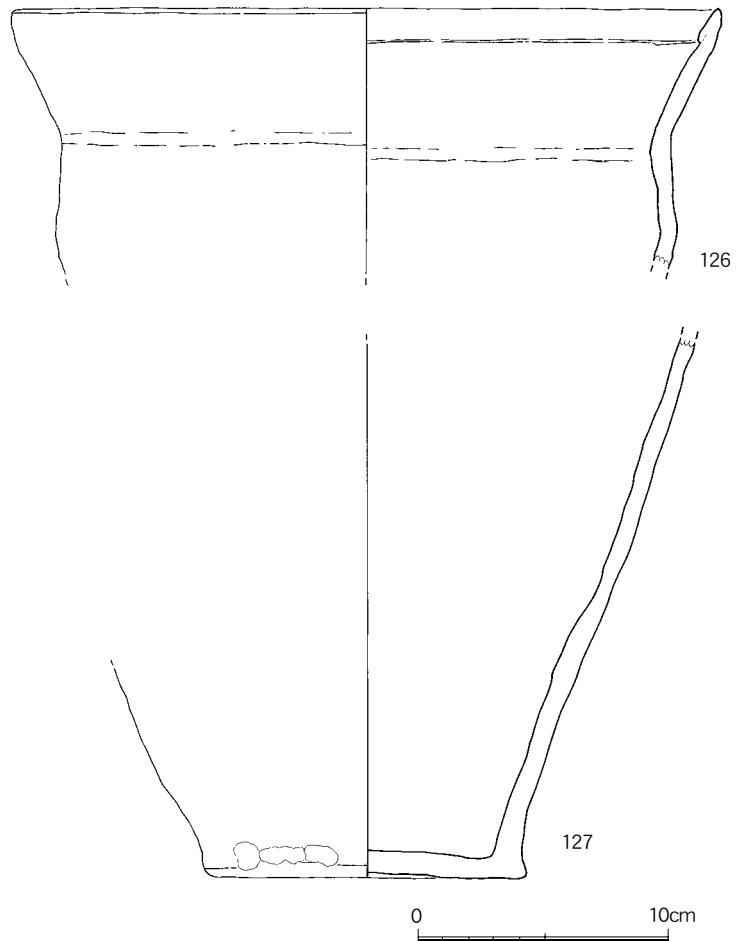
出土遺物（第24図）

128は粗製深鉢の口縁で、外面はナデ調整、内面は条痕調整の後にナデている。口唇部には浅い凹点を施す。129は鉢で、口縁はわずかに外反する。外面には横方向の条痕が明瞭に残り、口唇部に連続して凹点を施す。130～132は粗製深鉢の底部である。130と132は同一個体と思われる。132

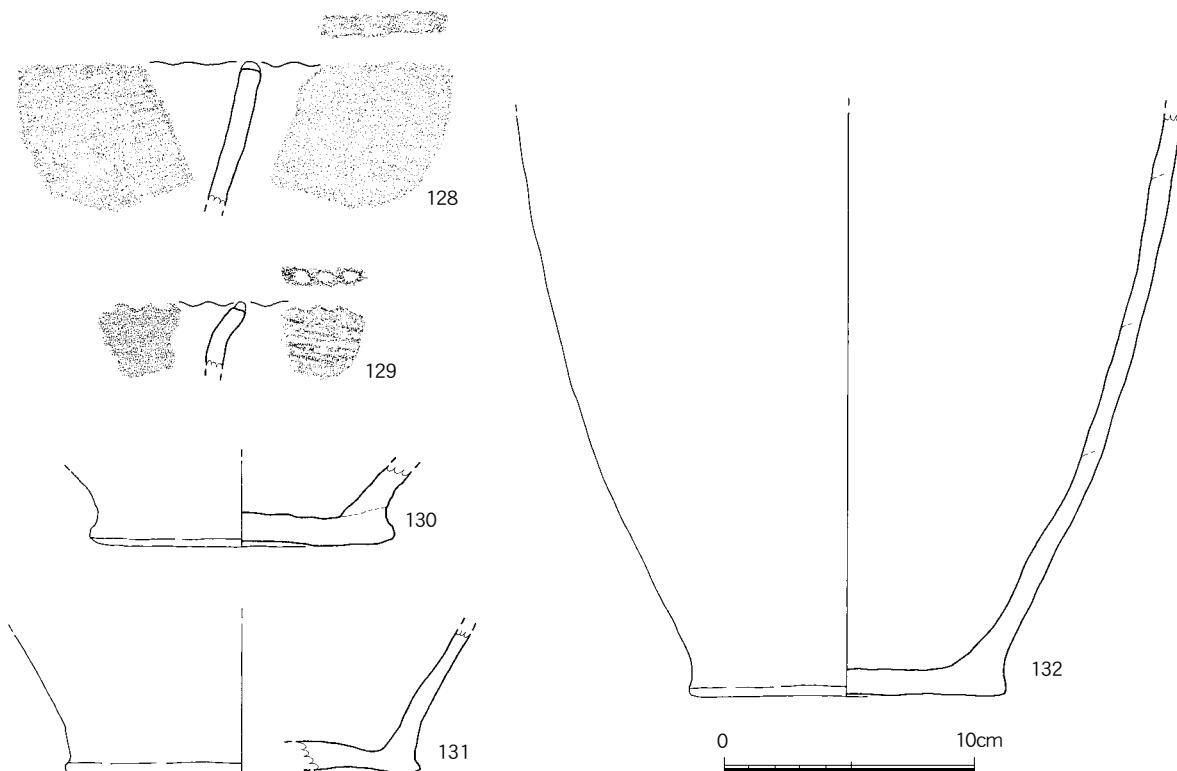
はSX177の上面でまとめて出土したもので、復元底径12.6cm、残存器高23.0cmを測る。内外面ともに摩滅が著しく調整不明瞭である。131は約1/3の残存で、復元底径14.0cm、残存器高5.6cmを測る。外面には指頭によると思われる凹凸が見られる。

⑤ピット出土遺物（第25図）

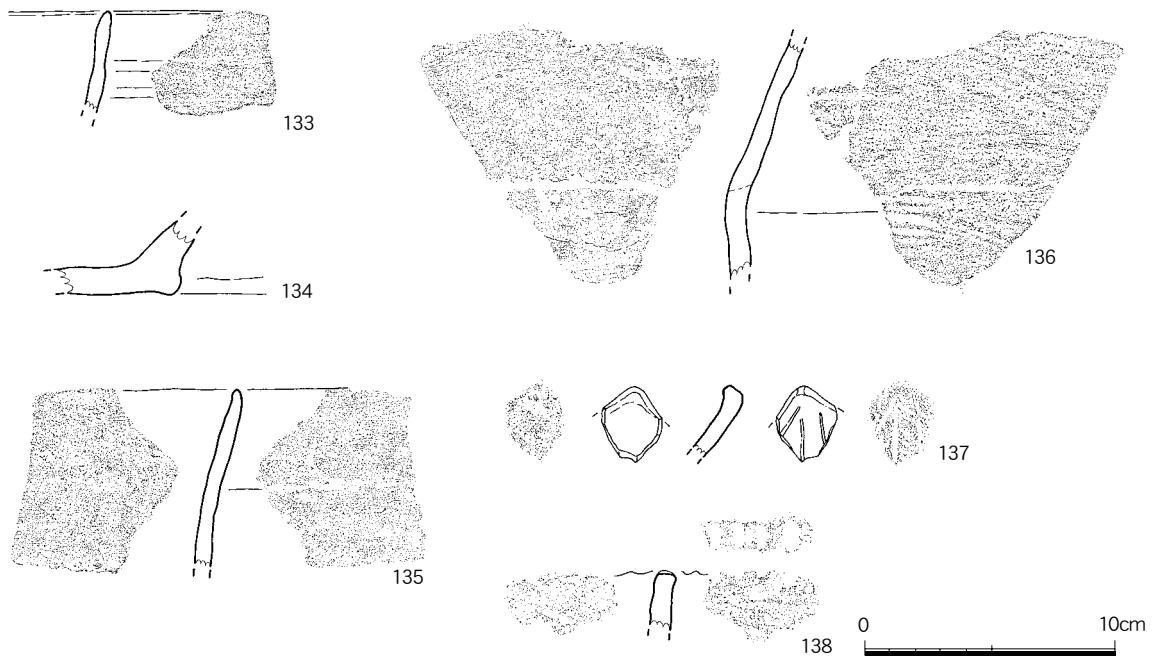
133は粗製深鉢の口縁で、内外面ともにナデ調整を施す。SP160からの出土。134は深鉢底部、135は粗製深鉢口縁である。135はやや外に開く口縁で、内面には粘土の接合単位が見られる。ともにSP163からの出土である。136は粗製深鉢の胴屈曲部で、キャリパー形を呈する。外面には横方向の条痕が見られる。SP173からの出土。137は波状口縁鉢の波頂部で、外面には3条の沈線が見られる。138は深鉢の口縁部で、口唇部には刻みを施している。ともにSP203からの出土である。



第23図 SX206出土遺物実測図（1/3）



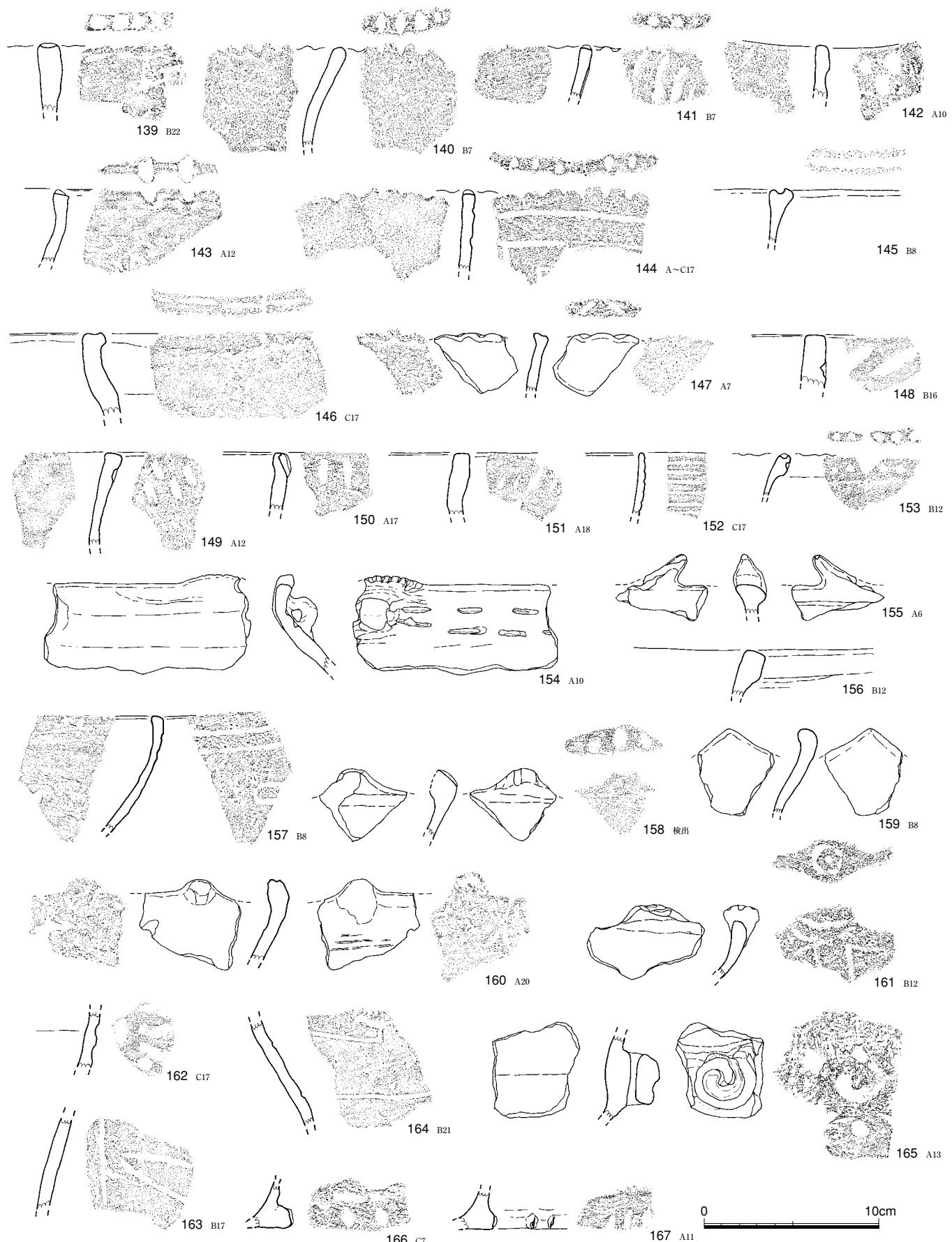
第24図 SX177出土遺物実測図（1/3）



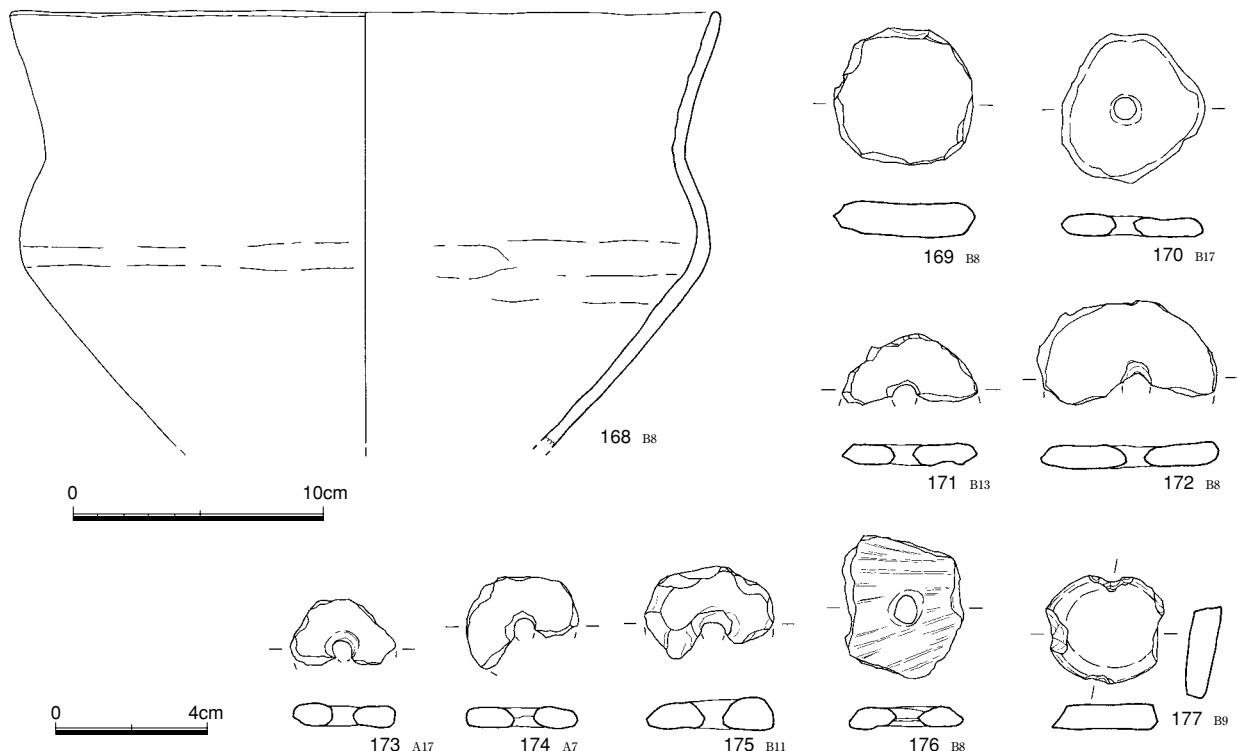
第 25 図 ピット出土遺物実測図 (1/3)

その他の出土土器 (第 26 図、第 27 図)

グリッドで取り上げたものや検出時の出土遺物で、文様のあるものを中心にはじめに掲載した。図の遺物番号横に出土地点を記している。139～157は鉢あるいは深鉢の口縁部片である。139は厚みのある器壁で、口縁部上面に刺突文を施す。140は口縁が外に広がる器形で、口唇部に深めの刻目を施し、細かい山形状の口縁になっている。141は口唇部に浅めの凹点を施し、外面には4条の凹線を有する。142はやや波状気味の口縁で、外面に凹点を施す。143は口縁部上面に大きめの断面U字形の刻目を施す。144は口唇部に刻みを施し、外面には横及び縦方向の沈線が見られる。145・146は口唇部に沈線を有する。147は口縁端部内面がわずかに張り出し、口唇部にはハの字状に刻目を施す。148は器壁が厚く、外面には斜め方向の凹線文を施す。149は外反気味の口縁で、外面には棒状工具による列点状の文様が二段に施されている。150は口縁部外面に棒状工具による直線文を施す。151はわずかに肥厚した口縁で、肥厚部の下端に小さく浅い刻目を施す。152は薄手の口縁で、外面には横方向の沈線が6条認められる。153は外にひらく口縁で、幅1cm程口縁部を肥厚させている。肥厚部と口唇部には径4mmの刺突文を等間隔に施す。154は鉢口縁で、胴部から内傾しながらすぼまり、口縁部はわずかに外反する。口縁部の一箇所には粘土を貼り付けて刻目を施し、その下には橋状把手を貼り付けている。外面には棒状工具による二列の沈線文が見られる。155は鉢口縁で、三角形状の突起部を有する。156は波状気味の口縁で、幅1cm程口縁部を肥厚させている。157は口縁から胴部にかけて湾曲してすぼまる器形で、外面には沈線で区画された範囲に縄文が見られる。158～161は波状口縁の波頂部である。158は口縁部上面に浅い刻みが三ヶ所見られる。159は胴部から湾曲しながらひらく口縁である。161の頂部上面には中央に刺突文、周囲に円形の沈線を施し、外面には不定方向の沈線文が見られる。162～164は文様のある胴部片である。162は凹線・凹点を有し、胎土に滑石を含んでいる。163は沈線文、164は沈線と擬似縄文を施す。165は鉢の把手部と思われ、外面には渦巻き状の文様を施す。把手部分には縦方向に孔が貫通している。166・167は深鉢底部片で、底部外面には刻目を施す。168は底部を欠く鉢である。膨らんだ胴部から頸部にかけてわずかにすぼまり、口縁が外にひらく。摩滅のため調整は不明瞭である。復



第 26 図 その他の出土遺物実測図① (1/3)



第27図 その他の出土遺物実測図② (1/3、1/2)

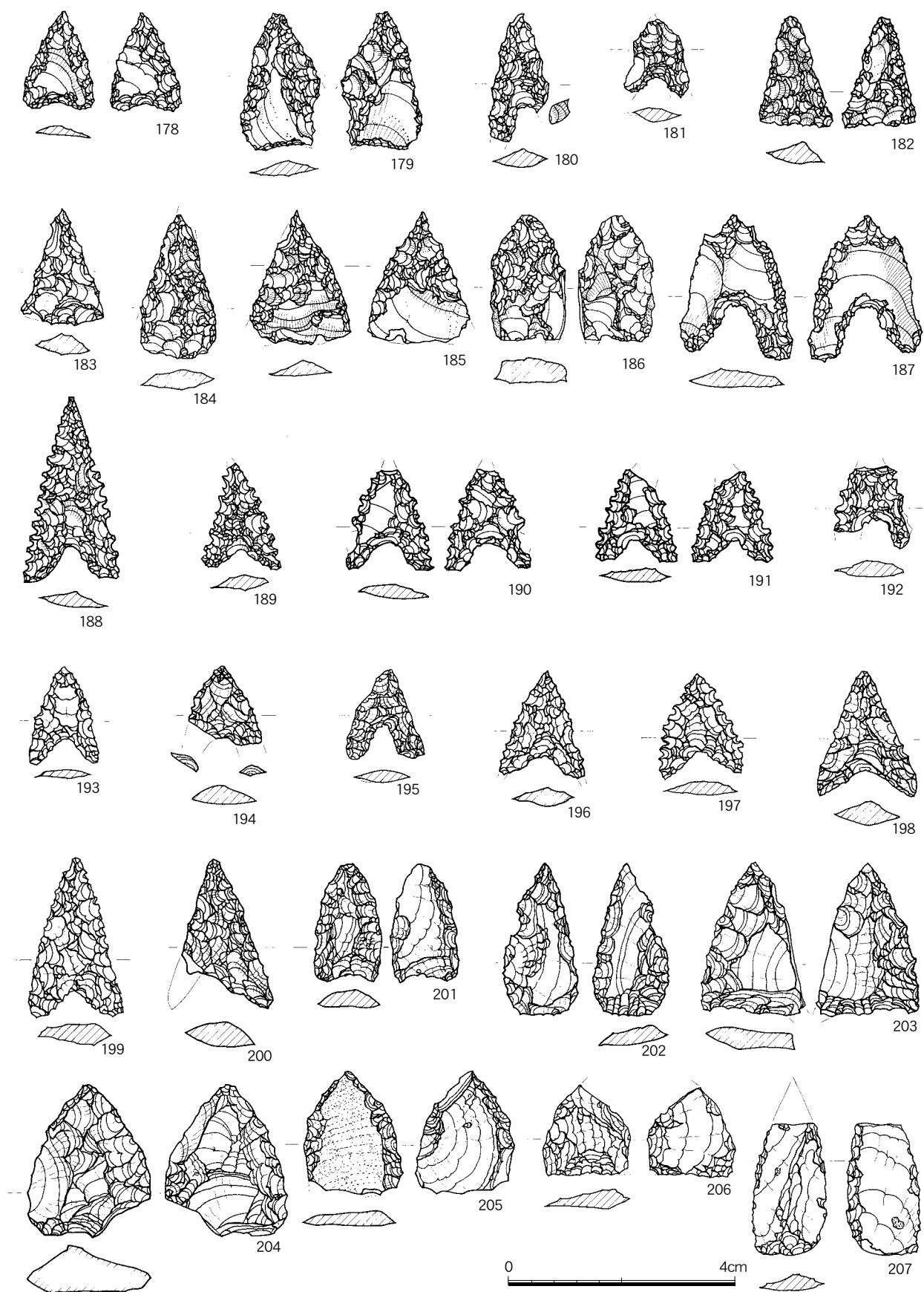
元口径 28.2cm。169 は土製円盤、170 ~ 176 は有孔円盤である。176 は土器片再加工品で、貝殻条痕が認められる。177 は土錘で、円盤状に成形し、焼成後に主に裏から四つ掛け緊縛用に打ち欠いて仕上げている。

石器 (第28図~第31図、)

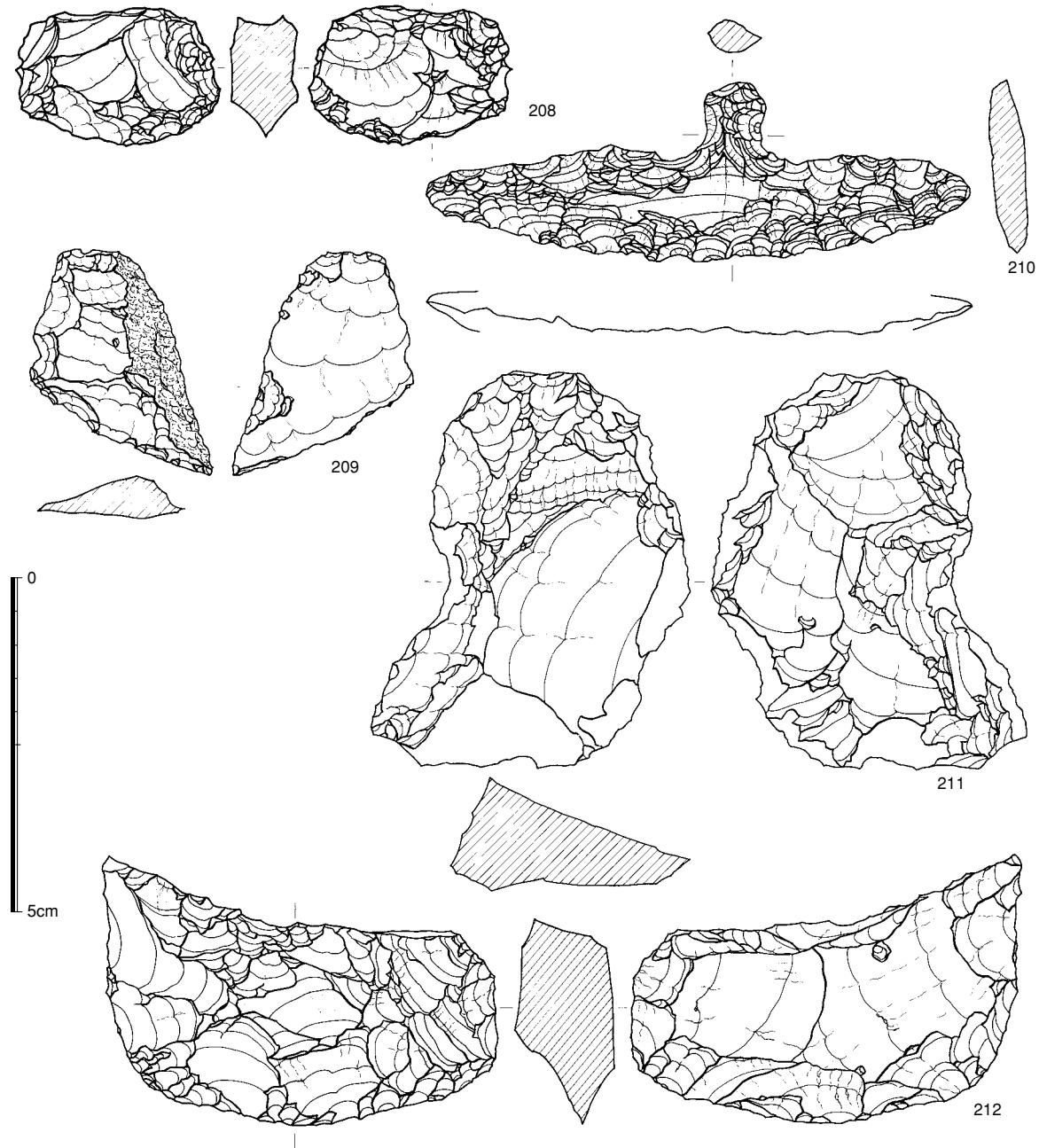
紙数の都合により、2区出土石器の中から選別して掲載した。今回報告するものに他にコンテナケース数箱分の石器があり、黒曜石製石器・磨石・敲打具・石皿・台石などが多数出土している。

178 ~ 192 は黒曜石製打製石鏃である。178・179 はやや内湾する基部で、表裏ともに素材剥離面を残す。180・181 は基部が大きく抉れるもの、182 ~ 186 は基部が直線的なものと、やや膨らむものである。187 は剥片鏃で、素材剥離面を大きく残し、基部と側縁に押圧剥離加工を施す。188 ~ 192 は側縁が鋸歯状をなすものである。188 はやや大型で、全面に丁寧な押圧剥離加工を施し、断面形は凸レンズ状を呈する。193 ~ 207 は安山岩製打製石鏃である。193 ~ 201 は内湾する基部あるいは逆V字状の基部で、表裏とも丁寧な押圧剥離加工を施すものが多い。200 は乳白色ガラス質でやや光沢があり、一見姫島産黒曜石のように見えるが、姫島産出安山岩との教示を得た。201 ~ 203 は横剥ぎ剥片を素材とし、素材剥離面を残しつつ二等辺三角形状に仕上げている。208・209・211・212 はスクレイパーである。208 は 200 と同様の姫島産出安山岩と考えた。下縁に刃部を作り出している。212 は下縁に剥離加工を加え、鋭い刃部を作り出している。210 は石匙である。表裏とも中央付近に素材剥離面を残すが、縁には丁寧な押圧剥離加工を施してつまみ部と刃部を作り出している。

213 ~ 218 は蛤刃石斧である。213 は粗割りした頁岩を素材とし、剥離・敲打により成形し、研磨を加えて横断面形を不正楕円形に仕上げている。体部から頭部にかけては敲打痕が残り、蛤刃は丁寧に仕上げている。頭部は折断し、折断面は丁寧に研磨を加えている。215 はやや小型の蛤刃石斧で、刃部には研磨を施すが、体部には敲打痕が残る。216・217 は破片であるが、蛤刃石斧と考



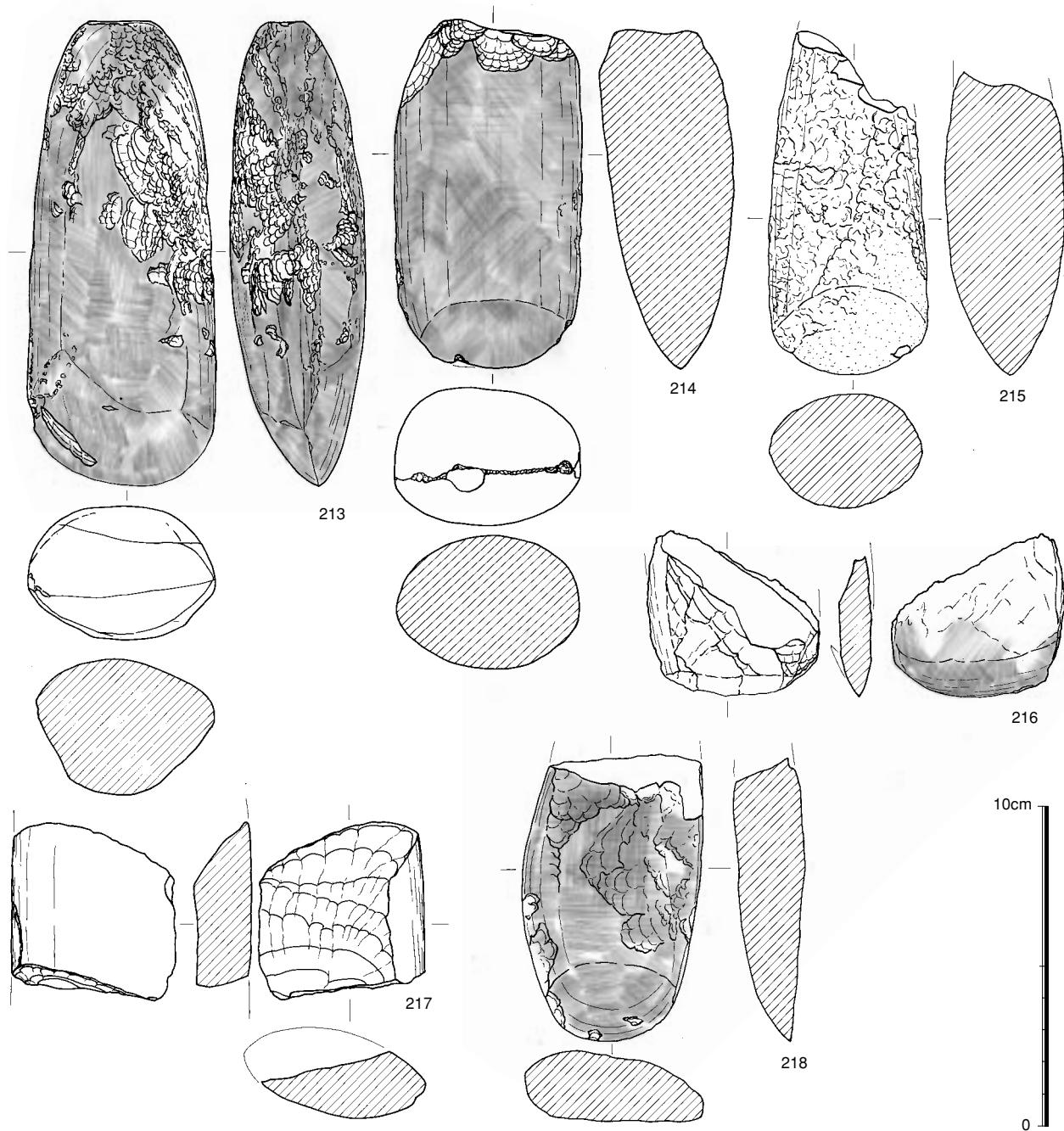
第28図 2区出土石器実測図① (1/1)



第29図 2区出土石器実測図② (1/1)

えた。218はやや歪な形態である。敲打成形後に研磨を施し仕上げている。刃部は薄めである。

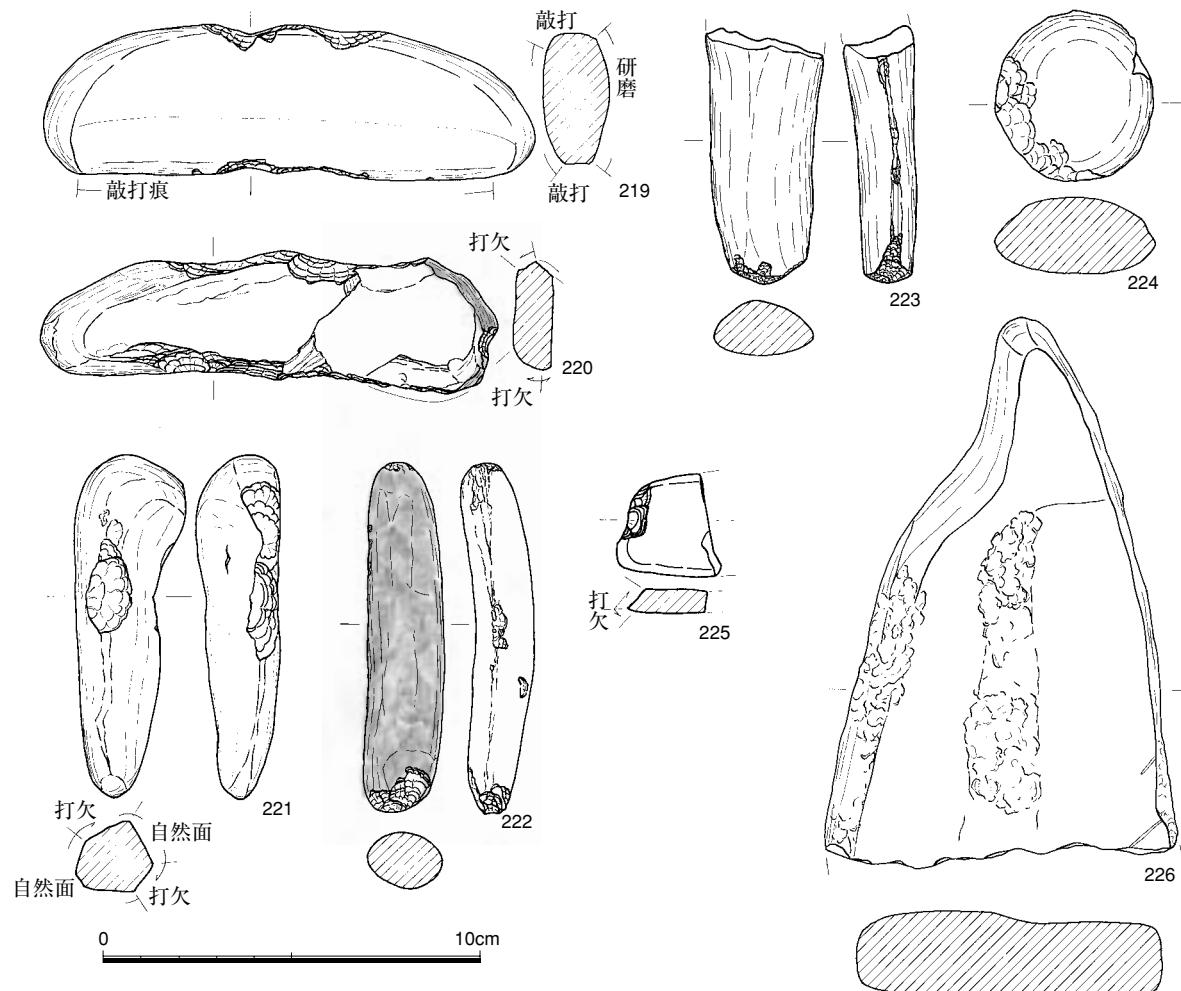
219～221は不明石製品で、石錐あるいは敲打具とした。219は転石を素材とし、ブーメラン状に敲打した後に研磨することによって仕上げ、中央部の上縁・下縁を二箇所ずつ敲打により打ち欠いている。下縁には敲打痕が残る。一見独鉛石状をなす。220は厚さ1.1cmの扁平な滑石片岩で、中央付近の上縁・下縁に打ち欠きを施し、抉りを作り出している。221は横断面形隅丸三角形の棒状の転石を素材とし、中央より太さのある上側の稜線の二箇所を打ち欠いている。緊縛部を作り出したものであろうか。222・223は敲打具と考えた。222はやや湾曲気味の石材を使用し、図の下端には敲打によると思われる凹凸が見られる。反対側端部は丸くおさまっている。223も同様に、端部に敲打の痕跡と思われるものが見られる。225は石錐小片で、打ち欠きを施し、緊縛用の抉りを作り出している。226は台石で、中央付近には凹部が見られる。



第30図 2区出土石器実測図③ (1/2)

第2表 2区出土石器属性表①

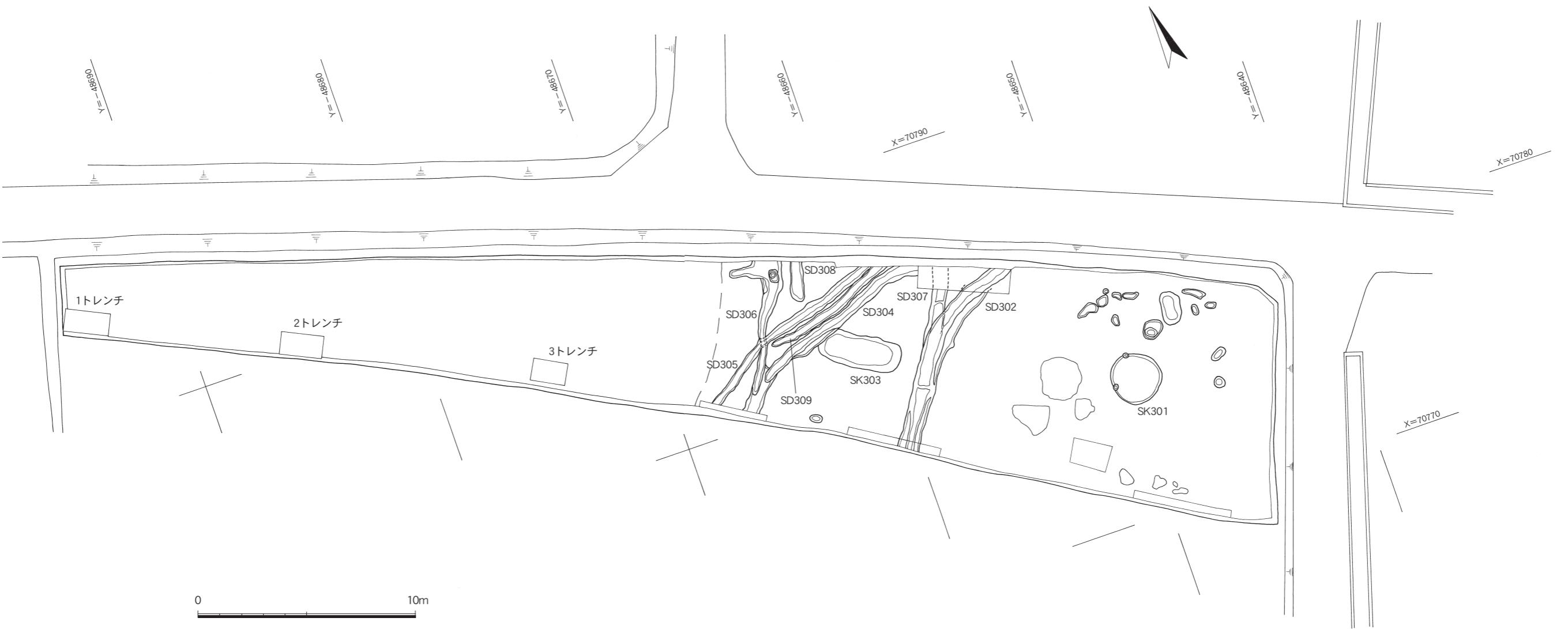
番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土遺構・地点	備考
178	打製石鏟	黒曜石	1.76	1.28	0.18	0.36	B9グリッド	
179	打製石鏟	黒曜石	2.47	1.42	0.27	0.81	B7グリッド	右脚部欠損
180	打製石鏟	黒曜石	2.30	1.10	0.32	0.64	B12グリッド	先端及び両脚部欠損
181	打製石鏟	黒曜石	1.40	1.16	0.26	0.36	B13グリッド	先端及び両脚部欠損 左側縁にガジリ有
182	打製石鏟	黒曜石	2.00	1.30	0.40	0.78	A9グリッド	
183	打製石鏟	黒曜石	2.08	1.48	0.40	0.80	SX177	基部にガジリ有
184	打製石鏟	黒曜石	2.55	1.37	0.39	1.03	A1グリッド	先端ガジリ有
185	打製石鏟	黒曜石	2.40	1.80	0.30	0.86	SK149 上層	左脚部欠損 ガジリ有
186	打製石鏟	黒曜石	2.27	1.34	0.46	1.42	SX125 上層	脚欠損
187	打製石鏟	黒曜石	2.60	2.00	0.33	1.12	SP179	剥片鏟
188	打製石鏟	黒曜石	3.30	1.71	0.32	1.18	SX148	
189	打製石鏟	黒曜石	1.90	1.43	0.27	0.45	A11グリッド	先端欠損
190	打製石鏟	黒曜石	1.80	1.58	0.28	0.59	SX114	先端欠損
191	打製石鏟	黒曜石	1.66	1.45	0.28	0.52	SX188	先端欠損 バティナ古相を示す
192	打製石鏟	黒曜石	1.48	1.40	0.29	0.51	B8グリッド	
193	打製石鏟	古銅輝石安山岩	1.79	1.27	0.18	0.32	B7グリッド	
194	打製石鏟	古銅輝石安山岩	1.40	1.30	0.35	0.38	A11グリッド	両脚部欠損
195	打製石鏟	古銅輝石安山岩	1.63	1.40	0.20	0.35	B9グリッド	先端ガジリ有
196	打製石鏟	古銅輝石安山岩	1.92	1.54	0.34	0.68	SK149 上面	両脚部欠損



第31図 2区出土石器実測図④ (1/2)

第3表 2区出土石器属性表②

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土遺構・地点	備考
197	打製石鏟	古銅輝石安山岩	1.94	1.52	0.24	0.52	B16グリッド	
198	打製石鏟	古銅輝石安山岩	2.28	1.78	0.45	0.97	B18グリッド	
199	打製石鏟	古銅輝石安山岩	2.91	1.71	0.39	1.35	C6グリッド	
200	打製石鏟	安山岩	2.65	1.60	0.45	1.01	B14グリッド	左脚部欠損
201	打製石鏟	古銅輝石安山岩	2.10	1.20	0.35	0.99	C17グリッド	
202	打製石鏟	古銅輝石安山岩	2.70	1.35	0.35	1.18	B6グリッド	
203	打製石鏟	古銅輝石安山岩	2.70	1.85	0.35	1.96	A11グリッド	右脚部欠損
204	打製石鏟	古銅輝石安山岩	2.65	2.17	0.85	4.93	B6グリッド	
205	打製石鏟	古銅輝石安山岩	2.20	1.75	0.25	0.93	A11グリッド	基部欠損
206	打製石鏟	古銅輝石安山岩	1.62	1.60	0.33	0.78	C15グリッド	先端欠損
207	打製石鏟	古銅輝石安山岩	2.40	1.37	0.30	1.04	B12グリッド	先端欠損 基部ガジリ有
208	スクレイバー	安山岩	2.10	3.08	1.00	6.63	SC126床面ビット	
209	スクレイバー	古銅輝石安山岩	3.40	2.78	0.82	5.36	SK149	
210	石匙	古銅輝石安山岩	2.65	8.15	0.65	10.20	B4グリッド	
211	スクレイバー	古銅輝石安山岩	5.98	4.78	1.68	39.86	C2グリッド	ガジリ多い
212	スクレイバー	古銅輝石安山岩	4.05	5.90	1.65	34.80	B6グリッド	
213	磨製石斧	頁岩	14.40	5.85	4.20	521.67	B7グリッド	
214	磨製石斧	砂岩	10.80	5.85	4.05	379.84	B9グリッド	
215	磨製石斧	玄武岩	10.73	4.95	3.70	259.13	SC169	基部欠損
216	磨製石斧	玄武岩	5.10	5.35	1.20	36.76	2区	刃部付近のみ
217	磨製石斧	砂岩	5.50	5.20	2.25	72.63	A10グリッド	側縁のみ
218	磨製石斧	安山岩	8.95	5.73	2.15	177.83	C18グリッド	基部欠損
219	石錐?敲打具?	砂岩	4.10	12.95	1.95	156.68	SX177	
220	石錐?敲打具?	滑石片岩	3.60	12.10	1.10	64.41	東側検出	
221	石錐?敲打具?	不明	9.10	3.05	2.15	63.64	6~7グリッド	
222	敲打具	砂岩	9.22	2.10	1.50	45.48	A3グリッド	
223	敲打具	不明	6.80	3.15	1.85	51.22	B12グリッド	上半欠損
224	磨石?	不明	4.53	4.21	2.00	45.93	SP151	
225	石錐	不明	2.70	2.80	0.70	4.81	A8グリッド	右側欠損
226	台石	不明	14.60	9.35	2.20	443.29	A8グリッド	



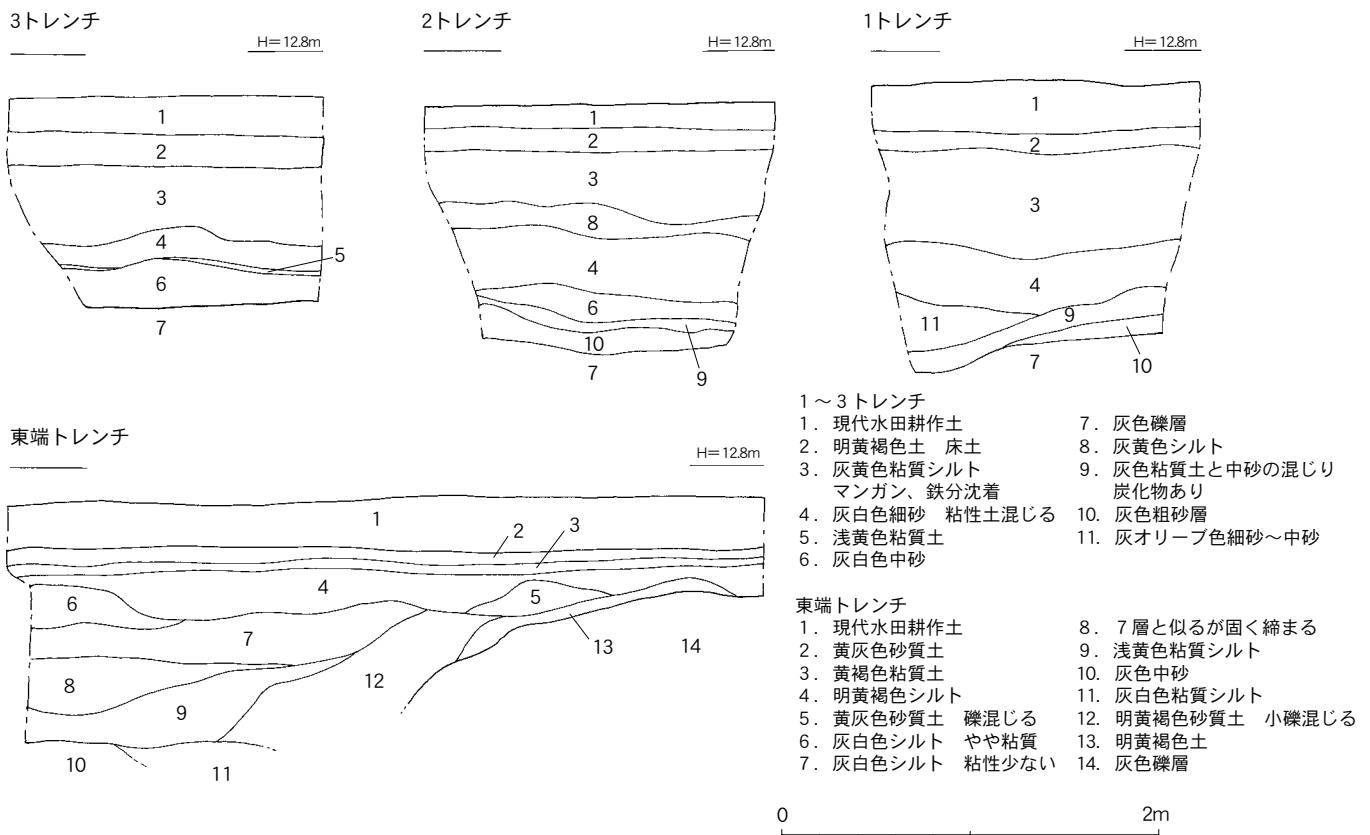
第32図 第3次調査3区全体図 (1/200)

4. 3区の調査

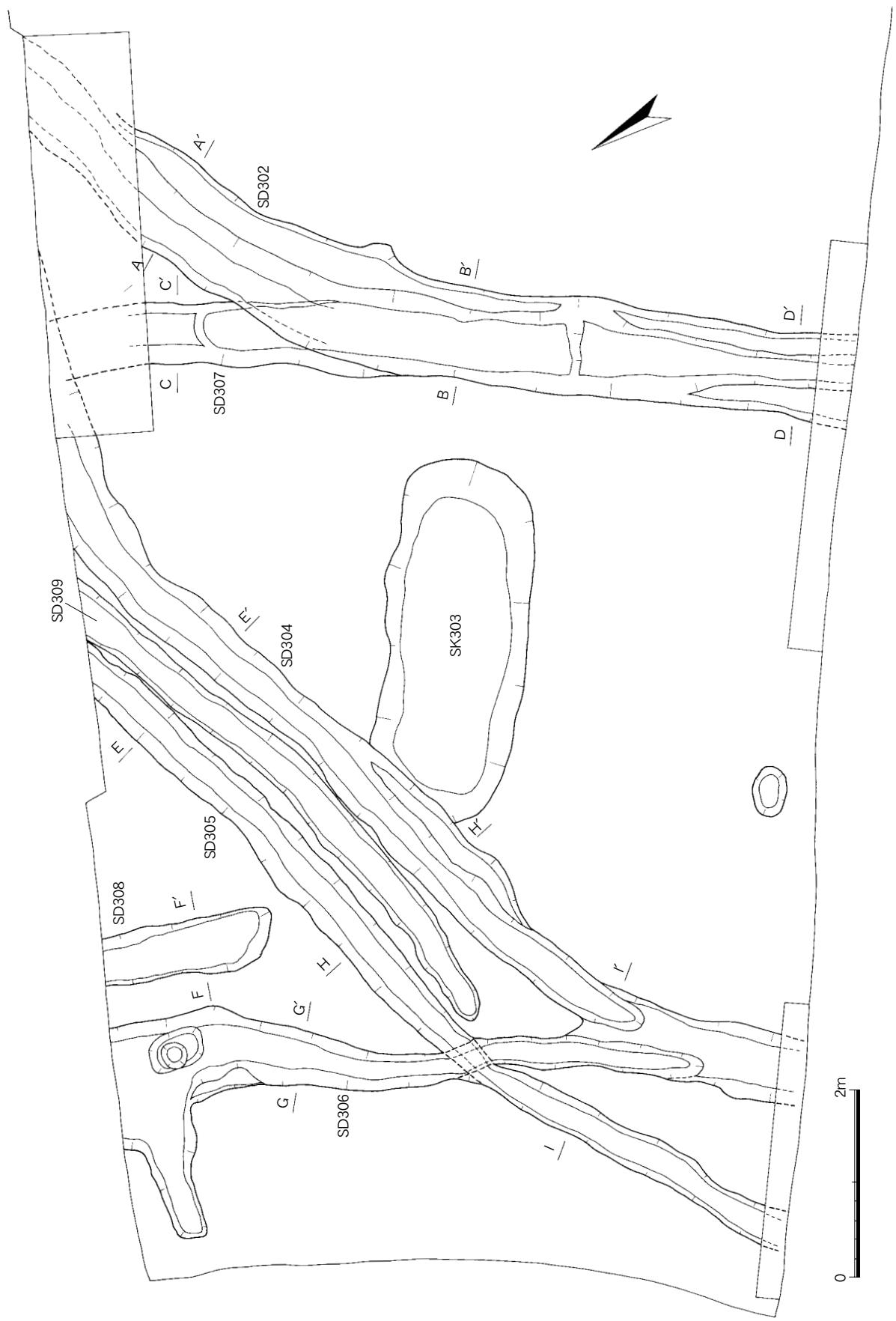
(1) 調査の概要

3区は2区の東50mの地点に位置する、長さ55m、幅3~11mの調査区である。調査前の現況は水田で、標高は12.6mであった。12月17日から表土剥ぎに着手し、廃土は場外に搬出した。1区と同様に土層の識別が困難で、当初は遺構の有無すら分からなかった。12月19日に再び表土剥ぎを行い、調査区西端から順に深掘りトレンチを設定して土層観察を行った。その結果調査区西半の1トレンチ・2トレンチ・3トレンチでは谷の堆積状況が確認され、東半では遺物が面的に広がる部分を確認した。西半の谷には遺構が存在しないと思われたことから調査対象から除外し、東半の遺物が広がる面を検出面として調査することにした。表土剥ぎ直後は地山と遺構埋土の違いが全く識別できなかつたが、数日経過すると変色し遺構検出が可能となった。結果的にGL-60cm付近の明黄褐色シルト(4層)が検出面となった。検出面の標高は約12.2mである。検出した遺構は溝7条と土坑2基、ピット等で、遺構密度は散漫であった。出土遺物は縄文土器から中世陶磁器まで見られるが、土坑は弥生時代前期、溝は弥生時代前期~中期頃の所産と思われる。

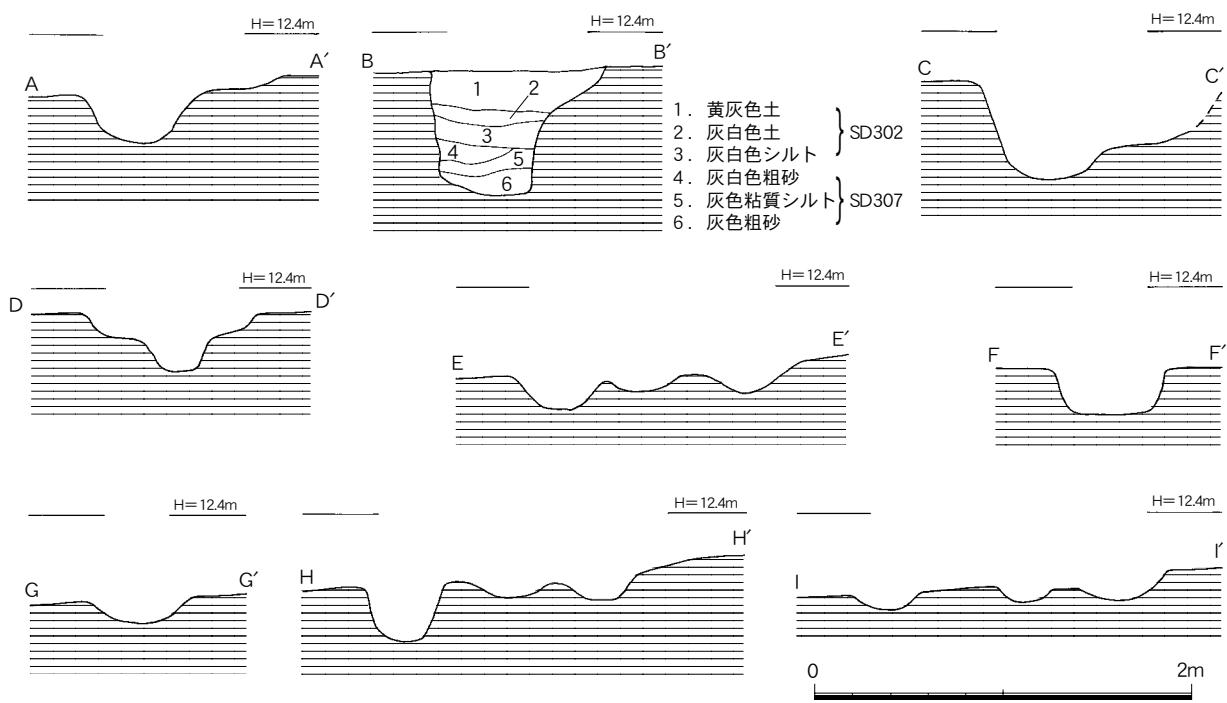
なお、西半の1トレンチ及び2トレンチでは礫層上面の9層から炭化物を採集したので、谷の埋没時期を推定する手掛かりとして放射性炭素年代測定を実施した。詳細は第5章に掲載しているが、分析の結果、1トレンチ試料は紀元前10世紀末~同9世紀後半、2トレンチ試料は紀元前8世紀中頃~同5世紀後半という値を得た。やや時期幅は見られるが、3トレンチの礫層付近からは弥生時代前期末~中期初頭頃の甕底部片も出土しており、概ね弥生時代前期~中期頃に谷の埋没が始まったものと考えられる。また、調査終了後に重機で南東端付近の深掘りを行い、礫層下面の確認を試みた。GL-240cm付近まで掘り下げたものの、礫層の堆積は厚く、湧水・崩落のため確認作業を断念した。



第33図 3区南壁土層図 (1/40)



第34図 3区西半平面図 (1/60)



第35図 SD断面図 (1/40)

(2) 遺構と遺物

①溝 (SD)

SD302 (第34図、第35図、図版7-4、7-5)

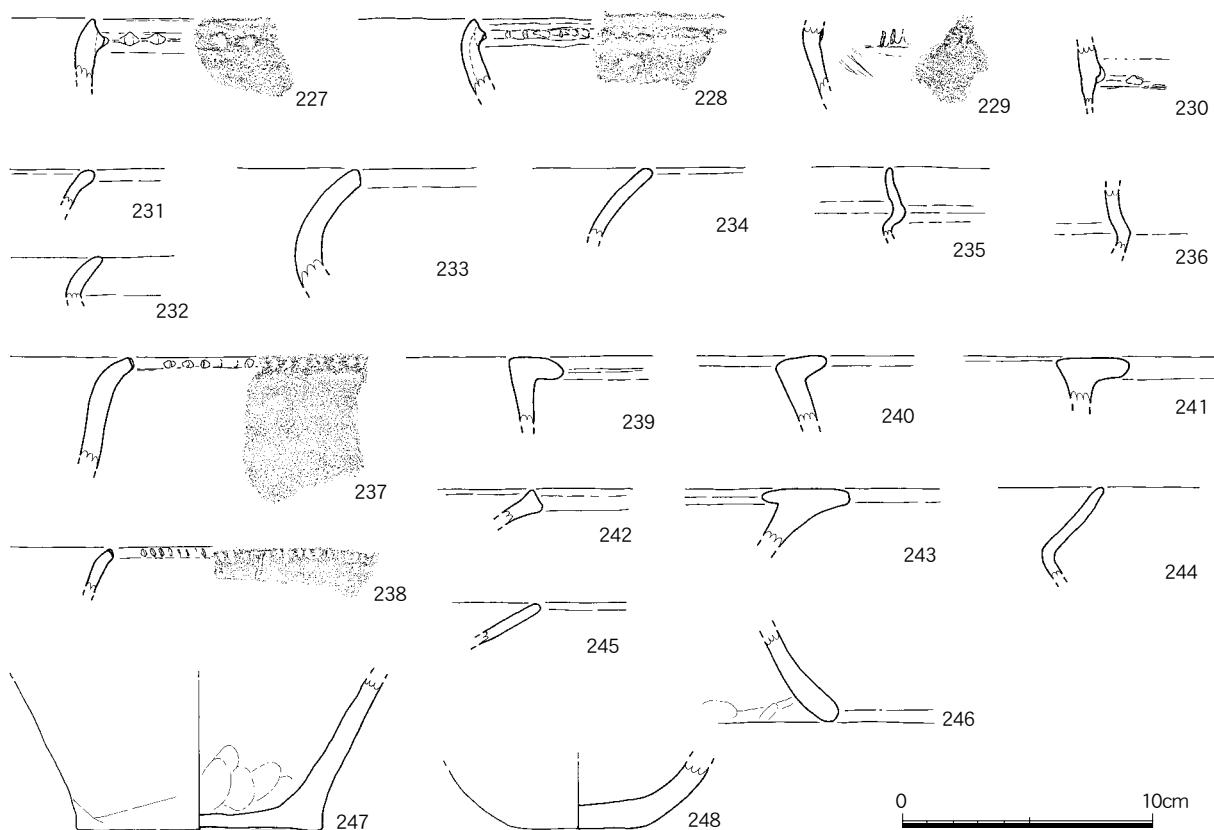
調査対象とした範囲の中央付近をカーブしながら横切る溝で、SD307を切ると思われる。幅は1.0m、深さは30cm前後である。検出した段階ではSD307は把握できず、中央付近に設定したトレーンチ土層(B-B')より、深さ70cmの溝と誤認していた。土層はSD302と307が丁度重なる部分で、1層～3層はSD302、4層～6層はSD307にあたると考えている。SD302の埋土は黄灰色～灰白色シルトである。底面の高さは南壁際で12.0m、北壁際で11.9mと、南から北にわずかに傾斜している。断面形は様々で、幅広のU字形や逆台形、段を有する部分もある。遺物はコンテナケース1箱分出土した。主体を占めるのは弥生時代前期～中期の遺物であるが、弥生後期以降と思われる土器片がわずかに混じっており、時期が下るのか混入か、現時点では判断がつかない。

出土遺物 (第36図)

227～230は刻目突帯文土器である。227は砲弾甕の口縁部と思われ、ヘラによる小さめの刻目を施す。228～230は屈曲甕の口縁部～屈曲部片である。231～234は甕口縁である。235は縄文時代後・晩期の浅鉢とも考えたが、胎土より弥生時代後期頃の瀬戸内系土器と判断した。口縁外面にはゆるい凹線が見られる。237・238は板付式甕の口縁部である。如意形の口縁であるが、外反度合いは弱い。口縁端部全面に刻目を施している。239～242は弥生時代中期の甕口縁部片、243は鋤先口縁の甕である。244は小片で摩滅が著しいため不明確だが、235と胎土はよく似ており、同様のものであろうか。天地が逆の可能性もある。245は甕口縁としたが、蓋の裾部の可能性もある。246は器台裾部、247は弥生時代中期の甕底部、248は小型の甕底部である。摩滅のため調整不明瞭である。

SD304 (第34図、第35図、図版7-4)

SD302の西側に位置する溝で、幅0.5～0.7m、深さ15～20cmの浅い溝である。SK303を切



第36図 SD302出土遺物実測図 (1/3)

る。SD305・309とともに3条並走するが、同時期のものなのか先後関係があるのかは不明である。いずれの溝も浅く切り合いが確認できなかつたうえに、出土遺物も少量で明らかにできなかつた。南壁付近ではSD306と交差するが、境界が不明瞭となり、前後関係は分からぬ。断面はゆるいU字形で、埋土は褐灰色シルトである。出土遺物は少ないが、弥生時代前期～中期の遺物が出土している。

出土遺物（第37図）

249は弥生時代中期の甕で、逆L字形の口縁部片である。250も甕口縁部片である。251は甕底部で、わずかに上げ底になっている。外面には縦方向のハケメが残る。

SD305（第34図、第35図、図版7-4）

上述のSD304と並走する溝である。幅0.3～0.5m、深さ20cmで、断面はゆるいU字形である。埋土はSD304と同様の褐灰色シルト。SD306と交差するが、切り合い関係は把握できなかつた。出土遺物は少ないが、縄文時代晩期～弥生時代中期の土器が出土している。

出土遺物（第37図）

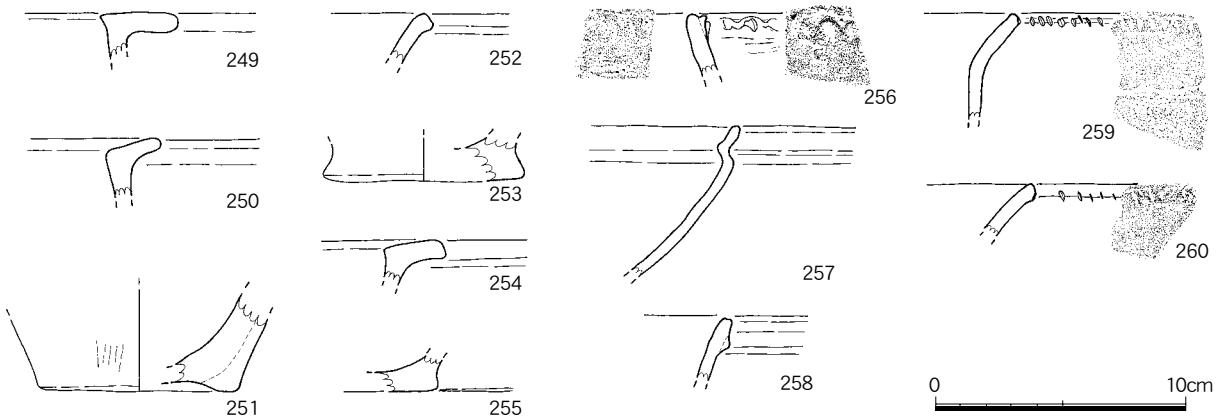
252は夜臼式土器の壺口縁か。小片のうえに器壁の剥落が著しい。

SD306（第34図、第35図、図版7-4）

調査対象とした範囲の西端付近で検出した、幅0.3～1.0m、深さ15cm程度の溝状遺構である。上述のようにSD305との切り合いは不明である。出土遺物は少ないが、縄文時代晩期～弥生時代中期の土器が出土している。

出土遺物（第37図）

253は夜臼式土器の底部で、3mm程度の砂粒を多量に含む。復元底径8.0cm、残存器高1.7cm。



第37図 SD304・305・306・307・308出土遺物実測図（1/3）

SD307（第34図、第35図、図版7-4、7-6）

SD302に切られる直線的な溝である。土層ポイントB-B'の南側1mの立ち上がりまでがSD307と考えている。SD302に切られるため正確な幅は不明だが、狭いところで1.0m、それ以外のところでは1.2m以上で、深さ60～70cmを測る。底面の標高は11.6m前後である。溝の断面系は底面が平坦なU字形である。上層には灰色シルト、下層には粗砂が堆積していた。出土遺物は少ないが、縄文時代晩期土器、刻目突帯文土器、弥生時代前期～中期土器が出土している。

出土遺物（第37図）

254は弥生時代中期の甕口縁で、断面逆L字形を呈す。255は弥生前期壺の底部か。256は刻目突帯文土器の甕口縁である。屈曲甕としたが、小片のため傾きは心許ない。砲弾甕の可能性もある。

SD308（第34図、第35図、図版7-4）

SD306の東側で検出した、長さ1.8m以上、幅0.6mの溝状遺構である。深さは20cm前後で、断面形は箱形を呈す。土坑の可能性もある。出土遺物は少ないが、縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が出土している。弥生時代中期の土器は含まれていないが、周囲の溝より古いものかは確証がない。

出土遺物（第37図）

257は縄文時代晩期の浅鉢で、口縁下部で小さく屈曲している。器壁が剥落し、調整不明である。258は刻目突帯文土器の甕口縁である。小片のため不確かだが、断面三角の突帯には刻目が施されていないように見える。259・260は板付式土器の甕口縁である。259は口縁端部のほぼ全面に刻目を施すが、260の刻目は口縁端部下端にのみ施されている。内外面の調整はともに摩滅のため不明瞭である。

SD309（第34図、第35図、図版7-4）

SD304・305に挟まれた浅い溝状遺構である。幅0.4m、深さ15cm前後で、残りは悪い。出土遺物が非常に少ないので時期は確定できないが、周囲の溝と近い時期と考えている。

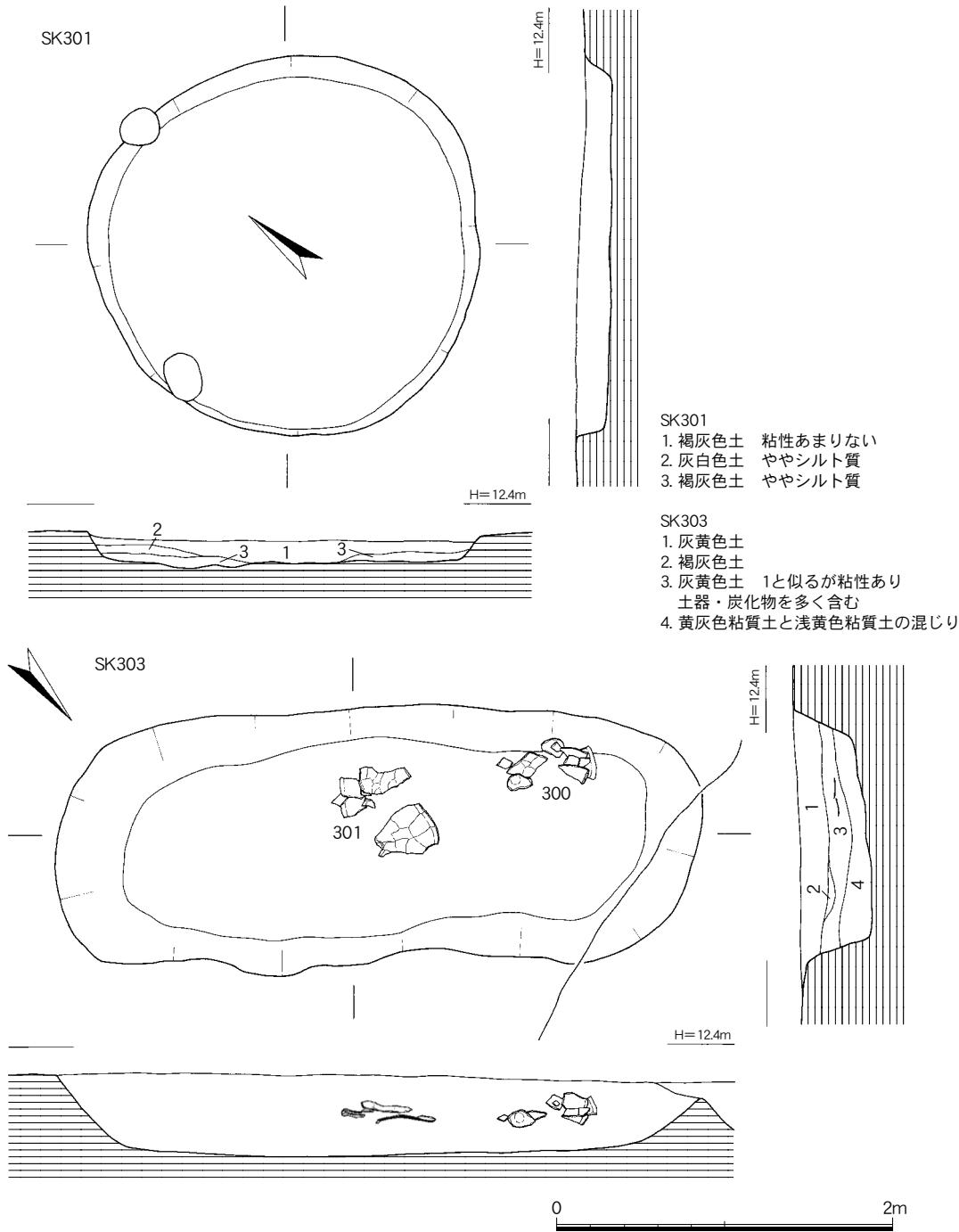
②土坑（SK）

SK301（第38図、図版8-1）

3区東側で検出した、直径2.3mの円形土坑である。埋土は褐灰色～灰白色土。深さ20cm前後で、遺存状況は良くない。縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が出土したが、いずれも小片で量もない。

出土遺物（第39図）

261は縄文時代晩期の浅鉢口縁で、外面の口縁直下には凹線が見られる。262は刻目突帯文土器の砲弾甕口縁である。突帯は口縁よりやや下がった位置にあり、指頭により刻目を施す。263は縄文時代後期の波状口縁の鉢であろうか。口縁部を肥厚させている。264・265は夜臼式の壺口縁、

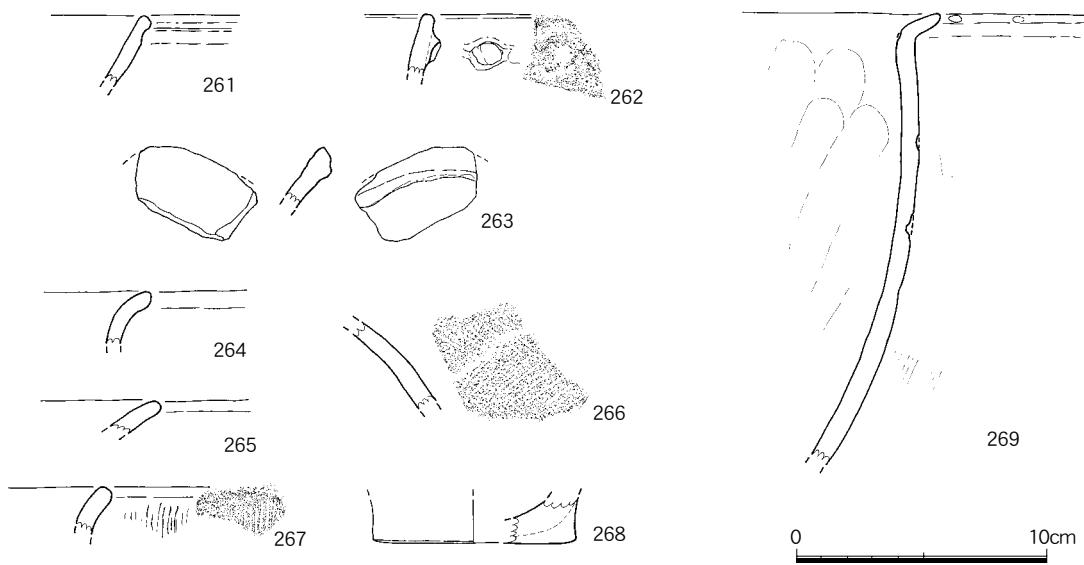


第38図 SK301・303 実測図 (1/40)

266は弥生時代前期の壺肩部で、沈線による無軸羽状文が施されている。267・269は弥生時代前期の甕であるが、摩滅のため口縁部の刻目は不明である。267は外面に縦方向のハケメがわずかに残っている。269は如意形の口縁で、端部の外反はやや強い。内面には指頭によるナデの痕跡が残る。268は甕底部である。約1/4の残存で、復元底径8.0cm、残存器高1.9cmを測る。

SK303 (第38図、図版8-2、8-3、8-4)

長軸3.8m、短軸1.5mの長方形気味の土坑で、SD304に切られる。深さは50cm前後で、埋土は上・中・下に分層した。いずれの層からも縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物が出土したが、中層からは弥生時代前期の甕がまとまった状態で出土し、土器片の下には炭化物が残っていた。放射性炭素年代

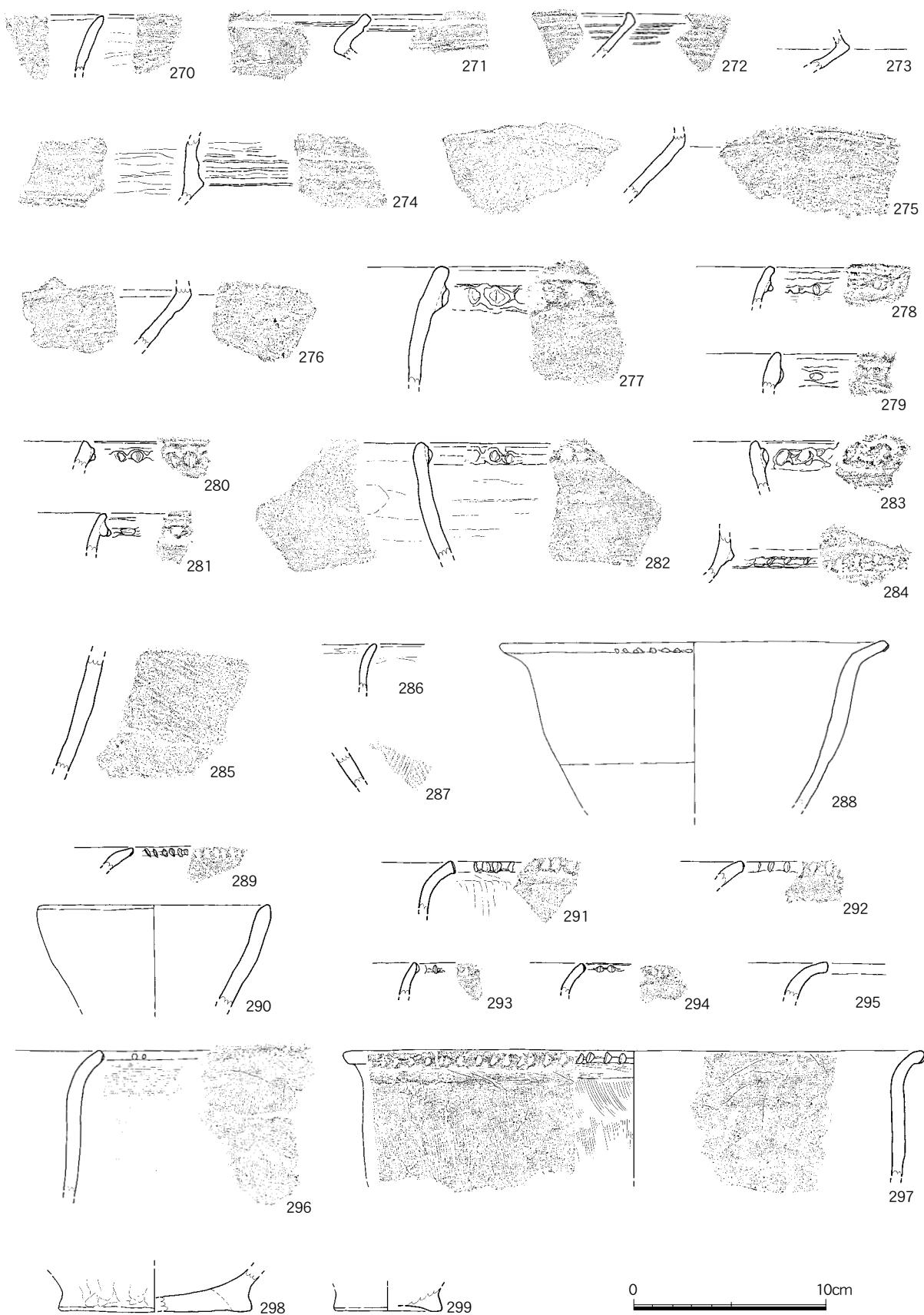


第39図 SK301出土遺物実測図 (1/3)

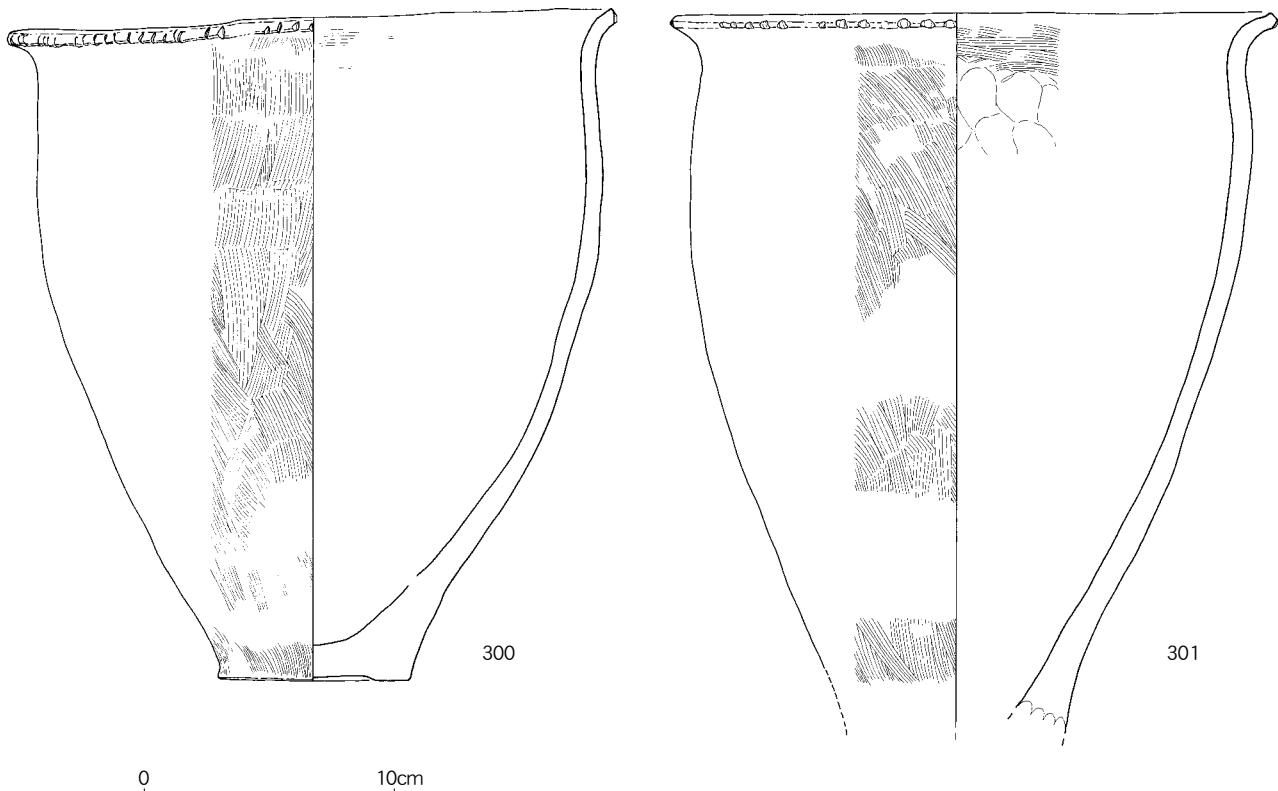
測定を実施した結果、紀元前8世紀前半～同6世紀後半の値を得た。概ね西側の土器群が300の甕、東側のものが301の甕に復元できたが、相互に接合する破片も多く、完全に分かれているわけではない。出土遺物はコンテナケース3箱分である。

出土遺物（第40図、第41図）

270～276は縄文晚期の土器である。270は粗製の深鉢口縁部で、外面には器面の粗い調整が残る。271は浅鉢口縁部で、口縁下部に沈線が巡る。272は鉢口縁部で口縁端部を摘まみ上げている。内外面に横方向の条痕が残る。273～276は浅鉢の屈曲部である。274は外面屈曲部の上にも段を有し、内外面ともに横方向のヘラミガキを施している。一部に赤い彩色が残る。277～281は刻目突帯文土器の砲弾甕口縁である。いずれも口縁から下がった位置に突帯があり、刻目は指、ヘラにより施されている。282～284は刻目突帯文土器の屈曲甕である。282は棒状工具による刻目で、内外面には板ナデの痕跡が残る。283の突帯は口縁から下がった位置にあり、刻目は指によるものである。284は屈曲部片で、屈曲部より下には貝殻条痕が残る。285は甕胴部で、外面には横・斜め方向の条痕が残る。286は夜臼式の壺口縁で、内外面にミガキを施す。287は壺胴部片で沈線による山形文を施している。288は如意形口縁をもつ鉢あるいは甕で、口縁端部下端に刻目を施す。胴部には段を有する。289も鉢の口縁と思われる。すぼまった口縁端部に刻目を施す。290は小型の鉢であろうか。291～297は板付式の甕口縁である。291・292は口縁端部全面に、293・294・296・297は口縁端部下端に刻目を施す。295は摩滅のため刻目が確認できない。297は口径を30.0cmに復元しているが、土器の歪みもあり、復元径に不安が残る。外面は縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメ・ナデを施す。298は甕底部で復元底径10.0cmである。外面には指頭の痕跡が残る。299は小型の甕底部である。300は板付II式土器の甕である。口径24.0cm、最大器高26.4cmで、ほぼ完形に復元できた。刻目は口縁端部下端に施され、外面には縦方向のハケメが密に見られる。胴部上半に最大径があり、胴下半はやや膨らみ気味のプロポーションである。301も板付II式土器の甕である。口径23.9cm、残存器高29.5cmを測る。底部を一部欠くものの、それ以外はほぼ完形で、300に比べて細身である。外面には縦・斜め方向のハケメが施される。口縁部内面は横方向のハケ調整で、その下部には指頭痕が残る。301の破片の下から炭化物が出土し、上述の年代値を得た。



第40図 SK303出土遺物実測図① (1/3)



第41図 SK303出土遺物実測図② (1/3)

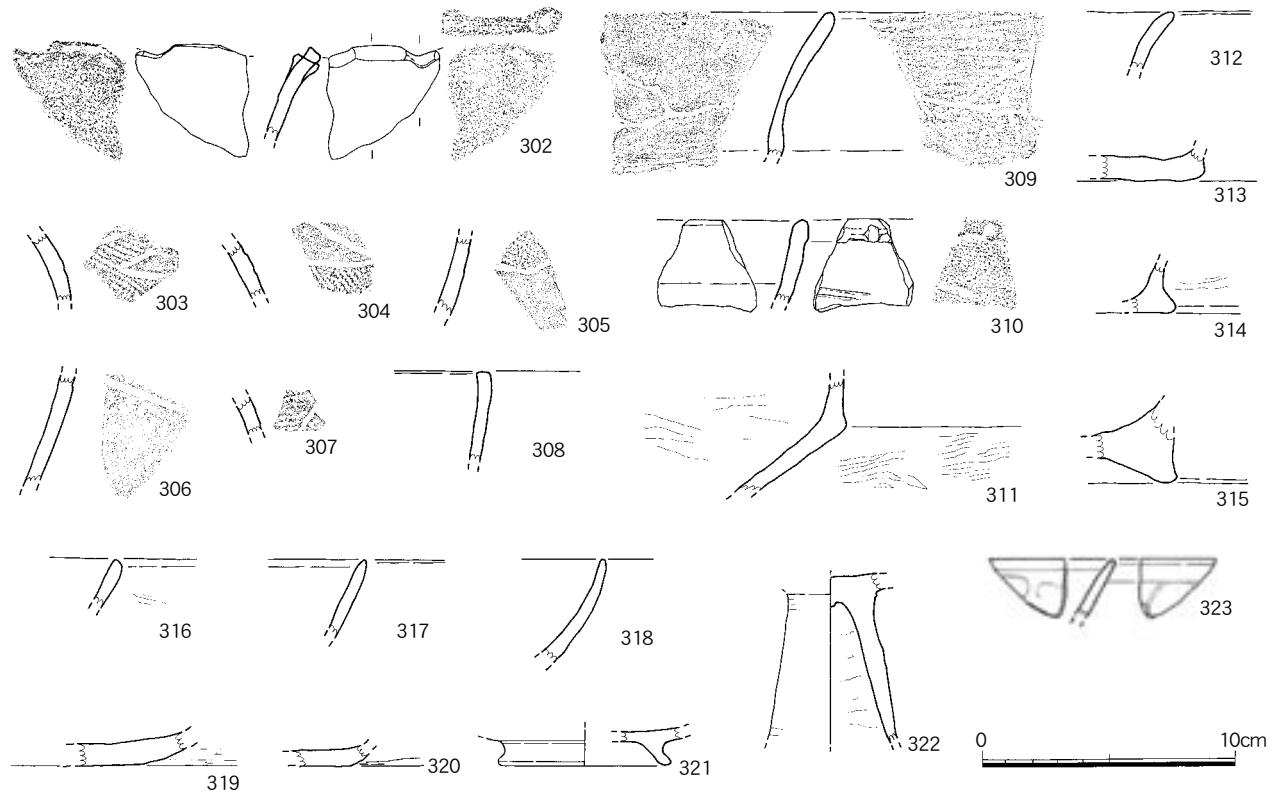
③その他の出土遺物 (第42図)

302～309は縄文土器である。302は鉢で、口縁上面に指頭による凹点を施す。303～307は磨消縄文土器、308・309は粗製深鉢である。310は刻目突帯文土器の甕口縁、311は浅鉢の屈曲部である。311は内外面にヘラミガキを施す。312は夜臼式の壺口縁、313は縄文土器底部、314は弥生前期土器の底部である。315は弥生時代中期初頭頃の甕底部で、上げ底状になっている。3トレンチの礫層上面付近から出土した。316～318は鉢、319は須恵器坏、321は黒色土器高台部である。322は土師器高杯の脚部、323は龍泉窯系の青磁碗である。

④石器 (第43図、第44図)

第43図はSK303からの出土石器である。324は平基式の黒曜石製打製石鏃である。表裏とも丁寧な押圧剥離を施す。325～327は安山岩製の打製石鏃である。325・326は風化が著しく鋭利さはない。327は表裏とも比較的丁寧な押圧剥離を施す。328は安山岩製の打製石鏃未製品であろうか。329は安山岩製の削器か。縁辺に素材裏から二次加工が加えられている。剥片鏃素材の可能性もある。330も安山岩製の削器で、下縁に刃部を作り出している。331～333は黒曜石製の使用痕剥片で、両方あるいは片方の側縁を使用している。334は安山岩製の剥片で、下縁から左側縁にかけて微細剥離が見られる。335～339は黒曜石製の石核である。336は自然面、パティナが古相の面、漆黒色の剥離面の3種が見られる。338は自然面を打面としている。340は凝灰岩製の砥石である。表裏両面を砥面としている。表面には浅い凹部が見られる。

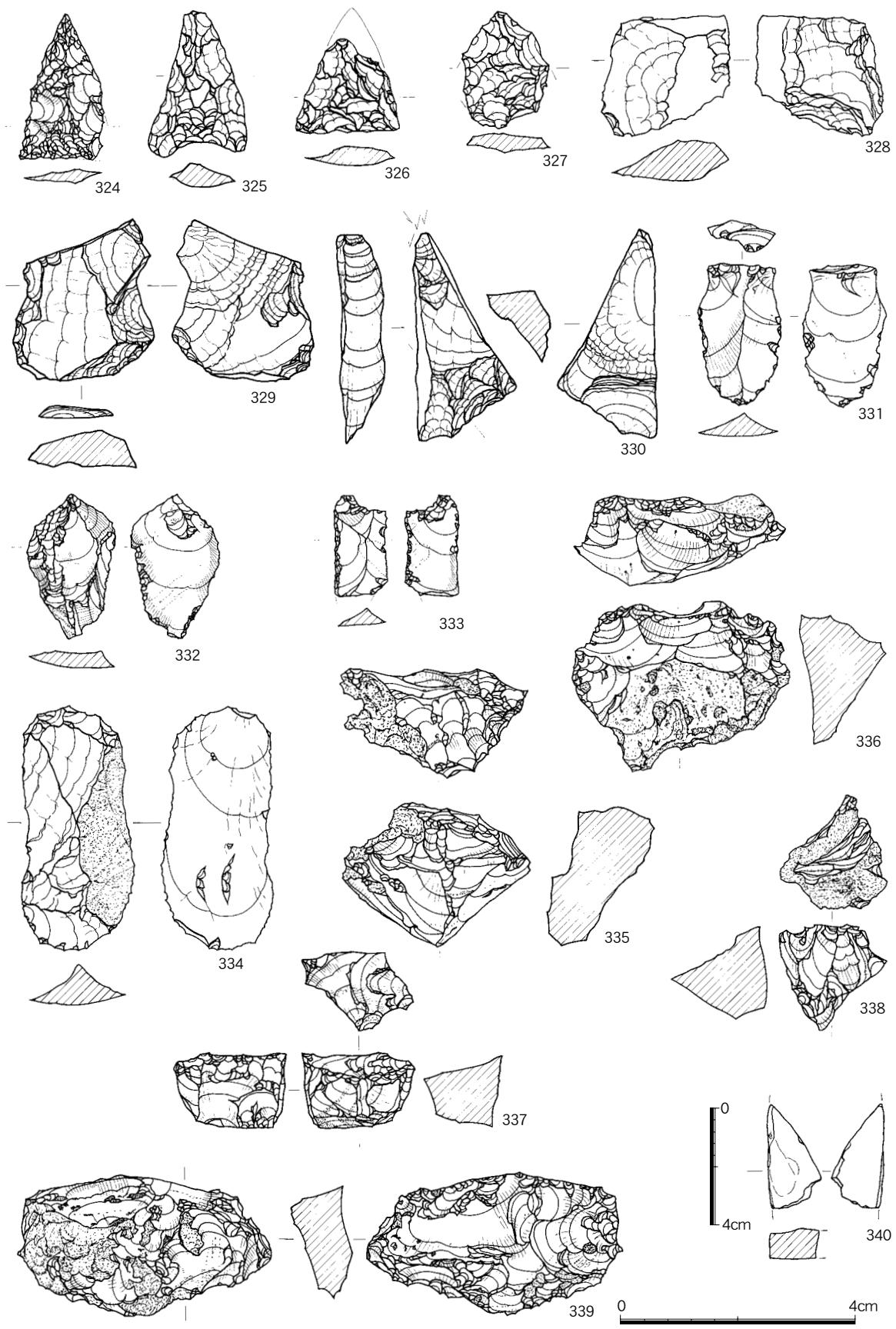
第44図は溝出土、検出時などの石器である。341～345は黒曜石製打製石鏃である。341は基部凹基で、両面に丁寧な剥離を施す。342は平基式、343は凹基気味の平基式である。345は剥片鏃で、表・裏ともに縁辺部にのみ押圧剥離を施している。裏面には自然面が残る。346は黒曜石製の石鏃未製品か。上面には細かい剥離があり、打面調整が認められる。347は安山岩製の打製石鏃



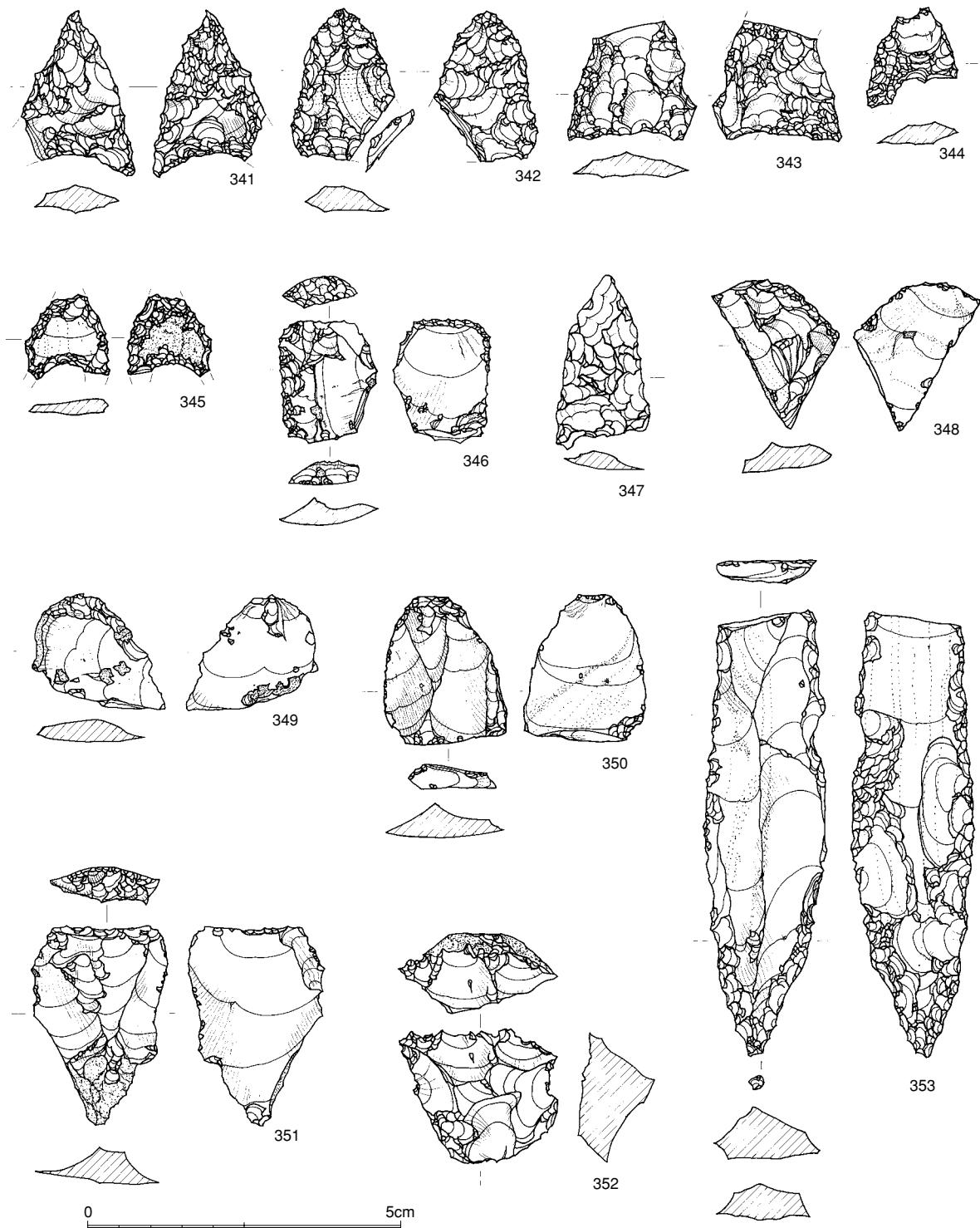
第42図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

第4表 3区出土石器属性表

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量(g)	出土遺構・地点	備 考
324	打製石鏃	黒曜石	2.50	1.48	0.28	0.92	SK303	
325	打製石鏃	古銅輝石安山岩	2.53	1.72	0.42	1.47	SK303 1層	
326	打製石鏃	古銅輝石安山岩	1.60	1.80	0.33	0.88	SK303	先端欠損
327	打製石鏃	ハリ質安山岩	2.01	1.51	0.32	1.04	SK303 2層東半	両脚部欠損
328	打製石鏃未製品?	古銅輝石安山岩	2.10	2.25	0.85	3.40	SK303 1層	
329	削器	古銅輝石安山岩	2.80	2.45	0.60	4.35	SK303 1層東半	
330	削器	古銅輝石安山岩	3.55	1.75	0.75	4.33	SK303 1層東半	
331	使用痕剥片	黒曜石	2.45	1.46	0.51	1.30	SK303	
332	使用痕剥片	黒曜石	2.50	1.54	0.25	0.85	SK303 西半	
333	使用痕剥片	黒曜石	1.73	0.92	0.28	0.43	SK303 1層西半	下半欠損
334	使用痕剥片	古銅輝石安山岩	4.23	1.97	0.70	5.44	SK303 1層西半	
335	石核	黒曜石	2.50	3.22	1.40	10.33	SK303 2層西半	白色不純物多い
336	石核	黒曜石	2.92	3.73	1.50	13.21	SK303 1層	
337	石核	黒曜石	1.28	1.93	1.30	3.30	SK303 2層東半	
338	石核	黒曜石	1.80	1.83	1.65	3.47	SK303	
339	石核	黒曜石	2.43	4.38	1.25	4.97	SK303 2層	白色不純物多い
340	砥石	凝灰岩	3.61	1.80	1.00	9.03	SK303 1層	
341	打製石鏃	黒曜石	2.63	1.79	0.45	1.50	SD302 上層	左脚部欠損
342	打製石鏃	黒曜石	2.40	1.68	0.42	1.61	3区検出時	右脚部欠損
343	打製石鏃	黒曜石	1.90	2.06	0.39	1.58	SD305	先端及び右脚部欠損
344	打製石鏃	黒曜石	1.60	1.48	0.38	0.61	SD304	先端及び両脚部欠損
345	打製石鏃	黒曜石	1.35	1.38	0.27	0.51	3区	先端及び両脚部欠損
346	打製石鏃未製品?	黒曜石	2.04	1.55	0.46	1.57	3区	白色不純物混じる
347	打製石鏃	古銅輝石安山岩	2.78	1.52	0.35	1.12	SD302 上層	両脚部欠損
348	削器	黒曜石	2.40	2.05	0.55	1.76	SD302・307トレンチ	
349	使用痕剥片	黒曜石	1.88	2.12	0.43	1.50	SD302 北半	白色不純物多い
350	使用痕剥片	黒曜石	2.32	1.92	0.55	2.44	SD307 最下層	
351	使用痕剥片	黒曜石	3.17	2.17	0.74	4.22	南東トレンチ	
352	石核	黒曜石	2.03	2.52	1.15	12.03	3区探集	
353	尖頭器?	黒曜石	7.13	2.00	0.76	10.25	SD307 最下層	

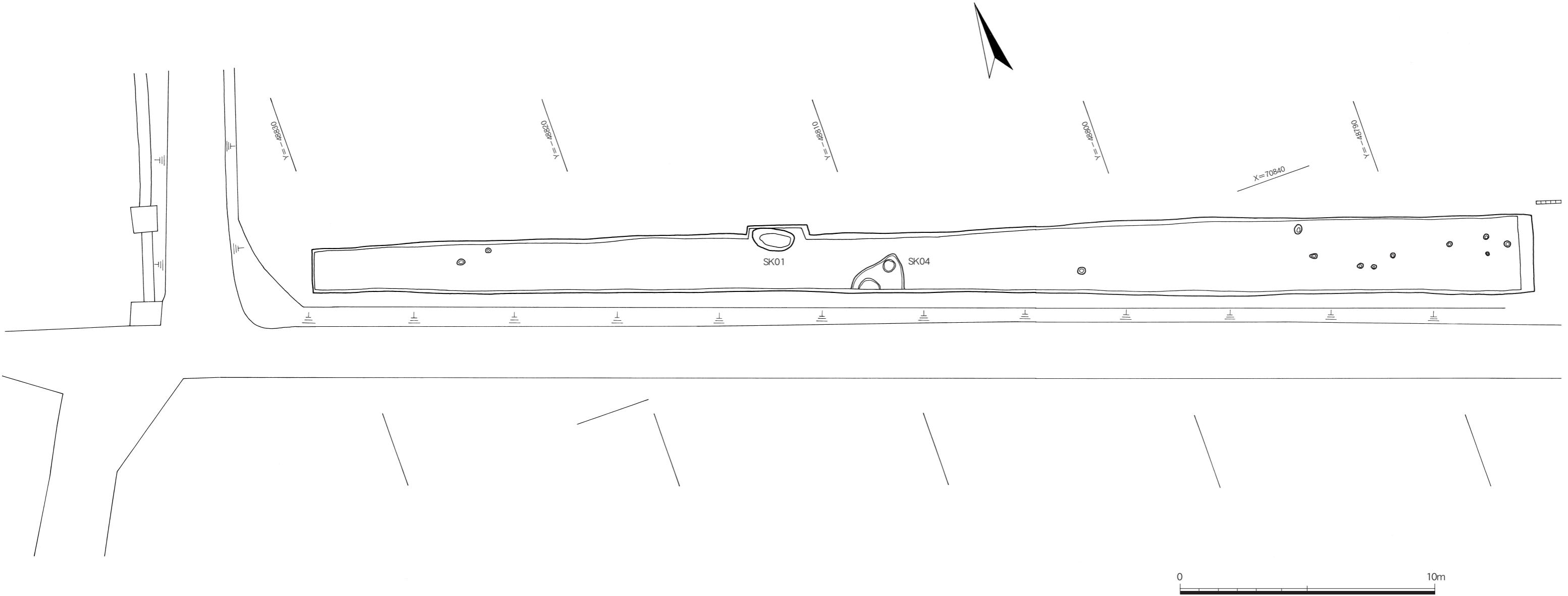


第43図 SK303出土石器実測図 (1/1, 1/2)



第44図 その他の出土石器実測図 (1/1)

であるが、風化が著しい。348は黒曜石製削器で、正面右上に刃部を作り出している。349～351は黒曜石製の使用痕剥片である。350は縦長剥片の上半部で、下半を欠失している。左側縁に微細剥離が見られる。351は剥片の打点付近に細かな剥離を施す。側縁には微細剥離が見られる。352は黒曜石製石核である。一面には表皮を残し、残り三面から剥片を剥ぎ取っている。353は黒曜石製の尖頭器か。主要剥離面の打点は折断により失われている。縦長剥片の両側縁に二次加工を施し、先端を尖らせている。前面には大きく2つの剥離が見られるが、剥離方向がそれぞれ異なる。



第45図 第4次調査区全体図 (1/150)

第4章 第4次調査の記録

1. 調査の概要

本地点は第3次調査1区と2区の間に位置する。第3次調査期間中の12月19日に確認調査を実施し、遺構を確認したため次年度に調査を実施することになった。第3次調査と同じく道路拡幅工事に伴う調査のため、幅およそ3m、長さ約40mという狭長な調査区となった。調査期間は2008年4月7～21日である。4月7日に器材搬入と重機による表土剥ぎを行い、11日から人力掘削に着手した。遺存状況が不良であったため15日には遺構掘削が終了し、全景写真撮影・遺構実測を行った。17日から埋め戻しを開始し、18日には器材の搬出を行った。21日に埋め戻しが完了し、調査を完全に終了した。

第46図は調査区北壁土層図である。調査前の現況は水田で、標高はおよそ13.0mである。まず現代水田耕作土及び床土を除去し、灰色粘質シルトと黄褐色土が混じった土（2層）の下で検出した黄褐色粘質土（3層）を検出面とした。SK01・04周辺には部分的にシルト質土が残っていたが、検出面の大半は赤みがかった黄褐色粘質土であった。この黄褐色粘質土は、西隣の第3次調査1区の表土剥ぎで、遺構面を把握できず掘り過ぎた際に検出した土と同様のものと思われることから、本地点は全体的に削平されている印象を受けた。遺構面の標高は東端で12.5m、西端では12.3mで、東から西に向かって緩やかに傾斜している。検出した遺構は土坑2基とピット少量のみで、東側の第3次調査2区で検出した縄文土器包含層も確認されなかった。

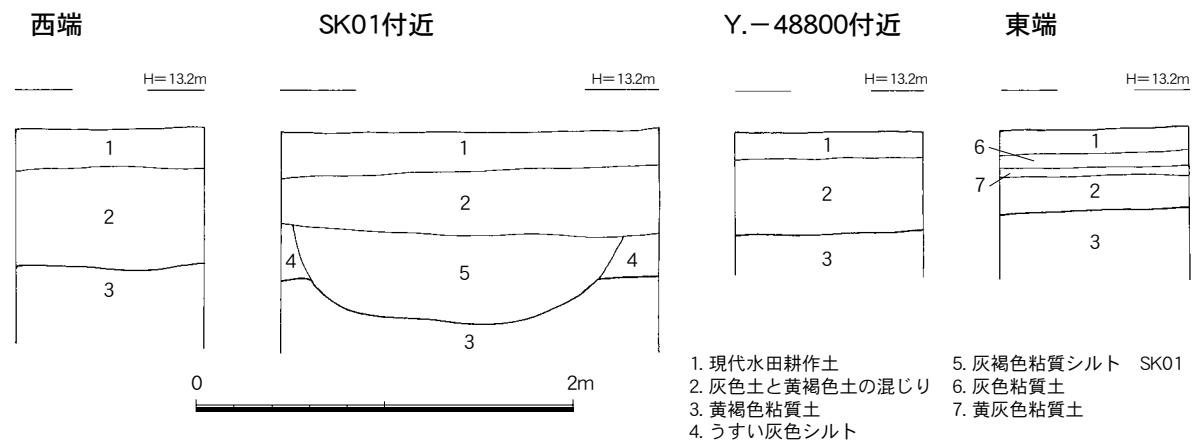
出土遺物は僅少で、ポリ袋4袋分のみであった。ほとんどが小片であるが、胎土から縄文土器が主体を占めると思われる。その他に黒曜石剥片が1点出土した。また、確認調査の際には須恵器甕の小片も出土している。

2. 遺構と遺物

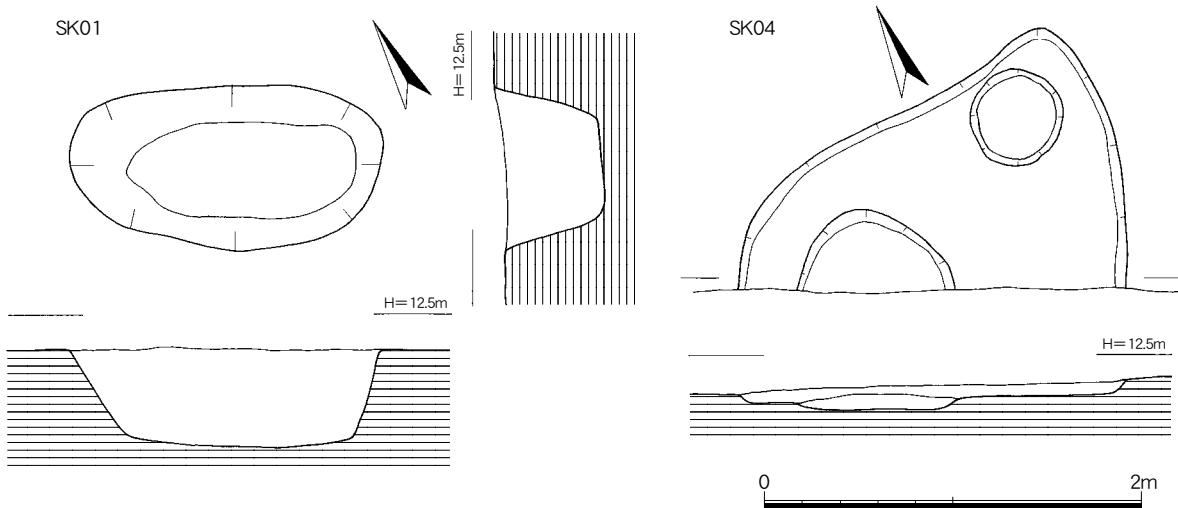
①土坑（SK）

SK01（第47図、図版8-6）

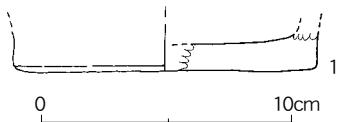
調査区中央やや西寄りの北壁際で検出した土坑である。当初は調査区外に広がっていたため、拡張して完掘した。長軸1.65m、短軸0.85mの楕円形土坑で、深さは50cmを測る。埋土は一様な灰褐色粘質シルトで、分層は困難であった。出土遺物はポリ袋1袋分である。いずれも検出面付近からの出土で、下層からは出土していない。遺物が少量のため時期決定が困難であるが、第3次調査



第46図 調査区北壁土層図（1/40）



第47図 SK01・04 実測図 (1/40)



第48図 SK01 出土遺物実測図 (1/3)

の成果より、縄文時代後期頃の土坑と考えておきたい。

出土遺物 (第48図)

1は深鉢の底部である。約1/5の残存で、復元底径12.0cm、残存器高1.6cmを測る。胎土は比較的緻密で、1mm程度の石英粒が混じる。

SK04 (第47図)

調査区中央付近の南壁沿いで検出した、不整形の浅い窪みである。調査区外に広がるため平面形は不明である。東西長2.1m、現存南北長1.4m、深さ5～10cmを測る。埋土はSK01と同様の灰褐色粘質シルトであった。掘り込みがはつきりせず、自然の窪みの可能性が高い。縄文土器と思われる小片が少量出土したのみである。

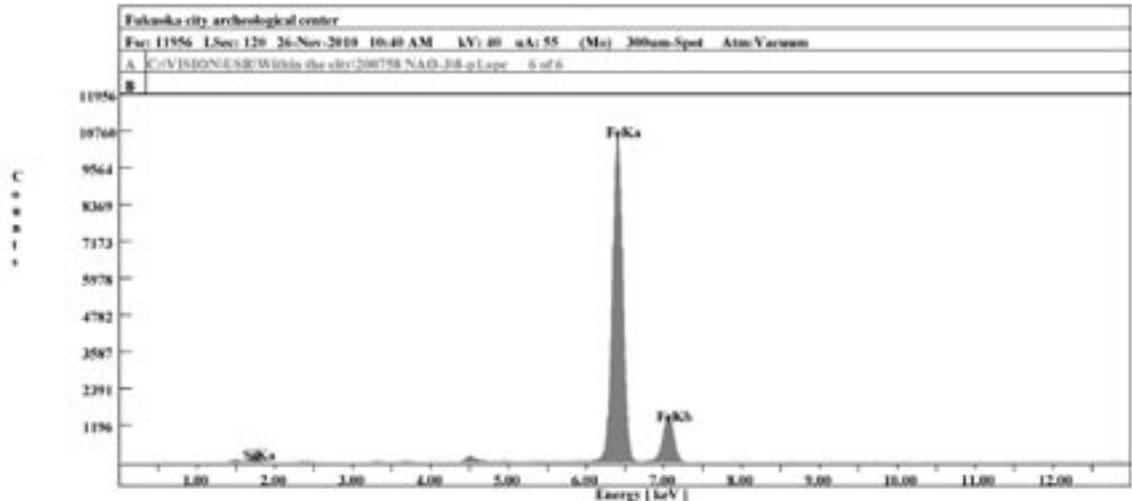
第5章 自然科学分析

1. 第3次調査1区 SK03 出土の赤色塊状物質について

福岡市埋蔵文化財センター 田上勇一郎

名子遺跡第3次調査で検出した土坑SK03の覆土中に見られた赤色塊状物質について蛍光X線分析を行った。資料は5層付近東壁際と9層下層で出土したもので、覆土ごとブロックで採集された。2mm～1cmほどの混じりのない暗赤色部分と、覆土と混じって1～2cmほどの広がりがある淡い赤色になった部分がある。

暗赤色部分について蛍光X線分析を行ったところ、強い鉄(Fe)のピークがあらわれた。他には土壤由来と思われるケイ素(Si)のピークが若干認められたのみである。水銀(Hg)のピークが見られないため、この赤色塊状物質は水銀朱ではなく酸化第二鉄が主成分のベンガラであり、純度の高いベンガラがそのまま埋没したと考えられる。



第49図 蛍光X線スペクトル

2. 第3次調査に伴う放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

(1) はじめに

東区名子に位置する名子遺跡の第3次調査により検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第5表のとおりである。試料はいずれも炭化材で、PLD-15089は2区の縄文時代後期の貯蔵穴SK149より採取した炭化材である。PLD-15090は3区の弥生時代前期の土坑SK303より採取した炭化材である。PLD-15091は3区1トレンチを深掘りした際、礫層上面の灰色土より採取した炭化材である。PLD-15092は3区2トレンチを深掘りした際、礫層上面の灰色土より採取した炭化材である。

第5表 年代測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-15089	調査区：2区 遺構：SK149 その他：貯蔵穴	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry カビ有	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N)
PLD-15090	調査区：3区 遺構：SK303 その他：土坑	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry カビ有	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N)
PLD-15091	調査区：3区1トレンチ 層位：礫層上面灰色土 その他：トレンチ深掘り時	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N)
PLD-15092	調査区：3区2トレンチ 層位：礫層上面灰色土 その他：トレンチ深掘り時	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N)

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第6表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行つて暦年較正に用いた年代値、慣用に従つて年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第50図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:Intcal09)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第6表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-15089	-24.25±0.12	3848±22	3850±20	2398BC(6.6%)2384BC 2347BC(47.9%)2281BC 2250BC(10.5%)2231BC 2219BC(3.1%)2212BC	2458BC(9.5%)2418BC 2408BC(11.6%)2374BC 2368BC(53.4%)2271BC 2259BC(20.9%)2207BC
PLD-15090	-27.61±0.11	2480±20	2480±20	753BC(13.0%)727BC 693BC(33%)686BC 668BC(24.6%)611BC 597BC(27.3%)542BC	766BC(95.4%)514BC
PLD-15091	-26.09±0.16	2707±20	2705±20	895BC(28.3%)870BC 851BC(39.9%)820BC	901BC(95.4%)813BC
PLD-15092	-25.85±0.15	2449±20	2450±20	736BC(23.7%)690BC 663BC(63%)649BC 547BC(22.0%)501BC 496BC(31%)486BC 462BC(42%)450BC 441BC(8.9%)417BC	750BC(28.0%)687BC 667BC(8.8%)641BC 594BC(58.6%)411BC

(4) 考察

得られた暦年代範囲の分布図を第51図に示す。なお木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の部分を測定すると最外部からの年輪分だけ古い年代が得られる（古木効果）。よって、最外年輪が確認されていない試料については、古木効果の影響を考慮しておく必要がある。

以下 2σ 暦年代範囲を基に述べる。土器編年との対応関係については、小林(2008)、小林編(2008)、藤尾(2009)を参照した。

PLD-15089は、 1σ 暦年代範囲で2398-2384calBC(6.6%)、2347-2281calBC(47.9%)、2250-2231calBC(10.5%)および2219-2212calBC(3.1%)、 2σ 暦年代範囲で2458-2418calBC(9.5%)、2408-2374calBC(11.6%)、2368-2271calBC(53.4%)および2259-2207calBC(20.9%)となり、紀元前25世紀中頃～同23世紀末の範囲を示した。これは縄文時代後期初頭にあたる。

PLD-15090は、 1σ 暦年代範囲で753-727calBC(13.0%)、693-686calBC(3.3%)、668-611calBC(24.6%)および597-542calBC(27.3%)、 2σ 暦年代範囲で766-514calBC(95.4%)となり、紀元前8世紀前半～同6世紀後半の範囲を示した。これは弥生時代前期にあたる。

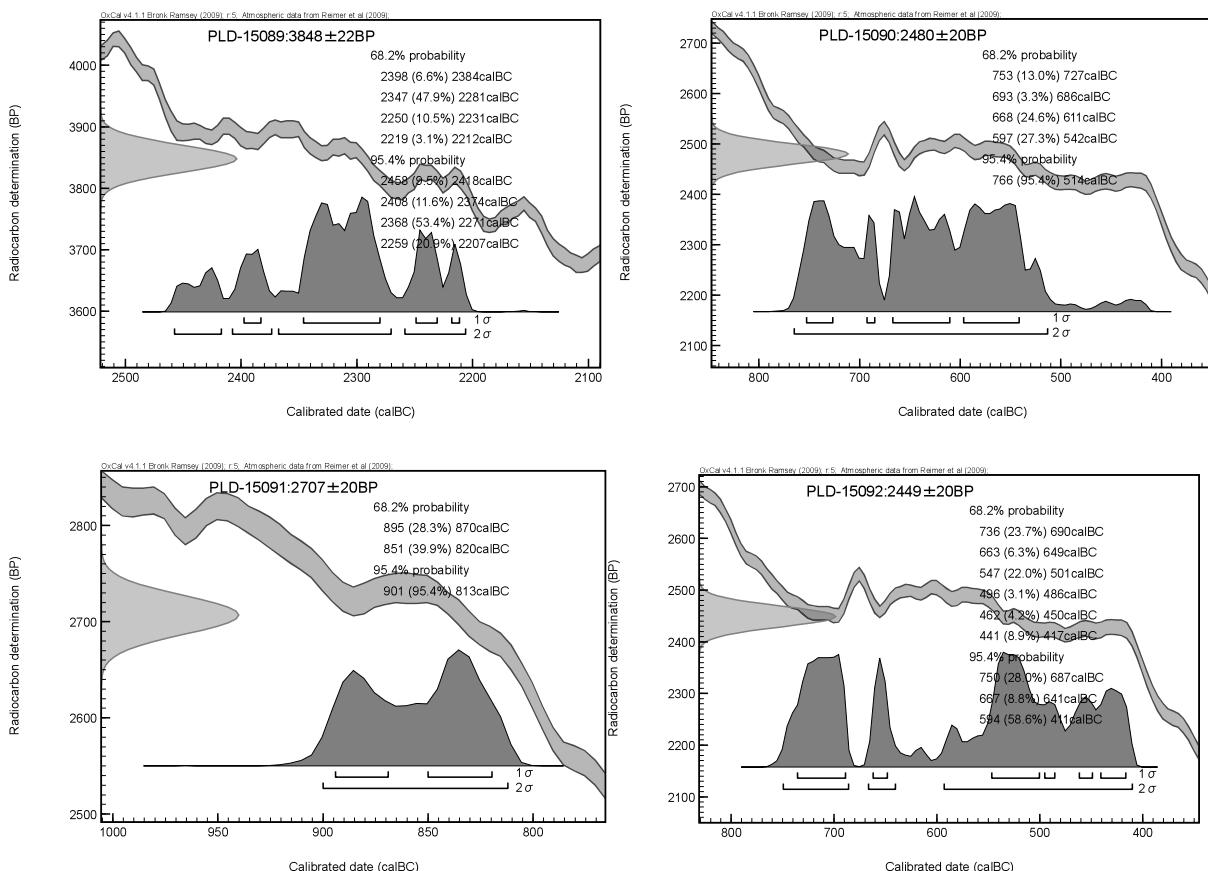
PLD-15091は、 1σ 暦年代範囲で895-870calBC(28.3%)および851-820calBC(39.9%)、 2σ 暦年代範囲で901-813calBC(95.4%)となり、紀元前10世紀末～同9世紀後半の範囲を示した。これは弥生時代早期にあたる。

PLD-15092は、 1σ 暦年代範囲で736-690calBC(23.7%)、663-649calBC(6.3%)、547-501calBC(22.0%)、496-486calBC(3.1%)、462-450calBC(4.2%)および441-417calBC(8.9%)、 2σ 暦年代範囲で750-687calBC(28.0%)、667-641calBC(8.8%)および594-411calBC(58.6%)となり、紀元前8世紀中頃～同5世紀後半の範囲を示した。これは弥生時代前期にあたる。

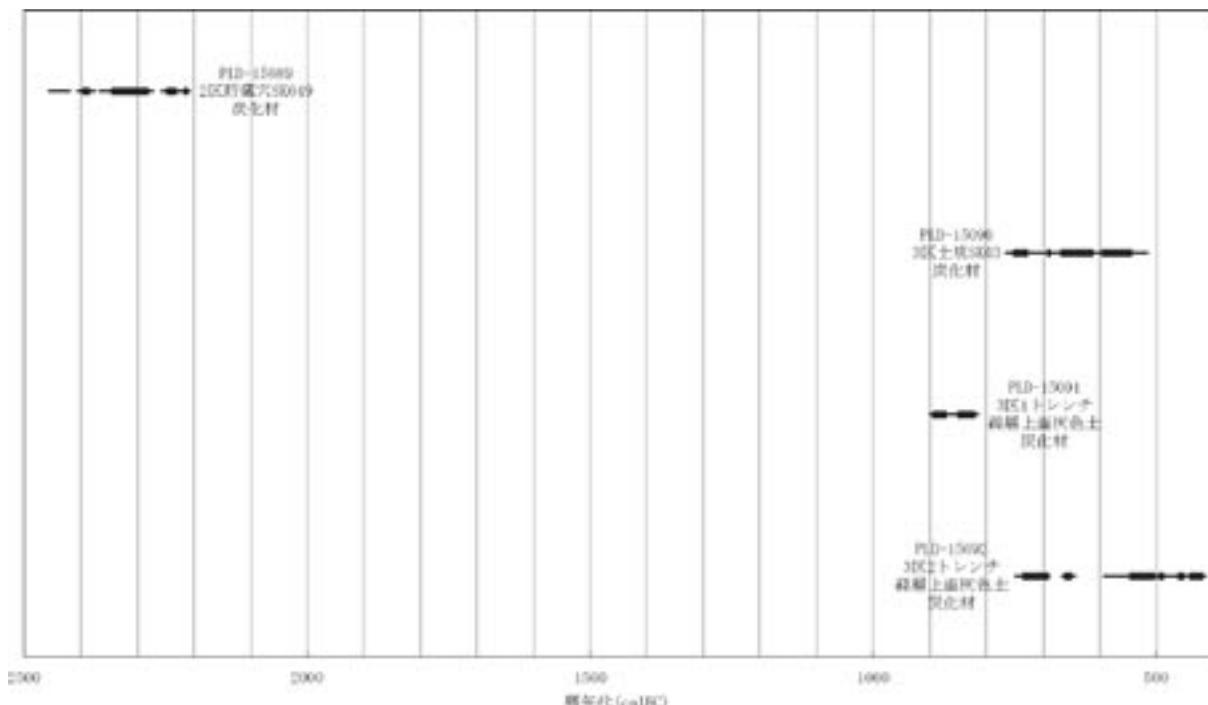
古木効果の影響を考慮する必要があるものの、3区1トレンチの試料はやや古く、土坑SK03出土試料と3区2トレンチの試料は年代に差は見られないという結果となり、出土状況との矛盾はない。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 藤尾慎一郎(2009)弥生時代の実年代. 新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 9-54, 雄山閣.
- 小林謙一(2008) 縄文時代の暦年代. 縄文時代の考古学2 歴史のものさし, 同成社, 257-269.
- 小林達雄編(2008) 総覧縄文土器. 1322p, アム・プロモーション.
- 中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0 ÷ 50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.



第 50 図 暦年較正結果



第 51 図 暦年代の分布 (太線: 1 σ , 細線: 2 σ)

第6章　まとめ

本調査地点は従来の遺跡分布地図では包蔵地外であったが、調査の結果、名子周辺の沖積地には縄文時代後期～弥生時代の遺跡が存在することが確認された。担当者の力量不足から明らかにし得ない点が多く、課題の残る調査となつたことは否めないが、以下の3点について記述し、まとめとしたい。

①第3次調査1区の土坑について

1区では土坑4基を検出し、当初これらの土坑は貯蔵穴と考えて作業を進めていた。しかし、埋土を水洗選別しても植物遺体がほとんど出土しないことから、貯蔵穴としての機能を終えて埋没したものか、あるいは、SK03からベンガラが出土したことから、墓壙の可能性を考え始めた。しかし、土層観察では全体的に自然堆積で、一度に埋め戻した土のようには見えない。ただ、SK01の3層とSK03の6層は筒状の堆積となっており、これらを標柱の痕跡と考えることも可能であろうか。第3章で述べたように、土層の識別が困難であったため、最も重要である土層観察に心許ない部分がある。

以上のように、貯蔵穴あるいは墓壙の可能性を考えながら掘り進めたが、現時点では判断がつかず、用途不明の土坑としておきたい。時期は縄文時代後期中頃と考えている。

②第3次調査2区の石入り土坑について

2区では多数の礫が入った土坑・ピットを検出した。第3章第3節で述べたように、調査中は人為的なものなのか、縄文時代のもののかさえ判断できなかった。調査終了後に類例の存在を知ったので、比較検討を行いたい。

屋久島横峯遺跡（註1）…縄文時代後期中葉～後葉を主体とする集落で、100基以上の竪穴住居址や土坑、溝が検出され、縄文時代の整地の可能性も指摘されている。土坑には石を含むものが多数検出されており、縦に立てかけた状態のものや、詰められた石の中央や隅に隙間を有するものもある。これらは石入り土坑とされ、柱穴の可能性が想定されている。石は根固めのために設置され、ピット内を埋めるように石が入っているものは、柱の抜き取りにより根固めの石が落ち込んだものと考えられている。

藤平小田遺跡（註2）…鹿児島県南種子町に所在する縄文時代後期の遺跡で、配石遺構、大型土坑、集石等が検出されている。配石遺構が65基確認されており、これらが名子遺跡の石入り土坑と類似している。配石遺構は調査区内の微高地を2列に弧状を呈するように分布している。配石が上部のみのもの、上部及び下部のもの、上部から下部のものに分類し、土坑状の掘り込みの有無も考慮されている。

本野原遺跡（註3）…宮崎市（旧田野町）に所在する旧石器時代から中世までの複合遺跡で、縄文時代中期後葉～晩期が主体となる。100基以上の竪穴住居址や掘立柱建物、土坑等が検出され、大規模な整地が行われている。数百基の土坑・ピットが環状に分布し、その中に礫が含まれるものがある。遺構上部の礫が柱を固定するように配置されているものは柱穴とされ、その他は貯蔵穴、立石、墓と推定されている。土坑出土遺物は少ないが、傾向として後期前葉～中葉の市来式土器が多いとされている。

以上の3遺跡はいずれも名子遺跡と時期的に近く、土坑の規模も50cm～1m未満のものが多い点で共通している。実測図・写真で見比べると、名子遺跡の石入り土坑は、屋久島横峯遺跡・藤平小田遺跡のものと似ている印象を受けた。ただし、藤平小田遺跡のように規則的な配置は認められない。一方、相違点も多く、屋久島横峯遺跡では土坑内の三方に縦方向に石があるものが多いこと、藤平小田遺跡では礫が一回り大きく、石皿や磨石を用いているものが多いこと、本野原遺跡では一つの土坑に礫があまり入っておらず、1～3点のものが多いこと等が挙げられる。名子遺跡で検出した石入り土坑は、規模の大小や、礫の入り方にバリエーションが見られ、藤平小田遺跡のように分類が可能かもしれない。SX103・105などのように礫に隙間が認められるものについては、屋久島横峯遺跡報告書で指摘されているように、柱穴の可能性が高いと考えている。個別図は掲載できていないが、SC126南東の石入り土

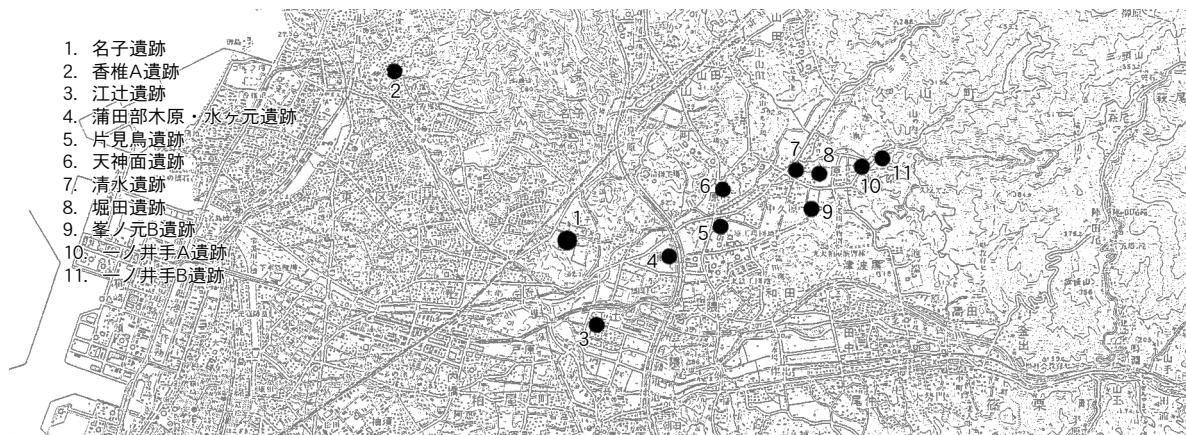
坑（図版 4-6）は明らかに中心に隙間が見られる。また、SB211 の柱穴とした SX116・127 は上層から多量の礫が見られ、下層では底面及び壁面に沿って礫が入っていた。これらも根固めと考えてよいであろうか。礫が上面にしか見られないものは、柱を抜き取った柱穴や廃棄土坑が埋没したものであろうか。先述のように後世に礫を廃棄したものの可能性もあるが、現時点ではいずれも推測の域を出ない。この土坑の性格や規則的な配置の有無等については今後の調査を待ちたい。

註 1 鹿児島国際大学国際文化学部博物館実習施設考古学ミュージアム編

2005『屋久島横峯遺跡』鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告 第2集

註 2 南種子町教育委員会編 2002『藤平小田遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

註 3 田野町教育委員会編 2004『本野原遺跡一』他 田野町文化財調査報告書 第48、51、52集



第 52 図 名子遺跡周辺の縄文時代遺跡分布図 (1/100000)

③名子遺跡出土の縄文土器と、粕屋平野における縄文時代後・晚期遺跡について

本調査では多量の縄文土器が出土したが、一部晩期土器を含むものの、大半は阿高系土器・小池原上層式・鐘崎式・北久根山式など、後期前半～中頃におさまるものと思われる。それ以外にも中津式・福田 K II 式や、キャリパー形の器形を呈する船元式と思われる瀬戸内系の土器片も出土しており、他地域との交流が窺われる。

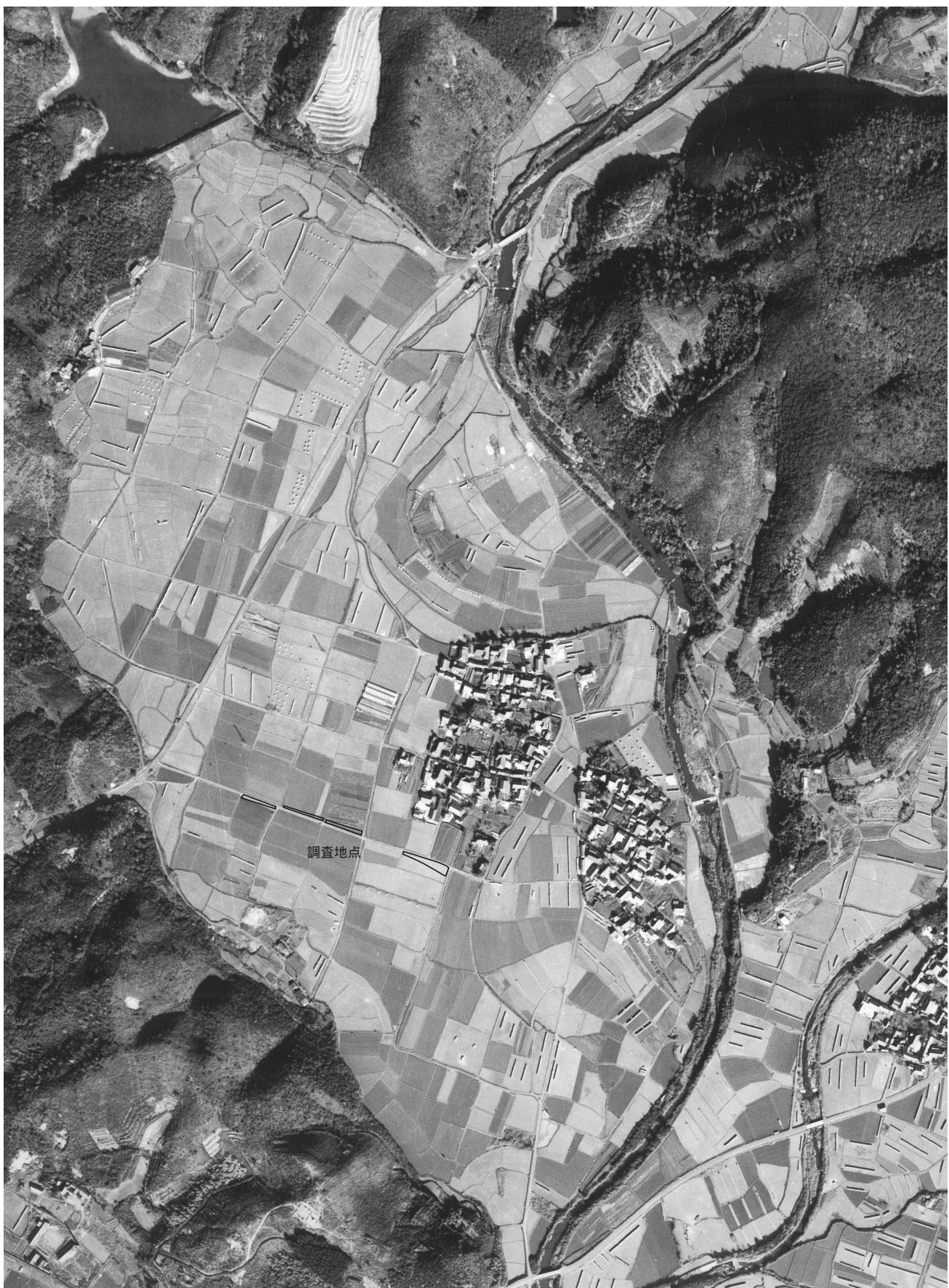
粕屋平野では縄文時代の遺跡が比較的多く把握されているが、管見では当該期の遺跡はあまり確認されていない。縄文時代中期の遺物は江辻遺跡、蒲田部木原遺跡、堀田遺跡等で確認されているものの明瞭な遺構はなく、後期前半の遺構は古賀市川原西遺跡で住居址が検出されているが、粕屋町・久山町周辺では確認されていないと思われる。後期中頃になると、江辻遺跡・片見鳥遺跡で竪穴住居址・遺構が確認され始め、後期後半には片見鳥遺跡に集落が移動することが想定されている。晩期には埋甕や多量の土器が出土した堀田遺跡を始めとして、一ノ井手 A 遺跡、峯ノ元 B 遺跡、清水遺跡、天神面遺跡など、久原川・新建川の上流へ遺跡が広がっていく。晩期末～弥生時代早期には再び江辻遺跡で当該期のまとまった土器が出土し、刻目突帯文土器の出現期の資料として注目される。弥生早期には引き続き江辻遺跡で松菊里型住居や大型掘立柱建物などが展開し、渡来系集落として著名である。

このように、これまで粕屋平野において縄文時代後期前半～中頃は空白地帯であったが、今回の名子遺跡の成果により、当該期の資料を提供することができた。調査の制限から不明な遺構も多々あるが、今後の周辺調査で明らかになることを期待したい。なお、近年蒲田水ヶ元遺跡で縄文時代後期中頃と思われる石組炉をもつ竪穴住居址が、香椎 A 遺跡では遺物包含層から多量の後・晩期土器が出土するなど、縄文時代資料が著しく増加しており、研究の進展が期待される。

【参考文献】

江上智恵 2007「糟屋平野における縄文時代後・晚期集落の様相」『古文化談叢』第57集 九州古文化研究会

図 版



名子遺跡周辺航空写真（昭和30年頃撮影）

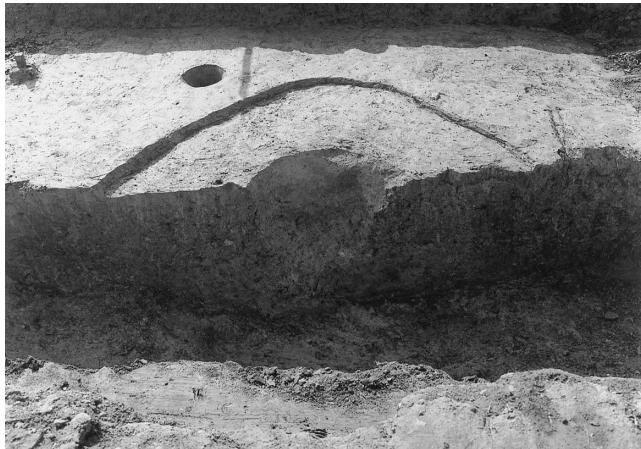
図版 2



1. 第3次調査1区全景(西より)



2. SK01 検出状況(南東より)



3. SK01 土層断面(北より)



4. SK01 完掘状況(北より)



5. SK02 検出状況(南より)



6. SK02 土層断面(東より)



7. SK03 完掘状況(北より)



1. 2区1～5グリッド検出状況（東より）



2. 2区1～5グリッド2段目検出状況（東より）



3. 2区6～9グリッド検出状況（東より）



4. 2区1～9グリッド全景（西より）



5. 2区西半全景（東より）



6. SB211（南西より）



7. SX116 検出状況（南より）

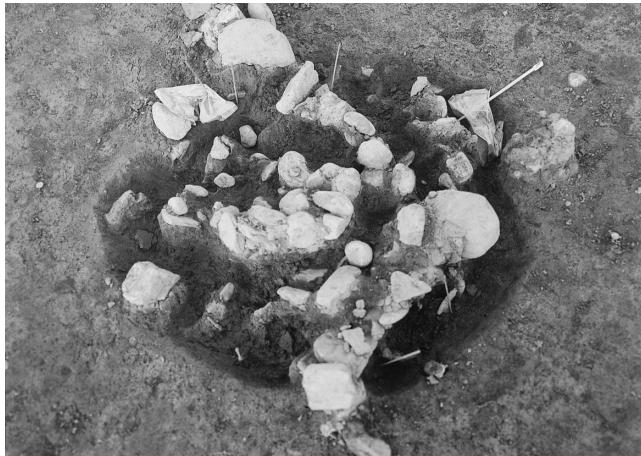


8. SX116 土層断面（北より）

図版 4



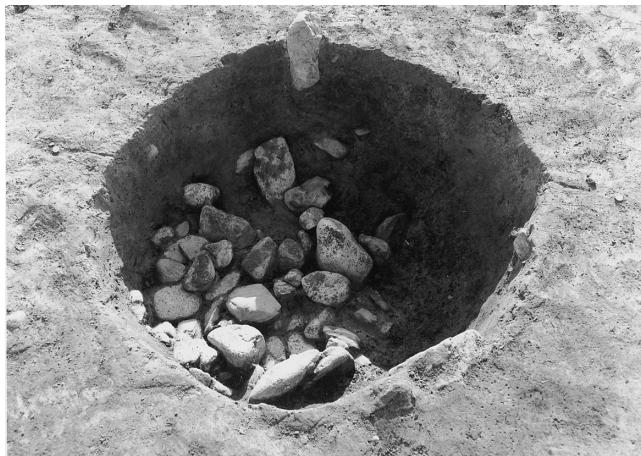
1 . SX116 下層礫検出状況 (南より)



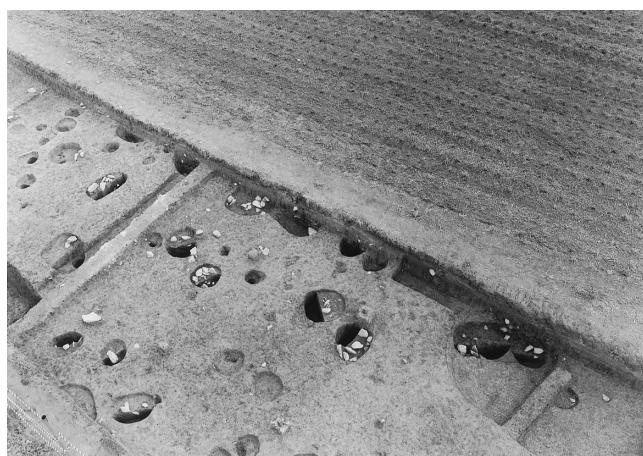
2 . SX127 検出状況 (南より)



3 . SX127 土層断面 (南より)



4 . SX127 下層礫検出状況 (北より)



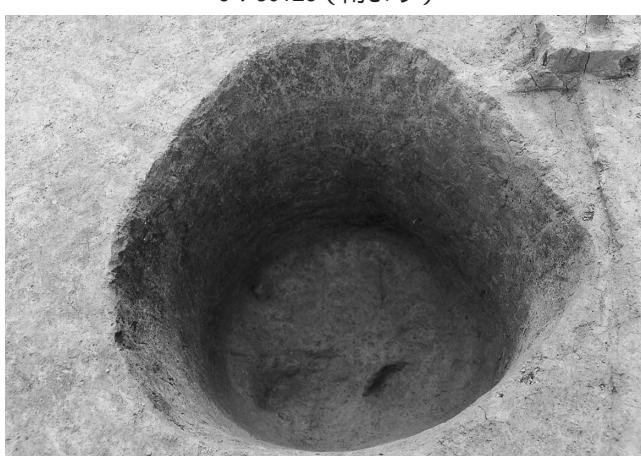
5 . SB212・213・214 周辺 (南東より)



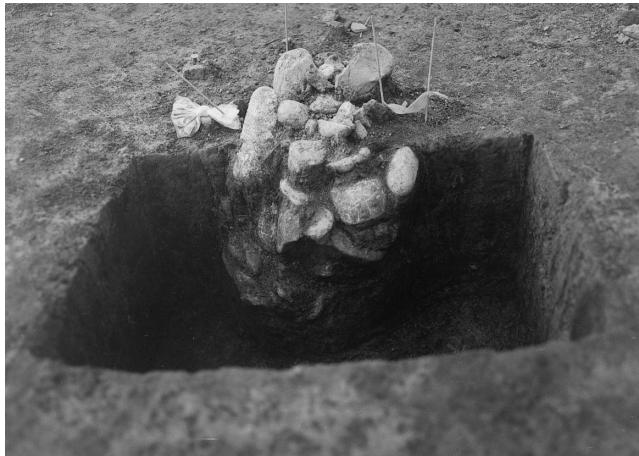
6 . SC126 (南より)



7 . SK149 土層断面 (南より)



8 . SK149 完掘状況 (北より)



1 . SX104 斷ち割り状況 (東より)



2 . SX109 検出状況 (南より)



3 . SX109 土層断面 (南より)



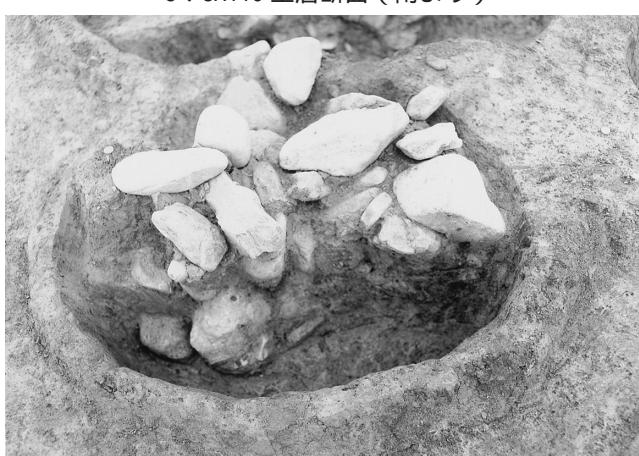
4 . SX110 検出状況 (南より)



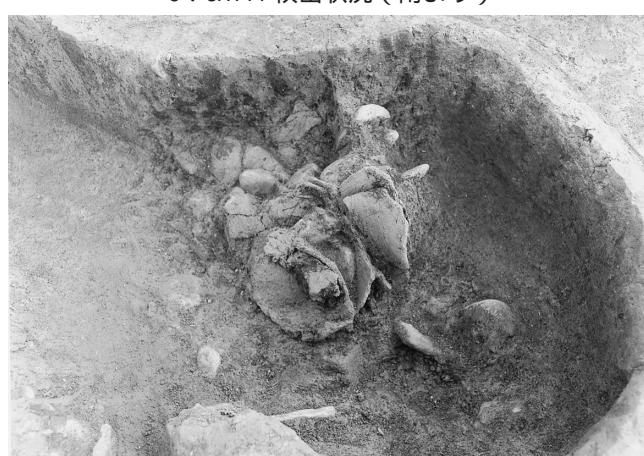
5 . SX110 土層断面 (南より)



6 . SX111 検出状況 (南より)



7 . SX111 土層断面 (南より)



8 . SX111 遺物出土状況 (西より)

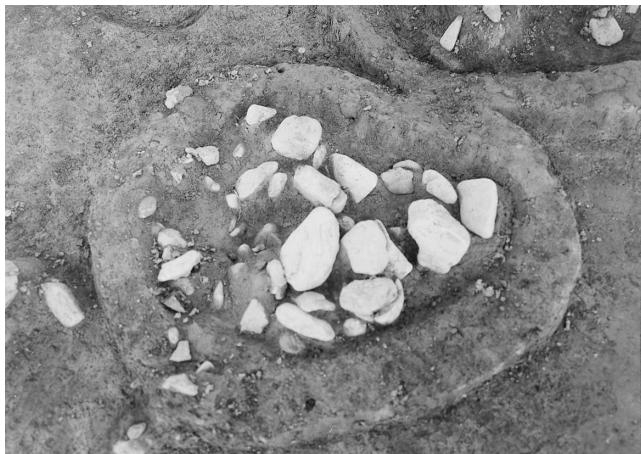
図版 6



1 . SX113 斷ち割り状況 (東より)



2 . SX114 検出状況 (南より)



3 . SX117 検出状況 (西より)



4 . SX117 下層礫検出状況 (東より)



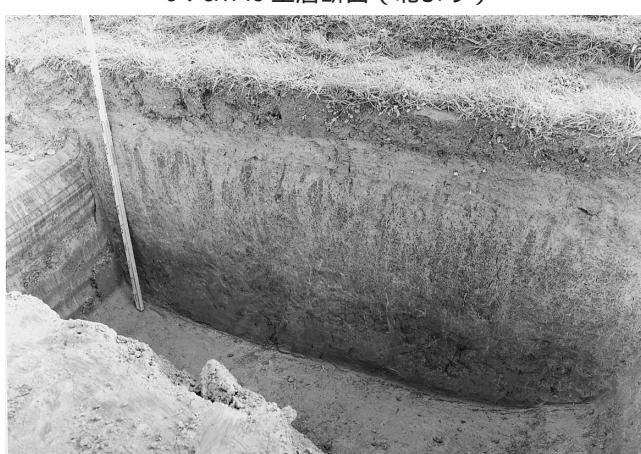
5 . SX121 土層断面 (南より)



6 . SX148 土層断面 (北より)



7 . SX206 遺物出土状況 (北より)



8 . 1 ~ 2 グリッド南壁土層



1. 第3次調査3区全景（東より）



2. 2トレンチ土層（北より）



3. 3区南東端トレンチ土層（北東より）



4. 3区西半（北東より）

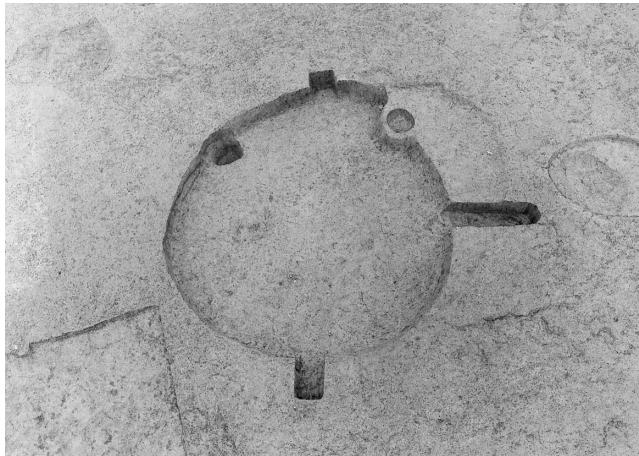


6. SD307完掘状況（北より）



5. SD302・307土層断面（北より）

図版 8



1 . SK301 完掘状況 (南東より)



2 . SK303 遺物出土状況 (北より)



3 . SK303 土層ベルト (東より)



4 . SK303 完掘状況 (東より)



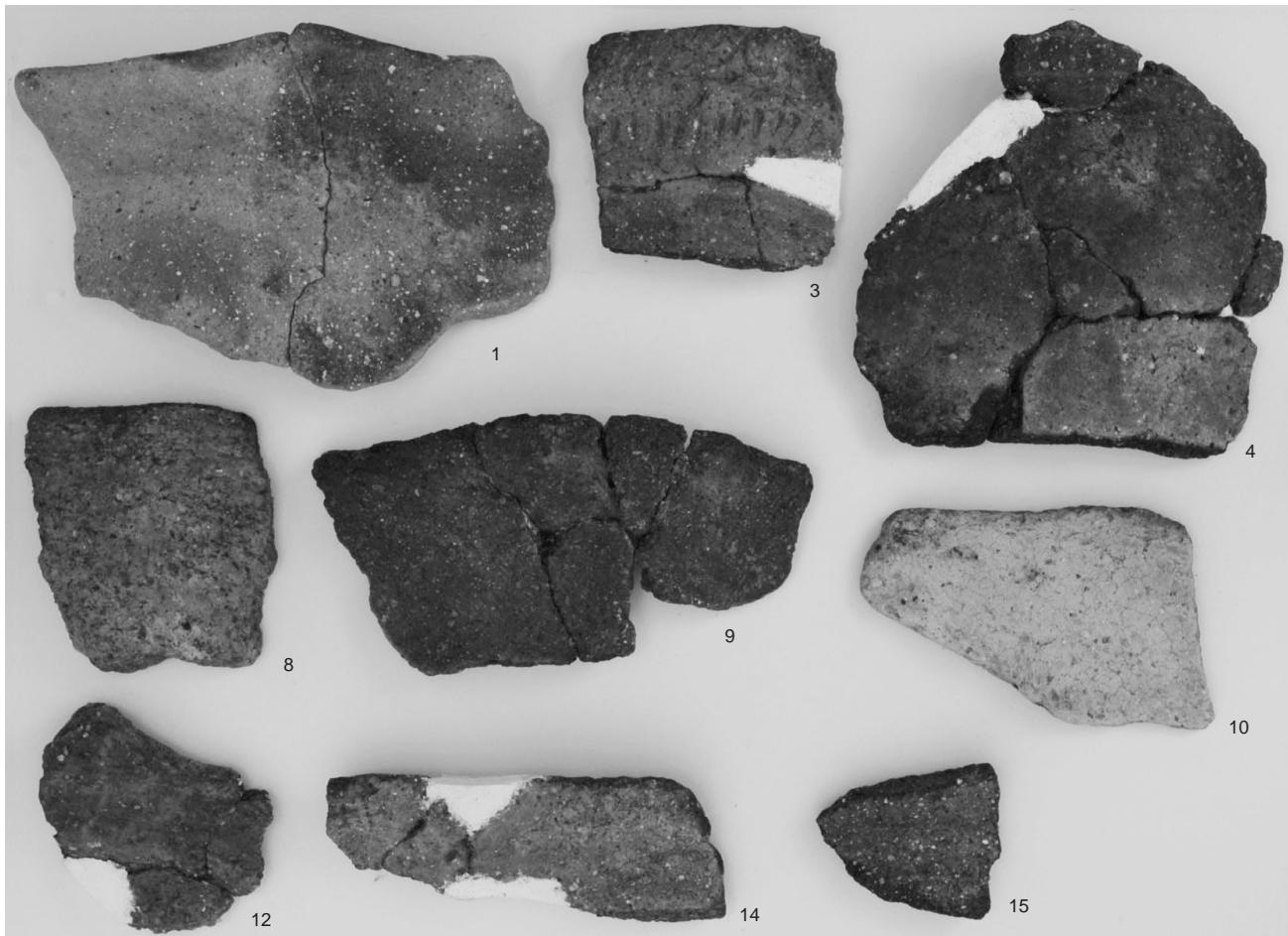
5 . 第 4 次調査区全景 (東より)



6 . SK01 完掘状況 (南より)



7 . 名子に残る索道の支柱



1. 第3次調査1区出土土器

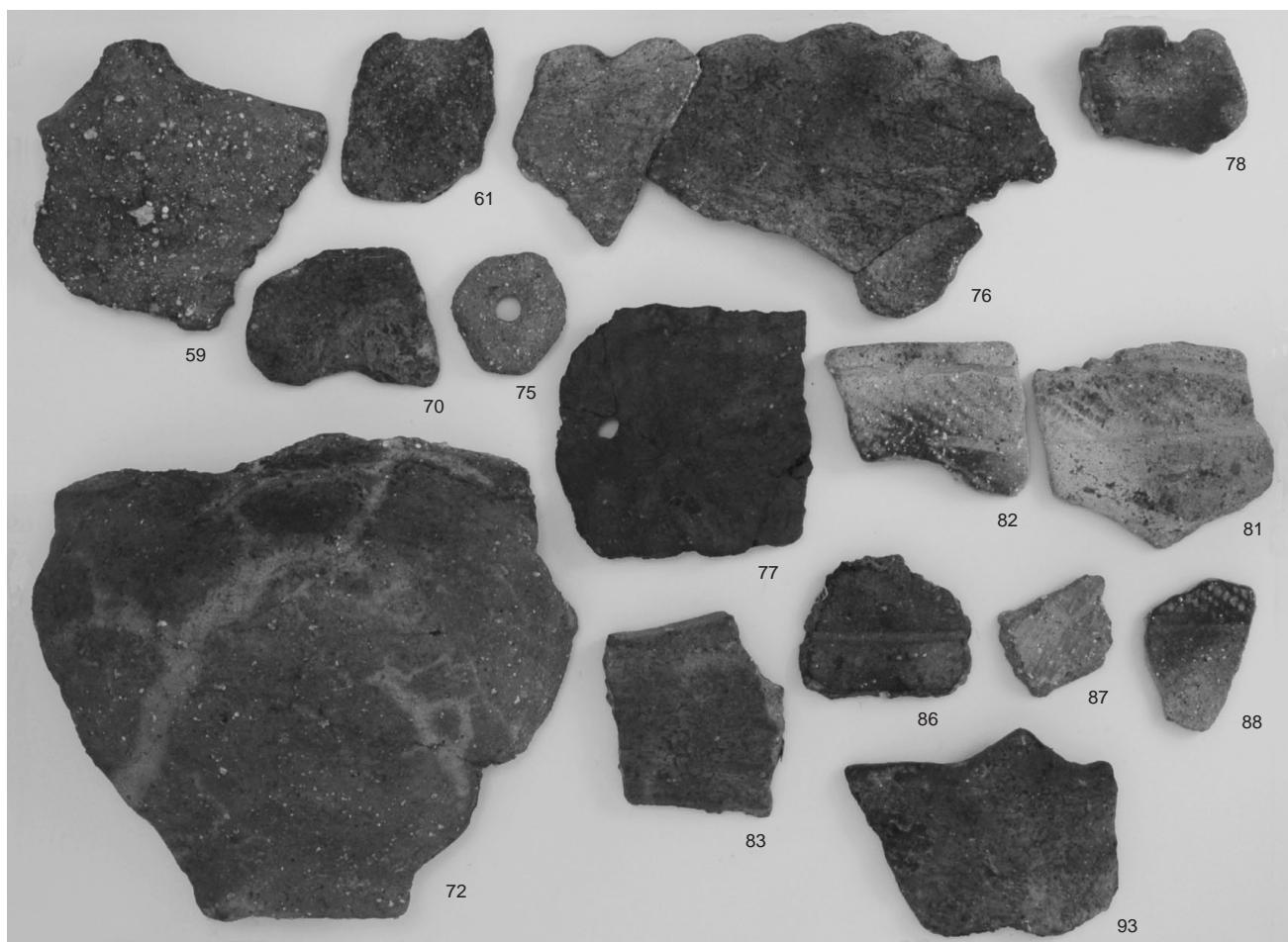


2. 第3次調査1区出土石器

図版 10



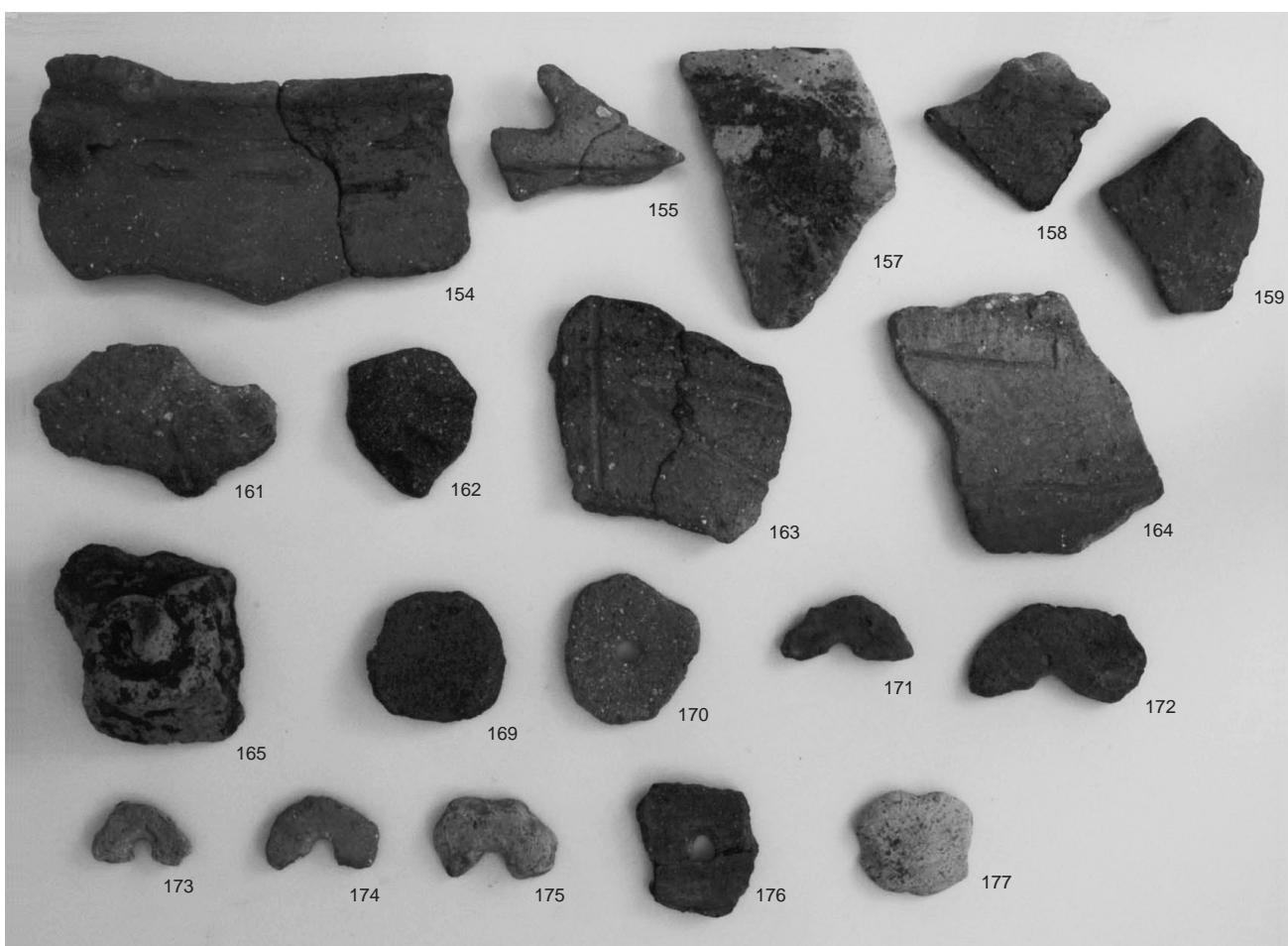
1. 第3次調査2区出土土器



2. 第3次調査2区出土土器

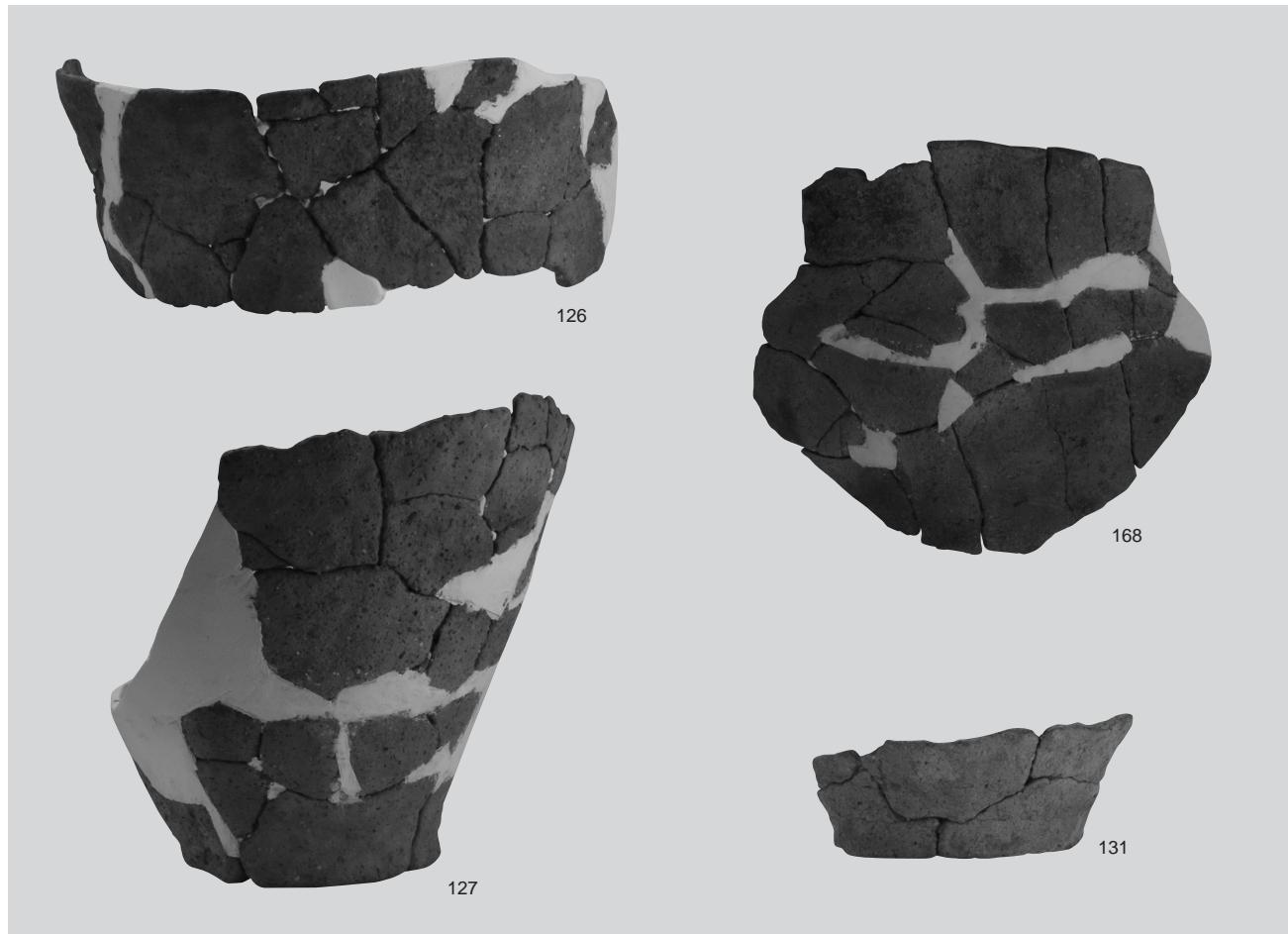


1. 第3次調査2区出土土器

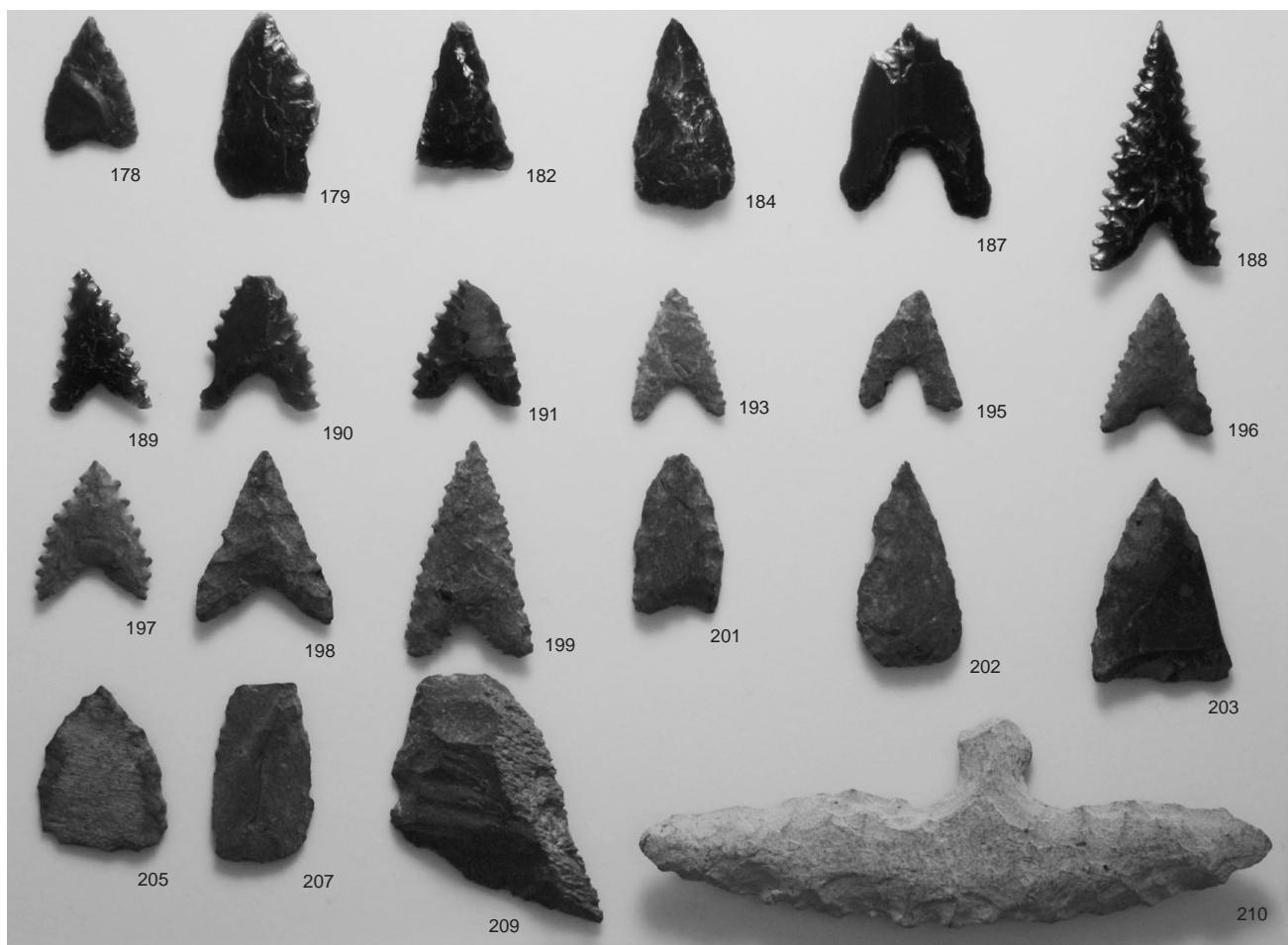


2. 第3次調査2区出土土器

図版 12



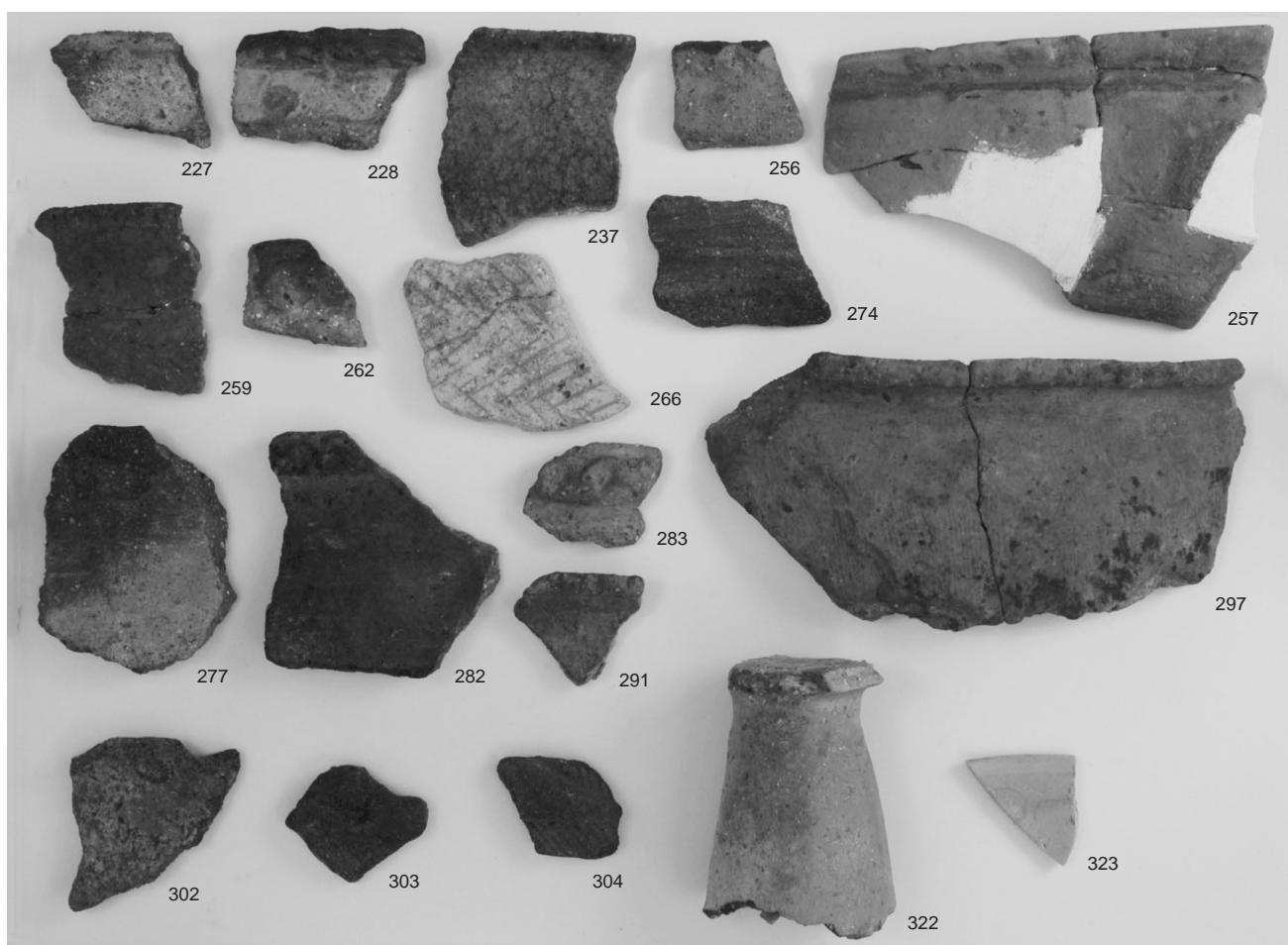
1. 第3次調査2区出土土器



2. 第3次調査2区出土石器



1. 第3次調査2区出土石器



2. 第3次調査3区出土土器

図版 14



1. 第3次調査3区出土土器



2. 第3次調査3区出土石器

報告書抄録

ふりがな	なごいせき1							
書名	名子遺跡1							
副書名	第3次・第4次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1123集							
編著者名	今井隆博(編) 田上勇一郎 株式会社パレオ・ラボ							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2011年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ′ ″	東緯 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
なごいせき 名子遺跡 だいさんじょうさ 第3次調査	ふくおかしひがしくなご 福岡市東区名子 いっちょうめちない 1丁目地内	市町村 40131	遺跡番号 2829	33° 38' 15"	130° 28' 28"	2007.12.05 ～ 2008.02.01	730m ²	記録保存 調査
なごいせき 名子遺跡 だいよじょうさ 第4次調査	ふくおかしひがしくなご 福岡市東区名子 いっちょうめちない 1丁目地内	40131	2829	33° 38' 15"	130° 28' 28"	2008.04.07 ～ 2008.04.21	120m ²	記録保存 調査
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
名子遺跡 第3次調査	集落	縄文時代 ・ 弥生時代	竪穴住居・ 掘立柱建物・ 貯蔵穴・土坑・溝・ ピット	縄文土器・ 弥生土器・須恵器・ 石器		縄文時代後期及び 弥生時代前期～ 中期の集落を確認		
名子遺跡 第4次調査	集落	縄文時代	土坑・ピット	縄文土器		縄文時代後期と 思われる遺構・ 遺物を確認		
要約	調査地点は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、調査の結果、縄文時代後期及び 弥生時代前期～中期を中心とする集落を確認した。特に第3次調査2区では、縄文 時代後期の遺物が多数出土した。隣接する第4次調査地点の遺構密度は散漫だつ たものの、周辺には当該時期の遺跡が残っている可能性が高い。							

なごいせき 名子遺跡1

-第3次・第4次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1123集

2011年(平成23年)3月18日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

TEL(092)711-4667

印刷 株式会社宣技堂

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-47

TEL(092)641-4535

